

其背不獲其身。行其庭不見其人。无咎。○初六。良其趾。无咎。利永貞。○六二。良其腓。不拯其隨。其心不快。○九三。良其限。列其夤。厲薰心。○六四。良其身。无咎。○六五。良其輔。言有序。悔亡。○上九。教良吉。

其背に良りて其身を獲ず。其庭に行いて其人を見ず。咎無し○初六は其趾に良る。咎無し。永貞に利し○六二は其腓に良る。拯はずして其れ隨ふ。其心快ならず○九三は其限に良る。其夤を列く。厲くして心を薰す○六四は其身に良る。咎無し○六五は其輔に良る。言、序あり。悔亡○上九は良るに教し。吉なり。

● 卦名、とゞまらざる意 ● 人の一身は全部行動けども唯管のみは動かす是れ正に止まるべき時也、形體の身はあれども恰も其身を有せざるが如し ● 其行くべき時に行き、其止まるべき時には止まりて其の見る所は唯だ道理の一點にあり故に其處に行きて其人を見ずといふ ● あしうちは動くときにも止まるべきにも其始終を成すもの也、故に始を慎み終を慎めば咎なしと也 ● 始終一貫して貞正の徳を守るべきをいふ ● 勝は應と反對也、俗のいはゆるよくちはず也 ● 行止之に隨ひて自由を得ざる事 ● 身體に於て上下の際を成す所即ち腹をいふ ● 腹は中脊に當る所の肉にして腰と連絡するもの也、列は裂と同じことなり ● 危險にして心中をいらくことするをいふ驚は驚と同じ、ふすべし意なり ● 自ら其分を知りて止まりて行かざるをいふ ● 危殆にして心中をいらくこと口舌といふに同じ ● 止まるべき所に止まりて始終變ぜざるをいふ ● 輔に上あて。

三三三 艮下 風山漸

漸は女歸するに吉なり。貞に利し○初六は鴻、干に漸む。小子厲うして言あれども、咎無し○六二は鴻、磐に漸む。飲食行たり。吉なり○九三は鴻、陸に漸む。夫征いて復らず、婦孕んで育せず。凶なり。寇を禦ぐに利し○六四は鴻、木に漸む。或は其桷を得。咎無し○九五は鴻、陵に漸む。婦三歳まで孕まず、終に之に勝つことなし。吉なり○上九は鴻、陸に漸む。其羽用つて儀と爲すべし。吉なり。

● 卦名、すゝむと訓ず ● 女子の嫁するをいふ ● 鳥名はほとりの事 ● 水運をいふ ● 衆人の危疑を致して非難の言を受くることあれども其咎にあらずと也 ● いはの事、石の安平なるもの也 ● 和協の貌 ● 地の高く平なる處、鴻は水鳥なり、陸は其安んずる所にあらず ● 子を孕めども、夫の種ならざれば之を養育すること能はず、其道を失ふをいふ ● 自ら守りて外侮を受くべからざる意 ● たるきの事、樹反のたらしとなるべきもの即ち橋平の枝をいふ ● 夫婦相和せざるをいふ ● 邪道は正道に勝つこと能はざるをいふ ● 陸は常に遠に作るべし、晋や、くもごと訓ず、天上を指す ● 其衷以て禮儀を行ふに用ふべきをいふ

三三三 兌下 雷澤歸妹

漸。女歸。吉。利貞。○初六。鴻漸于干。小子厲。有言。无咎。○六二。鴻漸于磐。飲食。行。吉。○九三。鴻漸于陸。夫征。不復。婦孕。不育。凶。利。禦寇。○六四。鴻漸于木。或得。其桷。无咎。○九五。鴻漸于陵。婦三歲。不孕。終莫之勝。○上九。鴻漸于陸。其羽可用爲儀。吉。

歸妹。征凶。无攸利。○初九。歸妹。以娣。跛能履。征吉。○九二。眇能視。利幽人之貞。○六三。歸妹。以須。反歸。以娣。○九四。歸妹。愆期。遲歸。有時。○六五。帝乙歸妹。其君之袂。不如其娣之袂良。○上六。女承筐。无實。士刲羊无血。无攸利。

歸妹は征けば凶なり。利しき攸無し。○初九は妹を歸ぐに娣を以てす。跛能履。征けば吉なり。○九二は眇能く視る。幽人の貞に利し。○六三は妹を歸ぐに須を以てす。反つて歸するに娣を以てす。○九四は妹を歸ぐに期を愆つ。遅く歸せば時あり。○六五は帝乙妹を歸ぐ。其君の袂は、其娣の袂の良きに如かず。月望に幾し。吉なり。○上六は女、筐を承けて實無く、士、羊を刲いて血無し。利しき攸なし。

● 卦名、嫁入りすること又妹を嫁入らすこと ● 女弟をいふ、嫁する時に従ひゆくをひ人也 ● 獨立の行なきこと、跛者の能く歩むが如きをいふ ● すがたよく視るといへども不完全を免れず、之を推し通すは宜しからず ● 隱者を指す ● 醜妾の稱、或は云ふ須は待也、未だ人に適かざる者也 ● 其正しからざれば人に樂てらる、貞正の徳あるものを以て之に代ふるをいふ ● 時期を失すること ● 期を遅れて歸ぐにはいそぐべからざるをいふ ● 其附添の衣服よりも質素なるをいふ ● 帝妹徳あり満心することなし、恰も月の満月に近きも満たざるが如きをいふ ● 竹器なりかたみと訓ず女之を承けて祭祀を助け居れども其實(そなへ物)なれば何を以て之を薦むるを得んや ● 男が羊の犠牲をさきても、血なきときは何を以て之を薦めんや、かくの如く歸見の履行はされば眞の夫婦たること能はず、眞の夫婦たらざして如何て嫁を薦むることを得んやの意

豐亨。王假之。勿憂。宜日中。○初九。遇其配主。雖旬无咎。往有尙。○六二。豐其蔀。日中見斗。往得疑疾。有孚發若。吉。○九三。豐其沛。日中見沫。折其右肱。无咎。○九四。豐其蔀。日中見斗。遇其夷主。吉。○六五。來章。有慶譽。吉。○上

豐を亨る。王、之に假る。憂ふること勿れ。日中に宜し。○初九は其配主に遇ふ。旬しと雖も咎無し。往けば尙ばるゝことあり。○六二は其蔀を豐にす。日中に斗を見る。往けば疑疾を得。孚ありて發若すれば吉なり。○九三は其沛を豐にす。日中に沫を見る。其右肱を折る。咎無し。○九四は其蔀を豐にす。日中に斗を見る。其夷主に遇へば吉なり。○六五は章を來せば慶譽ありて吉なり。○上六は其屋を豐にす。其家を蔀ふ。其戸を闕ふに、聞として其れ人無し。三歳まで覲す。凶なり。

● 卦名、ゆたかと訓ず ● 豐大に至るものは唯王者のみ之意 ● 日中すれば必ず傾く、故に常に日中の心得を以て心を持つをいふ ● 相ならぶべき人を指す ● 陽と陰と相違ふ其勢のひとしといへども明動相持ちて用を爲す故に咎なし ● 日を障へる蔀を大にすれば暗きところ隨つて大なり ● 北斗星なり ● うたがひにくるまるゝをいふ ● 誠心ありて自發的に動作すれば吉を得るの意 ● 蔀は幕の類、内部を蔽ふもの也 ●

離下 雷火豐

六。其屋。其家。闕其戶。三歲不覿凶。

旅。小亨。旅貞吉。○初六。旅。取。○六二。旅。○九三。旅。○九四。旅。○九五。旅。○上九。旅。

屋の微小にして無敵なるもの、俗のぬかばし也。右旅は活動の手也、之を折るとは爲すこと能はざるの義也。爲すこと能はざれば唯自ら守るべし、何の咎か之れ有らん。己と等しき地位の人を指す。中正の徳ある文明の賢臣を迎へ來らば、慶福と名譽を得て吉なりとの意。其屋を厚くし其家を蔽ふ、暗黒の道也。與に測むものなきをいふ。相見ざるを得ずといふ意。

三三 艮下 火山旅

旅は小しく亨る。旅貞なれば吉なり。○初六は旅して瑣瑣たり。斯れ其の災を取る所なり。○六二は旅して次に即く。其資を懐き、童僕の貞を得。○九三は旅して其資を焚く。其童僕を喪ふ。貞なれども厲し。○九四は旅して于に處る。其資を我が必快からず。○六五は雉を射て一矢亡ふ。終に以て譽命あり。○上九は鳥、其巢を焚く。旅人先に笑ひ後に號咷す。牛を易に喪ふ。凶なり。

● 卦石、たびすること又旅人の象とす。● 旅人外に在るとき中順の徳を以て明者に附くべきをいふ。● 瑣末なる賤しきことをする貌。● 宿舎を得たること。● 旅中の費用に不足なきこと。● 従者の老順なること。● 相當の場所にて資本を得たるをいふ。資本あれば專斷的に事を決するを得べし、故に資斧といふ、資と斧と二者に別つべきにあらず。● されど水住不變の場所にあらず、心多少之に惑はざるを得ざる也。● 其得る所の多く

終以譽命。○上九。鳥焚其巢。旅人先笑後號咷。喪牛于易。凶。

巽。小亨。利有攸往。利見大人。○初六。進退。利武人之貞。○九二。巽在牀下。用史巫。○九三。頻。○九四。頻。○九五。貞。○上九。貞。利。無初。有終。先庚三日。後

三三 巽下 巽爲風

巽は小しく亨る。往く攸あるに利し。大人を見るに利し。○初六は進退す。武人の貞に利し。○九二は巽して牀下に在り。史巫を用ふること紛若たり。吉にして咎無し。○九三は頻に巽ふ。吝なり。○六四は悔亡ぶ。田して三品を獲。○九五は貞にして吉。悔亡ぶ。利しからざること無し。初なくして終あり。庚に先だつこと三日。庚に後ること三日。吉なり。○上九は巽して牀下に在り。其資斧を喪ふ。貞なれども凶なり。

● 卦石、したがふと訓じ又いと訓ず。● 或は進み或は退き、未決すること能はざる意。● 武人剛貞の徳にしがたがひ巽順に通じざるをよしとす。● 下位にありて巽順なると。● 神明に接する人を史巫といふ、紛若とは其多きをいふ、丁寧反復して誠意を上に通ぜんことを求むる也。● 不遜に失して頻頻に巽順の態度をくりかへすは

庚三日吉。○
上九巽在林
下。喪其資斧。
貞凶。

兌。亨。利貞。○
初九。和兌。吉。
○九二。孚兌。
吉。悔亡。○六
三。來兌。凶。○
九四。商兌。未
寧。介疾有喜。
○九五。孚于
剝。有厲。○上
六。引兌。

吝を招く所以也 ① 狩獵のこと ② 一に乾豆、二に賓客、三に君の腹を充たる者 ③ 天に十日あり甲に始ま
りて突に終る、庚は更也、命令變更の始とす。庚に先だつこと三日は丁より己に至る、日の始とあらず、庚に後る
、こと三日は辛より癸に至る、日の終也、故に曰く初めなくして終ありと

兌下 兌爲澤

兌は亨る。貞に利し○初九は和して兌ぶ。吉なり○九二は孚ありて兌ぶ。吉に
して悔亡ぶ○六三は來りて兌ぶ。凶なり○九四は商りて兌ぶ。未だ寧からず。
介として疾めば喜あり○九五は剝に孚あり。厲きことあり○上六は引いて兌
ぶ。

● 兌は上るこぶと訓ず又うれしくもふこと ● 商量裁判する意 ● 取舍未だ決せず其心未だ安定を得ざる
をいふ ● 兩間を介といふ、分限の事也、介然として分限を守り邪惡をにくみ遠ざかれれば心必ずよること
ありと也 ● 君子を密するもの即ち小人を指す、小人の態度外に信を示して内然らざるものあり、茫然之に對む
は危險の道也 ● 險を以て隨に従ひ互に相牽引して悦ぶ也

坎下 風水洩

渙。亨。王假有
廟。利涉大川。
利貞。○初六。
用拯馬壯吉。
○九二。渙奔
其机。悔亡。○
六三。渙其躬。
无悔。○六四。
渙其羣。元吉。
渙有丘。匪夷
所思。○九五。
渙汗其大號。
○上九。渙其
血。去逖出。无
咎。

渙は亨る。王、有廟に假る。大川を渉るに利し。貞に利し○初六は用つて拯ぶ。
馬壯なれば吉なり○九二は渙するとき其机に奔る。悔亡ぶ○六三は其躬を渙す。
悔無し○六四は其羣を渙す。元吉なり。渙するとき丘のごときものあり。夷の
思ふ所に匪ず○九五は渙するとき其大號を汗にす。王居を渙すれば咎無し。上
九は其血を渙す。去つて逖く出づ。咎無し。

● 卦名、ちると訓ず、とくと訓ず ● 宗廟に神靈を祀りて離れたる天下の人心を服従せしむる意 ● 之を拯
ぶに牡馬の氣を以てすれば必ず利あるをいふ ● 机はかしまぎき即ち喘息の事、漚りかゝりて身の疲を安んずる
もの也 ● 上下の間交々相感孕し、能く其機を有せず、以て上の事に従ふをいふ ● 群は私に相與する朋黨を
いふ、之を散じて君國の爲に其私を忘る、こと也、或に云ふ天下僉兆の險難を散ずるなりと ● 其時民心之に懐き
て聚まること丘山の如くなるをいふ ● 夷は常也、常人の思慮の及ぶにあらざる意 ● 人心遠散するときは
救攝するに大號令を以てし汗の一たび出でて反らざるが如くするをいふ、一説には天下の險難を散ずる際は大號令
を出すといへり ● 王居即ち王の所に蓋ふる所の金殿を渙して之を掃ふを云ふ、一説には天下險難の散ずると
き王は其位に在りて安全なりといへり。もし然りとすれば「渙するとき王居りて咎なし」と讀むを要す ● 血は
傷害の意 ● 傷害に遭かるに逖く身を退くるに在り、一説に險難の極に當りては血を出すの勞苦を見るべし
故に千里の外に跋涉して之の險難を救ふ也といへり

節。亨。苦節不
可貞。○初九。
不出。庭。无
咎。○九二。不
出門。庭。凶。○
六三。不節。若
則嗟。若。无咎。
○六四。安節。
亨。○九五。甘
節。吉。往。有尙。
○上六。苦節。
貞凶。悔亡。

中孚。豚魚吉。
利涉大川。利
貞。○初九。虞

兌下 坎上 水澤節

節は亨る。苦節貞にすべからず。○初九は戸庭を出でず。咎無し。○九二は門庭を出でず。凶なり。○六三は節若たらざれば則ち嗟若たり。咎無し。○六四は節に安んず。亨る。○九五は節を甘んず。吉なり。往けば尙ばるゝことあり。○上六は苦節、貞なれども凶なり。悔亡ぶ。

● 卦名、ほどをつくること ● 過不及なきをいふ ● 節に過ぎて窮するを云ふ ● 内を戸といひ、外を門といふ。戸庭は即ち戸外の庭にして中門の内在り、以て妄に上進せざるに譬ふ ● ひきしめて程よくせざれば憂となり嗟となるをいふ ● 勉強せずして節を守ることを ● 満足して節を守ること ● 其不節に嗟かんよりは憂る苦に失せん故に悔ありといへども終には之を亡ぼすことを得べしと也

兌下 震上 風澤中孚

中孚は豚魚吉なり。大川を渉るに利し。貞に利し。○初九は虞なれば吉なり。○九二は鳴鶴、陰に在り。其子之に和す。我に好爵あり。吾、爾

吉。有它不燕。
○九二。鳴鶴
在陰。其子和
之。我有好爵。
吾與爾靡之。
○六三。得敵。
或鼓或罷。或
泣或歌。○六
四。月幾望。馬
匹亡。无咎。○
九五。有孚擊
如。无咎。○上
九。翰音登于
天。貞凶。

小過。亨。利貞。
可小事。不可
大事。飛鳥遺

に與へて之を靡がん。○六三は敵を得て、或は鼓うち或は罷め、或は泣き、或は歌ふ。○六四は月、望に幾し。馬匹亡ぶ。咎無し。○九五は孚あり擊如たり。咎無し。上九は翰音天に登る。貞なれども凶なり。

● 卦名、心の中にあること ● 豚も鳥も無智の物なり中心誠あれば無智の物も亦感動するをいふ ● 或は事と説く、心を一に繋ぐ意也。或は度と説く、其是非を察する意也。或は安と説く、心を安する意也 ● 若し志を變じて他に求むることあれば其安んずべき所を失ひて安からざるに至らんといふ ● 上下の間誠心相通すること猶ほ鶴の陰處に在りて鳴けば其子之に和するが如くなるをいふ ● 中心誠ならざれば志相阻して敵となる也 ● 一樂一憂の常なきをいふ ● 月、日、光を象くる意、以て人臣が正位を得て君に近づくに比す ● 馬の群類なり其亡ぶとは私欲を絶つ意也 ● 君臣相遇ふ、手をひき合つて離れざるが如きをいふ ● 鳥の羽音が天に聞ゆる意其言なくして其の志従らば高きに喩ふ

震下 雷山小過

小過は亨る。貞に利し。小事に可にして大事に不可なり。飛鳥之が音を遺す。上に宜しからず。下るに宜し。大吉なり。○初六は飛鳥なれば以て凶なり。○六二

之音。不。宜。上。宜。下。大吉。○初六。飛鳥以凶。○六二。過其祖。遇其妣。不及其君。遇其臣。无咎。○九三。弗過防之。從或戕之。○九四。无咎。弗過遇之。往厲。必戒。勿用。○永貞。○六五。密雲不雨。自我西郊。公弋取彼在穴。○上六。弗遇過之。飛鳥離之。凶。是謂災眚。

是其祖を過ぎて、其妣に遇ふ。其君に及ばずして、其臣に遇ふ。咎無し○九三は過ぐるにあらず。之を防げ、從はば或は之を戕はん。凶なり○九四は咎無し。過ぐるにあらず之に遇ふ。往けば厲し。必ず戒めて永貞を用ふること勿れ○六五は密雲雨ふらず、我が西郊よりす。公、弋して彼の穴に在るを取る○上六は遇はずして之に過ぐ。飛鳥之に離る。凶なり。是を災眚と謂ふ。

① 卦名、陰のすぎたること、又すこしすぎたること ② 鳥上に鳴くとすは、音下に聞ゆ、下は則ち離にして易く、上は則ち離にして難し、故に下文に斷じて上るに宜からず下るに宜しといへり ③ 鳥下より飛ぶ象以て小人の進むに急なるをいふ ④ 死母を妣といふ死母に遇ふは過ぎたる所爲也 ⑤ 亦小しく過ぎたるを示す也 ⑥ 願望せずして之を防ぐべし、是れ過ぎたるにあらず ⑦ 若し防がずして之に從はば或は之を害することあるの意 ⑧ 位當らざるをいふ ⑨ 尊位に居て未だ大に爲すこと有らざるに譬ふ ⑩ 彼の穴に在る鳥をいぐるみて取ることを、以て賢者をあげて自ら助くるに比す ⑪ 飛鳥の脚にかゝるが如く災眚を受けるをいふ ⑫ 天の作すを災といひ人の爲すを眚といふ

既濟。亨。小利貞。初吉終亂。○初九。曳其輪。濡其尾。无咎。○六二。婦喪其茀。勿逐。七日得。○九三。高宗伐鬼方。三年克之。小人勿用。○六四。繻有衣袽。終日戒。○九五。東鄰殺牛。不如西鄰之禴祭。實受其福。○上六。濡其首。厲。

既濟は亨る。小しく貞に利し。初めには吉、終には亂る○初九は其輪を曳く。其尾を濡す。咎無し○六二は婦、其茀を喪ふ。逐ふこと勿かれ。七日にして得ん○九三は高宗、鬼方を伐つ。三年にして之に克つ。小人は用ふること勿れ○六四は繻に衣袽あり。終日戒む○九五は東鄰の牛を殺すは、西鄰の禴祭して、實に、其福を受くるに如かず○上六は其首を濡す。厲し。

① 卦名、事の成るをいふ ② 進まんと欲して時未だ至らず、位未だ當らざれば乘る所の車の其輪を曳かん ③ 駕する所の馬の其尾を濡すが如く進むこと能はざるをいふ ④ 婦人の乘る車には必ず茀を用ふ、茀は蔽也、はるの事をいふ ⑤ 殷王武丁を指す、高宗は廟號也 ⑥ 遼方の夷種也 ⑦ 繻は當に濡に作るべし、舟に障ありて水の漏ることをいふ、衣袽は之を防ぐ綿にてぬめといふもの也、要するに寒風を未雨に防ぐことをいふ也 ⑧ 祭の終なるもの ⑨ 祭の薄きもの ⑩ 高位に居りて災を招くこと、人の水をわたりて其首を濡すが如きをいふ

坎下 水火未濟

未濟。亨。小狐汔濟。濡其尾。无攸利。○初六。濡其尾。吝。○九二。曳其輪。貞吉。○六三。未濟征。凶。利涉大川。○九四。貞吉。悔亡。震用伐鬼方。三年有賞于大國。○六五。貞吉。无咎。君子之光。有孚。○上九。有孚。于飲酒。无咎。濡其首。有孚。失是。

未濟は亨る。小狐汔んど濟る。其尾を濡す。利しき攸無し。○初六は其尾を濡す。吝なり。○九二は其輪を曳く。貞にして吉なり。○六三は未濟、征けば凶なり。大川を渉るに利し。○九四は貞なれば吉。悔亡ぶ。震いて用つて鬼方を伐つ。三年にして大國に賞あり。○六五は貞なれば吉。悔無し。君子の光なり。孚ありて、吉なり。○上九は孚ありて于に酒を飲む。咎無し。其首を濡せば、孚あれども是を失ふ。

● 卦名、事の成就せざること ● 事の半以上成功せんとして之を輕忽にすれば子狐の思慮なく、川をわたるが如し ● 其尾を濡すの困難に陥るべきをいふ ● 車の後より之を曳いて前進せしめざるが如く暫く止まりて時を待つべきをいふ ● 武威を用ふるをいふ ● 三年の後軍功遂に成りて、師旅皆大國の賞を受くるをいふ ● 賢を好むの誠、中にありて外に著る、故に君子の光と曰ふ ● 至誠命に安んじ辱を忘るれば咎なし ● し放縱度を過さば、必ず其道を失はん、蓋し時の爲すべからざれば也

上象傳

象に斷をり、一卦の吉凶を斷するをいふ

大なる哉乾元、萬物資つて始まる、乃ち天を統ぶ。雲行き雨施し、品物形を流く。大に終始を明にすれば、六位時に成る。時に六龍に乗りて以て天を御す。乾道變化して、各々性命を正し、大和を保合す。乃ち貞に利し。庶物に首出し、萬國咸寧し。

● 之を天道に推して之を乾元と謂ふ、則ち一元の氣とす、其大にして對なきを以て之を贊して大なるかな乾元と曰ふ ● 天地間の萬物が森然として形體をあらはすこと、雲起りて雨を降らすが如くなるをいふ ● 初爻より六爻まで隨の並行するを云ふ ● 乾の象を謂ふ爲す、六爻あり故に六龍といふ ● 天に受くる所の者互に相侵せず、故に正といふ ● 臨開沖和の氣也 ● 第一番にぬき出づること

至れる哉坤元萬物資りて生ず。乃ち順にして天に承く。坤厚うして物を載せ、徳、无疆に合ふ。含弘光大にして、品物咸亨る。牝馬は地の類にして、地を行くこと

大哉乾元。萬物資始。乃統天。雲行雨施。品物流形。大明終始。六位時成。時乘六龍以御天。乾道變化。各正性命。保合大和。乃利貞。首出庶物。萬國咸寧。

至れる哉坤元萬物資りて生ず。乃ち順にして天に承く。坤厚うして物を載せ、徳、无疆に合ふ。含弘光大にして、品物咸亨る。牝馬は地の類にして、地を行くこと

物。德合二无疆。含弘光大。品物咸亨。牝馬地類。行地无疆。柔順利貞。君子攸行。先迷失道。後順得常。西南得朋。乃與類行。東北喪朋。乃終有慶。安貞之吉。應二地无疆。

疆り無し。至順利貞は君子の行ふ攸なり。先に迷ひて道を失ひ、後に順つて常を得。西南に朋を得て、乃ち類と行く。東北に朋を喪うて、乃ち終に慶あり。安貞の吉は、地の无疆に應ず。

- ① 之を地道に推して之を坤元と謂ふ、亦一元の氣と爲す、其尊くして上なきを以て故に之を贊して大なるかな坤元と曰ふ
- ② 坤の道は順を主とす、天に配するを以て之を求ぐといふ
- ③ かぎりなきこと(天の)
- ④ 萬物ことごとく含みて廣大なること
- ⑤ 其功徳の大に譽はるゝこと
- ⑥ 萬物皆生を説ぐる
- ⑦ 牝馬は坤の象也、其柔順に取る也
- ⑧ 牝は陰物、地は陰に屬す其性同じ、故に地の類といふ
- ⑨ 其至りて健なるを云ふ
- ⑩ 柔順の道を失ふこと
- ⑪ 陰の常とする所の分際をいふ
- ⑫ 坤の方位は西南に屬す
- ⑬ 陰と陰と同類也
- ⑭ 艮の方位也
- ⑮ よるこびあること
- ⑯ 安靜と貞固との人にとりて言なること
- ⑰ 合ふこと

屯は剛柔始めて交つて難生ず。險中に動き、大に亨りて貞なり。雷雨の動くや

滿盈す。天造草昧、宜しく候を建つべくして而も寧とせず。

- ① 乾坤をいふ
- ② 險難に遇ふこと
- ③ 其才を用ふるをいふ
- ④ 雷雨の象は坎の象
- ⑤ 天地の間にのみみつるをいふ
- ⑥ 天道といふが如し
- ⑦ 天道の雜亂序なく冥昧不明なるをいふ、即ち天下大に亂る、時を指す
- ⑧ 諸侯を封じて治效をはかるべし之意
- ⑨ 安居せざることを

蒙は山下に險あり、險にして止まるは蒙なり。蒙亨ることは亨るを以て行くなり。時に中する也。我、童蒙に求むるに匪ず、童蒙、我に求むること。志應ずるなり。初筮は告ぐとは剛中を以て也と。再三すれば瀆る、瀆るれば則ち告げずとは蒙を瀆せば也。蒙以て正を養ふは聖の功也。

- ① 坎は穴なり、故に險の意あり
- ② 艮は山なり、故に止の意あり
- ③ 人に於て亨るの道をいふ、之を以て行くべき蒙をひらく也
- ④ 疾からず餘からざるをいふ
- ⑤ 童子は知識未だ明ならず故に童蒙といふ
- ⑥ 童蒙と我と二者の志が相合ふ也
- ⑦ 剛中の徳あるを以て其者に告ぐる
- ⑧ 其蒙者をけがすを以て告げざる
- ⑨ 蒙を養ふもの、誠に中正の道を以て之を教ふれば未だ直に聖とならざるも、亦たしかに聖人と爲るの功夫と爲すべき也

需は須也。險前に在る也。剛健にして陷らず、其義困窮せず。需は孚ありて光に亨る、貞にして吉なりとは、天位に位して以て正中なる也。大川を渉るに利しとは往いて功有る也。

- ① 須は待也
- ② 需の卦は坎を上にす、故に險前に在りといふ
- ③ 乾の剛健を以て之に處す、故に坎の險難に立ちあらず
- ④ 卦徳を以て其名義を釋せば困窮せずの意ある也
- ⑤ 九五の尊、即ち天子の位を指す
- ⑥ 正中

蒙。山下有險。險而止。蒙。蒙亨。以亨行。時中也。匪我求童蒙。童蒙求我。志應也。初筮告。以剛中也。再三瀆瀆。則不告。瀆蒙也。蒙以養正。聖功也。

需。須也。險在前也。剛健而不陷。其義不困窮矣。需。有孚光亨。貞吉。位乎天位。以正中。利涉大川。往有功。

也。訟。上剛下險。險而健訟。訟有孚窒。惕中吉。剛來而得中也。終凶。訟不可成也。利見大人。尚中正也。不利涉大川。入于淵也。

の道を得るをいふ ① 決行すべき時に決行すれば必ず成功するをいふ
 訟は上剛にして下險、險にして健なるは訟なり。訟は孚ありて窒る。惕れて中すれば吉なりとは、剛來りて中を得る也。終に凶なりとは、訟成るべからざる也。大人を見るに利しとは、中正を尚べば也。大川を渉るに利しからずとは、淵に入る也。
 ① 乾の剛と坎の險と相對して卦を成す、既に訟の意を含む ② 腹の中險にして外剛強なるは小人なり小人は健訟す、故に訟と名づくる也 ③ 訟は人の不平より起る、不平は實情の違ふに由る也 ④ 剛柔偏せず其中庸を得るをいふ ⑤ 訟訟を最後まで成し遂げんとするの不可なるをいふ ⑥ 是非訟に勝たんとする爲に勞無用を通さざるべからず、是れ自ら師の淵に入る也
 師は衆也、貞は正也。能く衆を以て正しくせば、以て王たるべし。剛中にして應じ、險を行ひて順に、此を以て天下を毒して民之に従ふ。吉にして又何の咎あらん。
 ① 陰爻五つあり、故に衆といふ ② 剛健にして中正、能く人心を得ること ③ 兵事は凶事也、故に險といふ、

之。吉又何咎矣。

比。吉也。比。輔也。下順從也。原筮。元永貞也。不寧方來。上下應也。後夫凶。其道窮也。小畜。柔得位而上下應之。曰。小畜。健而巽。剛中而志行。乃亨。密雲不雨。尚往也。自我西郊。施未行也。

之を行つて道に順ふをいふ ① 敵の結果は天下の人に苦痛を感ぜしめ、密毒を被らしむるを常とす、されど民心之に服して敢て怨まざるは正を以て不正を正せば也、是れ其吉にして咎なき所以也
 比は吉也、比は輔也、下順從する也。原筮し元永貞にして咎無しとは、剛中を以て也。寧からざるもの方に來るとは、上下應ずる也。後夫凶なりとは、其道窮する也。
 ① 本義には之を疑うて衍文と爲す、されど四陰一陽を賣くる卦象より官の判罰を下す、見らるも亦可也 ② 比の義は輔也、したしみたすくをいふ ③ 更に説けば下が上に順從すること也 ④ 上の求むる所に下に應じ下の求むる所に上に應ずるをいふ ⑤ 窮地に陥りて甚だ不利なるを云ふ
 小畜は、柔、位を得て、上下之に應ずるを小畜と曰ふ。健にして巽に、剛中にして志行はれ、乃ち亨るなり。密雲雨ふらずとは、往くを尚ぶ也。我が西郊よりすとは、施し未だ行はれざる也。
 ① 小畜の六四の爻によりて卦名の起りしを説明す也 ② 乾の健を以て巽の順に配す、剛中にして志の行ふこと必せり、故に亨るといふ ③ 陽氣は進むことを尚ぶをいふ ④ 陰功未だ成らざることをいふ

履柔履剛也。說而應乎乾。是以履虎尾。而不噬人。亨。剛中正履帝位。而不疚。光明也。泰。小往大來。吉亨。則是天地交而萬物通也。上下交而其志同也。內陽而外陰。內健而外順。內君子而外小人。君子道消。小人道長。小人道消。否。之匪人。不利君子貞。大

履は柔、剛を履む也。説びて乾に應ず。是を以て虎尾を履みて人を噬はず、亨。剛中正にして帝位を履んで疚しかざるは光明ある也。
● 上卦に乾あり人の象とす、下卦に兌あり虎の象とす、下卦の虎が上卦の人を食はんとする様也、故にいふ兌はよるこぶの意あり、柔順謙遜の徳を以て剛健の徳に合するをいふ ● 災にかゝらざるをいふ ● 内に君のて何のやましきところなきをいふ
泰は小は往き大は來り、吉にして亨るとは、則ち是れ天地交りて萬物通ずる也。
上下交りて其志同じき也。内陽にして外陰、内健にして外順、内君子にして外小人、君子の道長じて小人の道消する也。
● 地氣上り天氣下りて天地の氣相交はりて萬物發生するをいふ ● 息長の義、よゆること ● 消滅の義、さゆること
否は之れ人に匪ず、君子の貞に利しからず、大は往き小は來るとは、則ち是れ天

往小來。則是天地不交而萬物不遂也。上下不交而天下無邦也。內陰而外陽。內柔而外剛。內小人而外君子。小人道長。君子道消。同人。柔得位。得中而應乎乾。曰同人。同人曰。利涉大川。亨。利涉大川。乾行也。文明以健。中正而應。君子正也。唯君子爲能通天下之志。大有。柔得尊位。大中而上下應之。曰大

地交らずして萬物通ぜざる也。上下交らずして天下邦无き也。内陰にして外陽、内柔にして外剛、内小人にして外君子、小人の道長じ、君子の道消する也。
● 邦あれども邦なきに同じ、亂世の甚しきをいふ
同人は柔、位を得、中を得て乾に應ずるを同人と曰ふ。同人曰く、同人野に于てす。亨る、大川を渉るに利しとは、乾の行く也。文明にして以て健に、中正にして應ず、君子の正也。唯だ君子のみ能く天下の志を通ずと爲す。
● 六二の爻によりて柔位を得、中を得といひ ● 九五の爻によりて乾に應ずといひ以て卦名を釋く也 ● 天行と同じ、天道の運行也 ● 健を行ふに武を以てせず、文明を以てするをいふ ● 相應するに邪を以てせずして中正を以てするをいふ ● 天下の人と其志を一致して事を行ふをいふ
大有は柔、尊位を得、大中にして上下之に應ずるを大有と曰ふ。其徳剛健にして文明、天に應じて時に行ふ、是を以て元に亨る。

有其德剛健而文明。應乎天而時行。是以元亨。謙亨。天道下濟而光明。地道卑而上行。天道虧盈而益謙。地道變盈而流謙。鬼神害盈而福謙。人道惡盈而好謙。謙尊而光。卑而不可踰。君子之終也。

豫。剛應而志行。順以動豫。豫順以動。故天地如之。而況建侯行師乎。天地以順動。故日月不過。而四時不忒。聖人以順動。則刑罰清而民服。豫之時義大矣哉。

● 此卦體によりて卦名を説く也。柔、尊位を得るは六五を謂ひ、大中は五に因りて中の大と稱し、上下は五陽指していふ也。 ● 時に隨つて道を行ふをいふ。 ● 謙は亨る。天道下濟して光明、地道卑くして上行す。天道は盈を虧いで謙に益し、地道は盈を變じて謙に流し、鬼神は盈を害して謙に福し、人道は盈を惡んで謙を好む。謙は尊くして光り、卑くして踰ゆべからず、君子の終也。 ● 此卦を名づくるの義を釋く、天道下濟は九三をいひ、地道上行は坤の上位に居るをいふ、下濟とは下りて卦を成すこと、上行とは上に居ること也。 ● 日月の盈及し寒暑の過退するをいふ。 ● 高岸の谷と爲り、水の流れて下に就くをいふ。 ● 禍福を降すをいふ。 ● 好き惡みあるをいふ。 ● 君子の終を全うする所以なるの意。

豫は剛應ぜられ志行はる。順にして以て動くは豫なり。豫は順にして以て動く、故に天地も之くの如し。而るを況んや侯を建て師を行るをや。天地順を以て動く、故に日月過たずして、四時忒はず。聖人順を以て動く、則ち刑罰清くして民服す。豫の時義大なるかな。 ● 剛は九四を謂ひ、五陰之に應ずる也。 ● 豫の徳を説明する也。 ● 時は其の値ふ所也、義は之に處する道也。 ● 剛は九四を謂ひ、五陰之に應ずる也。 ● 豫の徳を説明する也。 ● 時は其の値ふ所也、義は之に處する道也。

隨。剛來而下。柔動而說隨。大亨貞无咎。而天下隨時。隨之時義大矣哉。

隨。剛上而柔下。巽而止。蠱。蠱元亨而天下治也。利涉大川。往有事也。先甲三日。後甲三日。終則有始。天行也。

隨は剛來りて柔に下る。動いて説ふは隨なり。大に亨り、貞にして咎無し。天下時に隨ふ。時に隨ふの義大なるかな。 ● 剛は初九をいひ、柔は六二、六三をいふ。 ● 時運の來るや天下の人之に隨ふこと能はず、是を時に隨ふといふ、或は時を之と同じくこれと訓ずるもあり。

蠱は剛上りて柔下る。巽にして止まるは蠱なり。蠱は元に亨るとは、天下治まる也。大川を渉るに利しとは往きて事ある也。甲に先だつこと三日、甲に後るよこと三日とは、終あれば則ち始あるなり。天の行也。 ● 剛は上九を謂ひ、柔は初六を謂ふ。 ● 天道始終の義をいへる也。

臨。剛浸而長。說而順。剛中而應。大亨以正。天之道也。至子八月有凶。消不久也。大觀在上。順而巽。中正以觀天下。觀盥而不薦。有孚顒若。下觀而化也。觀天之神道。而四時不忒。聖人以神道設教。而天下服矣。頤中有物。曰噬嗑。噬嗑而亨。剛柔分。動

臨は剛浸んで長ず。說びて順に、剛中にして應ず、大に亨りて以て正し。天の道也。八月に至りて凶ありとは、消すること久しからざる也。

● 剛は二陽を謂ふ ● 剛の消滅することの長からざるをいふ

大觀上に在り、順にして巽に中正以て、天下に觀らる。觀は盥して薦めず。孚ありて顒若たりとは、下觀て化する也。天の神道を觀て四時忒はず、聖人神道を以て教を設けて天下服す。

● 二陽上に在り、觀の大なる者也 ● 神は伸也、陽の長息するさまをいふ、神は形なし、されど其跡たとへば春夏秋冬の遷はざるを以て神道の至誠を知る也 ● 聖人神道に履づき祭神の酬を基として教を設くるをいふ

頤中に物あるを噬嗑と曰ふ。噬嗑は亨るとは、剛柔に分れ動いて明に、雷電合うて亨なる也。柔、中を得て上行すれば、位に當らずと雖も、獄を用ふるに利

しき也。

● 物、口中に間るを噬嗑といふ、噬はかむ也、嗑はあふ也、かみあはすことをいふ、蓋し之を二陽上下になり一陰中間にあるの象に取る也 ● 動いてにござるをいふ ● 合うて亂れざるをいふ ● 六五の爻によりて釋く

實は亨る。柔來りて剛を文る、故に亨るなり。剛を分ち上りて柔を文る。故に小しく往く攸あるに利し。天の文也。文明にして以て止むは人の文なり。天文を觀て以て時變を察し、人文を觀て以て天下を化成す。

● 坤の上六、來りて二位に居る是れ柔來りて剛を文る義也 ● 柔來りて剛を文るは位に居りて中を得る也故に亨るといふ ● 乾の九二、分れて上位に居る、是れ剛を分ち上りて柔を上る義とす ● 剛上りて柔を文るは、中位を得ざる也、柔來りて剛を文るに若かず、故に小しく往く攸あるに利しといふ ● 以上の如く剛柔が錯するは天の文也

剝は剝ぐる也。柔、剛に變ずる也。往く攸あるに利しからずとは、小人長ずる也。順にして之を止む。象を觀る也。君子は消息盈虛を尙ぶ、天の行なり。

● 柔は五陰をいひ、剛は上九をいふ、剝とは五陰過み長じて將に一陽をはがんとするを言ふ也 ● 形象を觀察す

而明。雷電合而章。柔得中而上行。雖不當位。利用獄也。賁亨。柔來而文剛。故亨。分剛上而文柔。故小利。有攸往。天文也。文明以止。人文也。觀乎天文。以察時變。觀乎人文。以化成天下。剝。剝也。柔變剛也。不利。有攸往。小人長也。順而止之。觀象也。君子

尚消息盈虛。天行也。剛反。動復亨。剛反。動而以順行。是以出入无咎。朋來无咎。反復其道。七日來復。天行也。利有攸往。剛長也。復其見天地之心乎。无妄。剛自外來。而為主於內。動而健。剛中而應。大亨以正。天之命也。其匪正有眚。不利有攸往。无妄之往。何之矣。天命不祐。行矣哉。

ること ① 誠を潛と爲し長を息と爲す、以て往來するをいふ、滿を盈と爲し虧を虛と爲す、以て進退するをいふ
 ② 天道の流行をいふ

復は亨るとは、剛の反るなり。動いて以て順行す、是を以て出入して疾无く、朋來りて咎無し。其道を反復し、七日にして來復すとは、天の行也。往く攸あるに利しとは、剛の長ずる也。復は其れ天地の心を見る乎。

③ 天地物を生ずる心は是に於いて見るべきなり

无妄は剛外より來りて内に主と爲り、動いて健に、剛中にして應じ、大に亨り以て正す。天の命也。其の正に匪ざるは、眚あり、往く攸あるに利しからずとは、无妄の往く、何くに之かん。天命祐げざるなり。行かんかな。

④ 剛は初九をいひ、外は大畜の上體を謂ふ ⑤ 行ひて期する所なければ何を以て天祐を得んやの意

大畜。剛健篤實輝光。日新其德。剛上而尚賢。能止健。大正也。不家食。吉。養賢也。利涉大川。應乎天也。頤。貞吉。養正則吉也。觀頤。觀其所養也。自求口實。觀其自養也。天地養萬物。聖人養賢以及萬民。頤之時大矣哉。

大畜は剛健篤實輝光、日に其德を新にす。剛上りて賢を尚ぶ、能く健を止むるは大正也。家食せずして吉なりとは、賢を養ふ也。大川を渉るに利しとは、天に應ずる也。

① 乾は剛健、艮は篤實、離は輝光、剛中にして行篤く光外に發するをいふ

頤は貞吉なりとは、養ふことを正しければ則ち吉なる也。頤を觀るとは、其の養ふ所を觀る也。自ら口實を求むるとは其の自ら養ふを觀る也。天地は萬物を養ひ、聖人は賢を養ひて以て萬民に及ばず、頤の時大なるかな。

② 天地養萬物、聖人養賢以及萬民、頤之時大矣哉。

大過は大なる者過ぐる也。棟撓むとは本末弱き也。剛過ぎて中に、巽にして説んで行く。往く攸あるに利し、乃ち亨る。大過の時大なるかな。

③ 陽數、陰に倍す、是れ大なるもの過ぐる也

亨。大過之時大矣哉。

習坎。重險也。水流而不盈。行險而不失。其信維心亨。乃以剛中也。行有尚。往有功也。天險不可升也。地險山川丘陵也。王公設險以守其國。險之時用大矣哉。離。麗也。日月麗乎天。百穀麗乎土。草木麗乎土。重明以麗乎天。乃化成天。下。柔麗乎中。

習坎は重險也。水流れて盈たず、險を行ひて其信を失はず。維れ心亨るは、乃ち剛中なるを以て也。行けば尙ばるゝことありとは、往いて功ある也。天險は升るべからざる也。地險は山川丘陵也。王公は險を設けて以て其國を守る、險の時用大なるかな。

● 坎の卦は一陽二陰の間に陷る象なり、上卦下卦共に然るを以て之を重險と釋く也 ● とは經の字へまことありの說明也 ● 同上 ● 時と用と二つをいふ

離は麗也。日月は天に麗き、百穀草木は土に麗き、重明以て正に麗き、乃ち天下を化成す。柔、中正に麗く、故に亨る、是を以て牝牛を畜へば吉なり。

● 麗の字はつく、かゝる、つらなる、つながる等の訓あり ● 離は火の象とす明の意あり、上卦下卦共に同じ、故に重明といふ、之を人道の上よりいへば内卦は性善明徳の明にして外卦は學問文明の明也 ● 道には是非、善惡、正邪の二途あり、乃ち其都をすて、其正を取るをいふ也 ● 牝牛は中正を具體化したる語也

正。故亨。是以畜牝牛吉也。

咸。感也。柔上而剛下。二氣感應以相與。止而說。男下女。是以亨利貞。取女吉也。天地感。而萬物化生。聖人感人心。而天下和平。觀其所感。而天地萬物之情可見矣。

下象傳

咸は感也。柔上りて剛下り、二氣感應して以て相與す。止りて説ぶ。男、女に下る、是を以て亨る。貞に利し。女を取るに吉なり。天地感じて萬物化生す。聖人人心を感ぜしめ、天下和平なり。其の感ずる所を觀て天地萬物の情見るべし。

● 交々和感應するの義也 ● 柔は上六を謂ひ、剛は九三をいふ ● 艮は少男の象、兌は少女の象、艮を下、兌を上とす故に云ふ

恆。久也。剛上而柔下。雷風相與。巽而動。剛柔皆應。恆。利貞。久於其道。

恆は久也。剛上りて柔下り、雷風相與す、巽にして動き、剛柔皆應するは恆なり。恆は亨る、咎無し、貞に利しとは、其道に久しき也。天地の道は恆久にして已まざる也。往く攸あるに利しとは、終れば則ち始ある也。日月は天を得て能く久しく照し、四時變化して能く久しく成る。聖人は其道に久しくして天下化成す、其の恆なる所を觀て、天地萬物の情を見るべし。

● 剛は九四を謂ひ、柔は初六を謂ふ

也。天地之道。恆久而不已也。利有攸往。終則有始也。日月得天而能久照。四時變化而能久成。聖人久於其道。而天下化成。觀其所恆。而天地萬物之情可見矣。

遷は亨るとは遷れて亨る也。剛、位に當りて應ず。時と與に行く也。小しく貞に利しとは浸んで長ずる也。遷の時義大なるかな。

● 剛は九五を謂ふ

大壯は大なる者壯なる也。剛以て動く、故に壯なり。大壯は貞に利しとは、大なる者正しき也。正大にして天地の情見るべし。

● 大なる者とは剛を謂ふ也 ● 正大は天地の性情にして、人の當に法として之に則るべき者也

晉は進也。明、地上に出づ、順にして大明に麗く、柔進んで上行す。是を以て

地上。順而麗。乎大明。柔進而上行。是以康侯用錫馬蕃庶。晝日三接也。

● 錫を火とす、明の意あり、又以て日の象とす、坤を地と爲す、上卦日にして下卦地なり、故に云ふ ● 明德の君を謂ふ ● 柔は六五を指して言ふ

明、地中に入るは明夷なり。内文明にして外柔順、以て大難を蒙る。文王之を以てす。難貞に利しとは、其明を晦す也。内難にして能く其の志を正しくす、箕子之を以てす。

● 内卦離にして外卦坤也、故に明地中に入りて傷害せらる、象となす、是れ明夷の義を離くもの也 ● 文王は周の王也、内は文明の徳ありて外能く柔順なり、故に蒙難に因はれても、其名を隱さざりき、即ち此卦に相當する也 ● 箕子は紂の親戚也、國內にありて難にあひ陽り狂じて其正を失はず、即ち此卦に相當する也

家人は、女、位を内に正しうし、男、位を外に正しうす。男女正しきは天地の大義也。家人に巽君ありとは父母の謂也。父は父たり子は子たり、兄は兄たり弟は弟たり。夫は夫たり婦は婦たり。而して家道正し。家を正しうして天下定る。

地上。順而麗。乎大明。柔進而上行。是以康侯用錫馬蕃庶。晝日三接也。明入地中。明夷。内文明而外柔順。以蒙大難。文王以之。利艱貞。晦其明也。内難而能正其志。箕子以之。

家人。女正位乎内。男正位乎外。男女正。天地之大義也。

也。家人有嚴君焉。父母之謂也。父子。兄弟。弟。夫夫婦婦。而家道正。正家而天下定矣。

● 婦は内政を正しく行ふをいふ ● 夫は外事を正しく行ふをいふ ● 猶大過と言はんが如し ● 嚴(ちごそか)なる主君の謂なり

睽は火動いて上り、澤動いて下り、二女同居して、其志、行を同じうせず。説んで明に麗き、柔進んで上行し、中を得て剛に應ず。是を以て小事に吉なり。天地は睽きて其事同じき也。男女は睽きて其志を通ずる也。萬物睽きて其事類する也。睽の時用大なるかな。

● 火は炎上する意 ● 水は潤下する意 ● 免を少女として離を妻とす、故に二女と謂ふ ● 柔は六五を謂ふ ● 剛は九二を謂ふ ● 陰陽徳を異にして化育の事と同じくするをいふ ● 夫唱婦隨内外別ありて家を治むるを通ずるをいふ ● 萬物個々に性命を正しくして厚生利用の道に至りては相類して、相悖らざるをいふ

睽。火動而上。澤動而下。二女同居。其志不同。行説而不。睽乎明。柔進而上行。得中而應乎剛。是以小事吉。天地睽而其事同也。男女睽而其志通也。萬物睽而其事類也。睽之時用大矣哉。

蹇。難也。險在前也。見而能止。知難而止。利西南。不利東北。見而能止。知難而止。利西南。不利東北。見而能止。知難而止。利西南。不利東北。

蹇は難也。險、前に在る也。險を見て能く止まる。知なるかな。蹇は西南に利しと

前也。見險而能止。知矣哉。蹇利西南。往得中也。不利東北。其道窮也。利見大人。往有功也。當位貞吉。以正邦也。蹇之時用大矣哉。

は、往いて中を得る也。東北に利しからずとは、其道窮まるなり。大人を見るに利しとは、往いて功ある也。位に當りて貞吉なりとは、以て邦を止しうする也。蹇の時用大なるかな。

● なやむ事 ● 坎卦上に在り、以て險阻に在るの象と爲す ● 艮を東北と爲す、艮位險難に當れば其反對の方ば然らざるべき也、西南に利しとは此の理由によりて説ける也

解險以動。動而免乎險。解利西南。往得衆也。其來復吉。乃得中也。有攸往。利也。往有功也。雷雨作。雷雨作。

解は險にして以て動き、動いて險より免るゝは解なり。解は西南に利しとは、往いて衆を得る也。其れ來り復りて吉なりとは、乃ち中を得る也。往く攸あれば夙くして吉なりとは、往いて功ある也。天地解けて雷雨作り、雷雨作りて百果草木皆甲拆す、解の時大なるかな。

● 坎に險の意あり、震に動の意あり、故に云ふ ● 草木の種子が甲殻を裂き開きて、中より生出萌芽する状を

面百果草木皆甲拆。解之時大矣哉。

損。損下益上。其道上行。損而有孚。元吉。无咎。可貞。利有攸往。曷之用。二簋可再用。二簋應有享。二簋應有時。損剛益柔。有時損益盈虛與時偕行。益損上益下。民說无疆。自上下下。其道大光。利有攸往。中正有慶。利涉大川。木道乃行。益動而巽。日進无

損は下を損して上を益す、其道上行す。損は孚ありて元吉なり。咎無し。貞にすべし。往く攸あるに利し。曷をか之れ用ひん。二簋用て享すべし。二簋時あるに應ず。剛を損し柔を益す。時ありて損益し、盈虚時と偕に行ふ。

● 下に在る兌源の氣を損じて以て上に在る艮山を潤し益すをいふ ● 損の道は下よりして上り行くをいふ ● 二簋は祭の薄き也之を常とすべからず、時に隨つて損益すべきをいふ ● 損目にするを損と爲し過つて爲すを益と爲す ● 物を滿たすも滿たさざるも唯時とともに之を行ふをいふ

益は上を損して下を益す。民説びて疆无し。上より下に下る、其道大に光る。往く攸あるに利しとは、中正にして慶あるなり。大川を渉るに利しとは、木道乃ち行くなり。益は動いて巽に、日に進むこと疆无し。天施し地生じ、其の益方無し。凡そ益の道は、時と偕に行ふ。

● 巽を木と爲す、木道は即ち舟楫の利也 ● 天、一元の氣を降せば、地之を受けて、萬物を發育すること ●

疆。天施地生。其益无方。凡益之道。與時偕行。夫。決也。剛決柔也。健而說。決而和。揚于王庭。柔乘五剛也。孚號有厲。其危乃光也。告自邑。不利即戎。所尚乃窮也。利有攸往。剛長乃終也。婚。遇也。柔遇剛也。勿用取女。不可與長也。天地相遇。品物咸章也。

方向なきこと、即ち限りなきをいふ

夫は決也。剛柔を決する也。健にして説び、決して和ぐ。王庭に揚ぐとは、柔、五剛に乗れば也。孚ありて號ぶ、厲きことありとは、其れ危めば乃ち光ある也。告ぐること邑よりす、戎に即くに利しからずとは、尙ぶ所乃ち窮する也。往く攸有るに利しとは、剛長くして乃ち終る也。

● 物をつきあふす道もあれば又ひきさく道もあり ● 柔は上六を謂ひ、五剛は五陽を指す ● 兵を助かして飽くまで其方に訴へんとするは宜しからざるをいふ

婚は遇也。柔剛に遇ふ也。女を取るに用ふること勿れとは、與に長ずべからざる也。天地相遇ひて、品物咸章なる也。剛、中正に遇ひて、天下大に行はるゝ也。婚の時義大なるかな。

● 柔は初六を謂ひ、剛は五陽を謂ふ ● 一語にのびて聚ゆるをいふ ● 萬物皆が成して森然として照かに分布するを云ふ

萃は聚也。順にして以て説び、剛中にして應ず。故に聚まる也。王有廟に假るとは、孝享を致す也。大人を見るに利し。亨るとは、聚むるに正を以てする也。大牲を用ふれば吉なり。往く攸あるに利しとは、天命に順ふ也。其の聚まる所を觀て、天地萬物の情見るべし。

● 剛は九五を謂ふ ● 孝心を以て享祭すること ● 三陰下に凝りて、上、五に従ふ、之を聚むるに正を以てすと云ふ

柔、時を以て升る。巽にして順に、剛中にして應ず。是を以て大に亨る。用つて大人を見る、恤ふること勿れとは、慶ある也。南征すれば吉なりとは、志行はるゝ也。

剛遇中正。天下大行也。婚之時義大矣哉。萃聚也。順以說。剛中而應。故聚也。王假有廟。致孝享也。利見大人。亨聚以正也。用大牲吉。利有攸往。順天命也。觀其所聚。而天地萬物之情可見矣。柔以時升。巽而順。剛中而應。是以大亨。用見大人。勿

恤有慶也。南征吉。志行也。困。剛揜也。險以說。困而不失其所亨。其唯君子乎。貞。大人吉。以剛中也。有言不信。尚口乃窮也。

巽乎水而上。水井。井養而不窮也。改邑不改井。乃以剛中也。汔至。亦未繙井。未有功也。羸其瓶。是以凶也。革。水火相息。

● 上の三陰、革の内卦よりし以て上を謂ふ ● 剛は九二を謂ふ

困は剛揜はるゝ也。險以て説び、困んで其の亨る所を失はざるは、其れ唯だ君子のみならん乎。貞なり。大人は吉なりとは、剛中を以て也。言ふこと有るも信ぜられずとは、口を尚べば乃ち窮する也。

● 三陽爻、陰の爲に揜はるゝをいふ ● 言を行ふの時にあらずして、言を用ひて以て免れんと欲すれば必ず窮するをいふ

水に巽れて水を上ぐるは井なり。井は養ひて窮まらざる也。邑を改めて井を改めずとは、乃ち剛中を以て也。汔んと至らんとして亦未だ井に繙せずとは、未だ功あらざる也。其瓶を羸る。是を以て凶也。

● 約瓶にて水を汲み上ぐること

● 革は水火相息し、二女同居し、其志、相得ざるを革と曰ふ。已る日にして乃ち

二女同居。其志不相得。曰。革。巳日乃孚。革而信之。文明以説。大亨其悔乃亡。天地革而四時成。湯武革命。順乎天而應乎人。革之時大矣哉。

鼎。象也。以木巽火亨飪也。聖人亨以享上帝。而大亨以養聖賢。巽而耳目聰明。柔進而上行。得中而應乎剛。是以元亨。震亨。震來虩虩。

孚あり。革めて之を信にす。文明にして以て説び、大に亨るに正を以てす。● 革めて當る。其悔乃ち亡ぶ。天地革つて四時成る。● 湯武命を革めて、天に順ひて人に應ず。● 革の時大なるかな。

● 革の卦の象は物よりいへば水火也、人よりいへば二女也、息は悞也、消すこと也 ● 始め疑ひて終に信ずるをいふ ● 殷の湯王と周の武王と國運の交代を行へるをいふ ● 天命に順ひて人心に應ずること

鼎は象也。木を以て火に巽れて亨飪する也。● 聖人亨して以て上帝を享し、而して大に亨して以て聖賢を養ひ、巽にして耳目聰明なり。● 柔進して上行し、中を得て剛に應ず。● 是を以て元に亨る。

● 鼎の卦前に直に其の形即ち象ありといふ義也 ● 亨は烹の字として讀むべし ● 柔は六五を謂ふ ● 剛は九二を謂ふ

震は亨る。震來るとき統統たりとは、恐れて福を致す也。笑言啞啞たりとは、後

難。恐致禍也。笑言啞啞。後有則也。震驚百里。驚遠而懼。遷也。出可下。以守宗廟社稷。以爲祭主也。

に則ある也。震百里を驚かすとは、遠きを驚かして、遷きを懼れしむる也。出でて以て宗廟社稷を守りて以て祭主と爲る可き也。

● 祭祀の當主を謂ふ

長。止也。時止則止。時行則行。動靜不失。其時。其道光明。長。其止。止其所一也。上下敵應。不相與也。是以不獲其身。行其庭。不見其人。无咎也。

長は止也。時止るときは則ち止り、時行るときは則ち行く。動靜其時を失はざれば、其道光明なり。其止に長まるは、其所に止まる也。上下敵應して、相與せざる也。是を以て其身を獲ず。其庭に行きて、其人を見ず、咎无き也。

● 對等に相應すること

漸。之進也。女歸吉也。進得位。往有功也。進以正。可以

漸は之れ進む也。女歸いで吉なる。進んで位を得れば、往いて功ある也。進むに正を以てすれば、以て邦を正しうす可き也。其位、剛にして中を得る也。止

つて異ひ、動いて窮まらざる也。

● 此の象傳は他の簡處に比して文辭の排列異なるものあり、眞淵中州はこの錯簡を訂正する所あれども今舊に沿ひて必ずしも改めず

歸妹は天地の大義也。天地交はらざれば、萬物興らず。歸妹は人の終始也。説んで以て動く。妹を歸するところ也。征げば凶なりとは、位當らざる也。利しき攸无しとは、柔、剛に乗れば也。

● 天地間に於ける一大義理なりといふ意 ● 人情の始にして又終なるをいふ

豊は大也。明にして以て動く、故に豊なり。王之假るとは、大を尙ぶ也。憂ふること勿れ、日中に宜し、宜しく天下を照すべきなり。日中すれば則ち戻き、月盈つれば則ち食す。天地盈虛、時と消息す、而るを況んや人に於てをや。況んや鬼神に於てをや。

● 饑の火と饑の雷とをとりて明にして以て動くの義となす ● 天子は其徳を光大にするを尙ぶをいふ ● か

正。邦也。其位剛得中也。止而巽。動不窮也。歸妹。天地之大義也。天地不交。而萬物不興。歸妹。人之終始也。説以動。所歸。妹也。征凶。位不當也。无攸利。柔乘剛也。豐。大也。明以動。故豐。王假之。尙大也。勿憂。宜日中。宜照天下也。日中則昃。月盈則食。天地盈

虛。與時消息。而況於人乎。況於鬼神乎。旅。小亨。柔得二中乎外。而順二乎剛。止而麗二乎明。是以小亨。旅。貞吉也。旅之時義大矣哉。

くること ① 消は減也往也、息は長也來也、即ち消退往來するを云ふ
 旅は小しく亨る。柔、中を外に得て、剛に順ひ、止りて明に麗く。是を以て小しく亨る。旅貞なれば吉也。旅の時義大なるかな。
 ② 陰皆陽に順ひ、離六五のみ剛に乗じ復中を外に得て以て上に承くるを云ふ ③ 陰各剛に隨ひて乖違せず故に云ふ
 重巽以て命を申ぬ。剛、中正に異つて、志行はる。柔皆剛に順ふ、是を以て小しく亨る。往く攸あるに利しく、大人を見るに利し。
 ④ 命令をくり返すこと
 兌は説也。剛は中にして柔は外、説んで以て貞に利し。是を以て天に順つて人に應ず。説んで以て民に先だてば、民其勞を忘れ、説んで難を犯せば、民其死

人。説以先民。民忘其勞。説以犯難。民忘其死。説之大。民勸矣哉。渙。亨。剛來而不窮。柔得二位乎外。而上同。王假有廟。王乃在中也。利涉大川。乘木有功也。節。亨。剛柔分。而剛得中。苦節不可貞。其道窮也。説以行險。當位以節。中正以通。天地節而四時成。節以制

を忘る。説の大なる、民勸まんかな。
 ① 兌の體を釋きて説と爲す、説は即ち悦と同じくよみこぶこと也 ② 民、上の恩に悦服して自然に善に勸むに至るをいふ
 渙は亨る。剛來りて窮まらず。柔、位を外に得て上同す。王、有廟に假るとは王乃ち中に在る也。大川を渉るに利しとは、木に乗りて功ある也。
 ③ 擲の卦を倒すれば節の卦と爲る、節の九五、内卦に來りて二と爲り、六三外卦に行き二四と爲る、是れ剛來りて柔上る也 ④ 樽の事也
 節は亨る。剛柔分れて、剛、中を得。苦節貞にすべからずとは、其道窮する也。説んで以て險を行き、位に當つて以て節し、中正にして以て通ず。天地節して四時成る。節して以て度を制すれば、財を傷らず、民を害はず。
 ① 亂れざるをいふ ② 入ることを敢り出すことを爲し之を用ふるに節あれば財も以て餘あるべく民も以て安んずるを得べし

度。不傷財。不害民。

中孚柔在內。而剛得中。說而巽。孚乃化邦也。豚魚吉。信及豚魚也。利涉大川。乘木舟虛也。中孚以利貞。乃應乎天也。

中孚は柔内に在り、而して剛中を得。説んで巽ひ、孚ありて乃ち邦を化する也。豚魚吉なりとは、信、豚魚に及ぶ也。大川を渉るに利しとは、木に乗りて舟虚なる也。中孚以て貞に利しとは、乃ち天に應ずる也。

小過小者過而亨也。過以利貞。與時行也。柔得中。是以小事吉也。剛失位而不中。是以不可大事也。有飛鳥之象焉。飛鳥遺之音。不宜上宜下。大吉。上逆而下順也。

小過は小なる者過ぎて亨る也。過ぎて以て貞に利しとは、時と行ふ也。柔中を得たり、是を以て小事に吉なる也。剛位を失うて中ならず、是を以て大事に可ならざる也。飛鳥の象あり、飛鳥之が音を遺す。上るに宜しからず、下るに宜しく大吉なりとは、上るは逆にして下るは順なる也。

● 柔は二五を謂ふ

既濟亨。小者亨也。利貞。剛柔正而位當也。初吉。柔得中也。終止則亂。其道窮也。未濟亨。柔得中也。小狐汔濟。未出中也。濡其尾。无攸利。不續終也。雖不當位。剛柔應也。

既濟は亨るとは、小なる者亨る也。貞に利しとは、剛柔正しくして位當る也。初めは吉なりとは、柔中を得る也。終に止れば則ち亂るとは、其道窮する也。

● 既濟六爻各々其位を得るをいふ

未濟は亨るとは、柔中を得る也。小狐汔んと濟るとは、未だ中を出でざる也。其尾を濡し、利しき攸無しとは、續いて終らざる也。位に當らずと雖も、剛柔應ずる也。

● 事の始めに失敗せり故に引續き、其事を終へざるをいふ

上象傳

象は豫也、洪象の詞也、是れ孔子、易の六十四卦及三百八十四爻に就いて説明せられたるもの也卦全體にわたるものを大象と爲し一爻毎に係くるものを小象と爲す

天行健。君子以自強不息。○潛龍勿用。○陽在下也。○見龍在田。德施普也。○終日乾乾。反復道也。○或躍在淵。進無咎也。○飛龍在天。大人造也。○亢龍有悔。盈不可久也。○用九天德。不可爲首也。

● 天の運行は始終一の如し、故に健といふ ● 君子天象を體し、夙夜孜孜として自らつとめてやまざることを、以上二句は所謂大象にして此の全體にかゝり以下は即ち小爻にして一爻一爻に係るもの也、今便利の爲に『を以て之を區分す』 ● 大人の仕業なりといふが如し ● 陽剛の德を剛にして物の先に立たざるをいふ

地勢坤。君子以厚德載物。○履霜。堅冰。陰始凝也。馴致其道。至堅冰也。○六二之動。直以方也。不習無不利。地道光也。○含章可貞。以時發也。或從王事。知光大也。○括囊無咎。慎不害也。○黃裳元吉。文在中也。○龍戰于野。其道窮也。○用六永貞。以大終也。

地勢は坤なり、君子以て厚德物を載す。霜を履んで堅氷とは、陰始めて凝る也。其道を馴致して堅氷に至るなり。○六二の動とは、直以て方なる也。習はずして利しからざる無しとは、地道光なる也。○章を含んで貞にすべしとは、時を以て發する也。或は王事に從ふとは、知光大なる也。○囊を括りて咎無しとは、慎めば害あらざる也。○黃裳にして元吉なりとは、文中に在るなり。○龍、野に戰ふとは、其道窮する也。○用六の永貞は、以て終を大にする也。

● 地の勢たるを稱して厚く、能く萬物を載せて重しとせず ● 君子は地象を體し、以て其德を厚くし習徳賢否皆之を包容するをいふ ● 漸次に推し極まること ● 自然にして然るをいふ ● いつまでも含藏せざるをいふ ● 知は智慮也、成すことなくして終あるをいふ

雲雷屯。君子以經綸。○雖盤桓。志行正也。○六二之難。剛に乗ずれば也。十年にして乃ち字

也。以貴下賤。大得民也。○六二之難乘。剛也。十年乃字。反常也。○即鹿无虞。以從禽也。君子舍之。往吝窮也。○求而往。明也。○屯其膏。施未光也。○泣血漣如。何可長也。

すとは、常に反る也。○鹿に即きて虞無しとは、禽に従ふを以て也。君子之を舍つ、往けば吝なりとは、窮する也。○求めて往くは、明なる也。○其膏を屯すとは、施すこと未だ光ならざる也。○泣血漣如たり、何ぞ長かる可けんや。

● 經は從糸を引くこと即ち大綱を正しうするをいふ、繪は絲を理めてとよぶること即ち細目を詳にするをいふ
● 數々窮すれば則ち通ずといふが如し

山下出泉蒙。君子以果行育德。○利二用刑人。以正法也。○子克家。剛柔接也。○勿用取女。行不顺也。○困蒙之吝。獨遠實也。○童蒙

山下の出泉は蒙なり、君子以て行を果し徳を育ふ、用つて人を刑するに利しとは、以て法を正しくする也。○子、家を克すとは、剛柔接する也。○女を取るに用ふることに勿れとは、行順ならざる也。○蒙に困むの吝は、獨り實に遠かる也。○童蒙の吉は、順にして以て異なる也。○用つて寇を禦ぐに利しとは、上下順なる也。

● 山澤相待ちて萬物を養ふの象なり ● 君子之を懲し、其徳を育てて以て其根を培ひ、其行を決して以て善に逆

之吉。順以巽也。○利二用禦寇。上下順也。○雲上於天。需。君子以飲食宴樂。○需于郊。不犯難行也。○利二用恆无咎。未失常也。○需于沙。衍在中也。雖小有言。以吉終也。○需于泥。災在外也。自我致寇。敬慎不败也。○需于血。順以聽也。○酒食貞吉。以中正也。○不速之客來。敬之終吉。雖不當位。未大失也。

雲、天に上るは需なり。君子以て飲食宴樂す。○郊に需つとは、難を犯して行かざる也。○恆を用ふるに利し、咎無しとは、未だ常を失はざる也。○沙に需つとは、泥に需つとは、小しく言ありと雖も、吉を以て終る也。○泥に需つとは、災外に在る也。我より寇を致す。敬慎すれば敗れざる也。○血に需つとは、順にして以て聽く也。○酒食貞吉なりとは、中正なるを以て也。○速かざる客來る、之を敬すれば終に吉なりとは、位に當らずと雖も、未だ大に失はざる也。

● 雲を民に比し、天を君に比す、人君需を懷して民を養ふ意あり ● 氣機を養ふをいふ ● 心を養ふをいふ ● 實裕の義、ひろくゆたかなるをいふ

天與水違行

天と水と違ひ行くは、訟なり。君子以て事を作し始を謀る。事とする所を永う

訟。君子以作事謀始。○不可長也。雖小言。其辯明也。○不克訟。歸而逋。自下訟上。患至掇也。○食舊德。從上吉也。○復即命。渝安貞不失也。○訟元吉。以中正也。

せずとは、訟は長うす可からざれば也。小しく言ありと雖も、其辯明なる也。○訟を克せず、歸りて逋竄する也。下より上を訟ふるは患の至る掇ふ也。○舊徳に食むとは、上に從へば吉なる也。○復りて命に即き渝へて貞に安んずとは、失はざる也。○訟へて元吉なりとは、中正なるを以て也。○訟を以て服を受くとも、亦敬するに足らざる也。

● 天は上に通り水は下に流る其行くところ相違ふこゝに訴訟の意あり ● 逃げかくるゝをいふ ● 災禍の來る物を拾ふが如く其だ容易なるをいふ ● 過失なきをいふ ● 爵位を得るをいふ ● 災禍の來

地中有水師。君子以容衆。○師出以律。失律凶也。○在師中言承天寵也。

地中に水あるは師なり。君子以て民を容れ衆を畜ふ。師出づるに律を以てす、律を失へば凶也。○師に在りて中なれば吉なりとは、天寵を承る也。王三たび命を錫ふとは、萬邦を懐くる也。○師或は戸を與すとは、大に功无き也。○左に次して咎无きは未だ常を失はざる也。○長子は師を帥うとは、中行なるを以て也。弟子は戸

王三錫命。懷萬邦也。○師或與尸。大无功也。○左次无咎。未失常也。○長子帥師。以中行也。○弟子與尸。使不當也。○大君有命。以正功也。小人勿用。必亂邦也。

を與すとは、使ふこと當らざる也。○大君命ありとは、以て功を正しうする也。小人用ふること勿れとは、必ず邦を亂せば也。

● 土地は民の所在する所、衆あるの象す ● 庶民を保護するをいふ ● 兵衆を畜養するをいふ ● 天子の恩寵を受くること ● いたはり念ふ意を台む ● 進退宜しきに過するは軍事の常也 ● 天子

地上有水比。先王以建萬國。親諸侯。○比之初六。有他吉也。○比之自内。不自失也。○比之匪人。不亦傷乎。○外比於賢。以從上也。○顯比之吉。位正中。舍

地上に水あるは比なり。先王以て萬國を建て諸侯を親む。比の初六は、他の吉ある也。○之を比するに内よりとは、自ら失はざる也。○之を比する人に匪ずとは、亦傷ましからずや。○外、賢に比すとは、以て上に從ふ也。○顯に比するの吉は、位正中なる也。逆を捨てて順を取る。前禽を失ふ也。邑人誠めずとは、上中ならしむる也。○之を比する首无しとは、終る所无き也。

● 坤は國土の象、地水の水は相比して地に著く也 ● 先王其象を親て諸侯を萬國に封建する也 ● 始めに能く誠あれば終りに必ず吉を得るをいふ ● 其心を失はざるをいふ ● 賢者に比むをいふ ● 所謂去る者は追はざる也 ● 所謂來る者は拒まざる也

逆取順。失前禽也。邑人不誠。上使中也。○比之无首。无所終也。

風行天上。小畜君子。以懿文德。○復自道。其義吉也。○牽復在中。亦不自失也。○夫妻反目。不能正室也。○有孚惕出。上合志也。○有孚擊如。不獨富也。○既雨既處。德積載也。君子征凶。有所疑也。

風、天上に行くは小畜なり。君子以て文徳を懿くす。復ること道よりすとは、其義吉なる也。○牽いて復る。中に在り。亦自ら失はざる也。○夫妻目を反すとは、室を正しうすること能はざる也。○孚ありて惕れ出づとは、上、志を合する也。○孚ありて擊如たりとは、獨り富まざる也。○既に雨ふり既に處るとは、徳、積載する也。君子往けば凶なりとは、疑ふ所ある也。

上天下澤履。君子以辯上下。定民志。○素履之往。獨行願也。○幽人貞吉。中不

上天に下澤なるは履なり。君子以て上下を辯ち民志を定む。素履の往くは、獨り願を行ふ也。○幽人貞なれば吉なりとは、中、自ら亂れざる也。○眇能く視るとは、以て明ありとするに足らざる也。○跛能く履むとは、以て與に行ふに足らざる也。人を唾ふの凶は、位當らざれば也。武人、大君と爲るとは、志剛なれ

自亂也。○眇能視。不足。以有明也。跛能履。不足。以與行也。噬人。凶。位不當也。武人爲于大君。志剛也。○愬愬終吉。志行也。○夬履貞厲。位正當也。○元吉。在上大有慶也。

ば也。○愬愬たり。終に吉なりとは、志行はるゝ也。○夬して履む貞なれども、厲しとは、位正に當る也。○元吉にして上に在りとは、大に慶ある也。

天地交泰。后以財成。天地之道。輔相天地之宜。以左右民。○拔茅。征吉。志在外也。○包荒。得尚于中行。以光大也。○无

天地交るは泰なり。后以て天地の道を財成し、天地の宜を輔相して以て民を左右す。『茅を抜く征いて吉なりとは、志、外に在る也。○荒を包ね、中行を尙ぶことを得とは、以て光大なる也。○平かにして跛むかざるは天地の際也。○翩翩として富ますとは、皆實を失ふ也。戒めずして以て孚ありとは、中心願ふ也。○以て祉あり。元吉なりとは、中以て願を行ふ也。○城、隍に復るとは、其命亂るゝ

平不_レ跛。天地際也。○翻翻不_レ富。皆失_レ實也。不_レ戒以孚。中心願也。○以社元吉。中以行願也。○城復_二于隍。其命亂也。

也。

● 財は親と同じ、程よくきりさばきて成就せしむること ● 宜しき道をたすけたすけること ● 佐佑と同じ、左にたすけ右にたすけること ● 善が復た否となる交會の處といふ意 ● 布告命令の下よりするは是れ亂る、本也

天地不_レ交否。君子以_レ儉_レ德辟_レ難。不_レ可_二榮以_レ祿。○拔_レ茅貞吉。志在_レ君也。○大人否_レ亨。不_レ亂_レ羣也。○包_レ羞。位不當也。○有命_レ无_レ咎。志行也。○大人之吉。位正當也。○否終則傾。何可_レ長也。

天地交はらざるは否なり。君子以て徳を儉め難を避け、榮するに祿を以てすべからず。茅を抜く。貞なれば吉なりとは、志、君に在る也。○大人否にして亨とは、羣を亂さざる也。○羞を包むとは、位當らざる也。○命ありて咎無しとは、志行はるゝ也。○大人の吉は、位正しく當る也。○否終れば則ち傾く、何ぞ長かる可けんや。

● 其徳を收斂(ひきしめ)して外にあらはさず以て患難を免るゝこと

天與_レ火同人。君子以_レ類_レ族辨_レ物。○出_レ門同_レ人。又誰咎也。○同人于宗。吝道也。○伏_レ戎于莽。敵剛也。三歲不_レ興。安行也。○乘_レ其墉。義弗克也。其吉。則困而反_レ則也。○同人之先。以_レ中直也。大師相遇。言_レ相克也。○同人无_レ郊。志未_レ得也。

天と火とは同人なり。君子以て族を類し物を辨す。門を出でて人に同じうす、又誰をか咎めん。○同人宗に于いてとは、吝の道也。○戎を莽に伏すとは、敵剛なる也、三歳興らずとは、安んぞ行はれんと也。○其墉に乗るとは、義克ざる也。其吉なるは則ち困んで則に反れば也。○同人の先きとは、中直なるを以て也。大師相遇ふとは、相克つを言ふ也。○同人郊に于いてすとは、志未だ得ざる也。

● 族は種族なり、同類を類すること、是れ同を同とする也、物は事物なり差別を辨ずること、是れ異を異とする也 ● 義に屈して理に復すること ● 先に號びて後に笑ふ所以はと問ひかゝる也 ● 中正と同じ

火、天上に在るは大有なり。君子以て惡を過め善を揚げ、天の休命に順ふ。『大有の初九は、害に交はること無しと也。○大車以て載すとは中に積んで敗れざる也。○公用つて天子に亨せらるとは、小人害ある也。○其彭たるに匪ずんば咎無しとは、明辯の哲たる也。○厥の孚交如たりとは、信以て志を發する也。威如の吉とは、

與也。○係二丈夫志舍下也。○隨有獲。其義凶也。有孚在道。明功也。○孚于嘉吉。○孚于中吉。○拘二保之上窮也。

り、吉なりとは、位正中なる也○之を拘係すとは、上窮する也。

●一日寝めて息まず、日暮に向ひ、部屋に入りて安息する義、動息あり君子時に隨ふの道也 ● 賢、兩立せざるをいふ ● 卑を捨て、高に従ふをいふ ● 其義當に凶を得べしとなり ● 其世の同弊なるによりて身を保つ功あるをいふ

山下有風蠱。君子以振民育德。○幹二父之蠱。志承考也。○幹二母之蠱。得二中道也。○幹二父之蠱。終无咎也。○裕二父之蠱。往未得也。○幹二父用譽。承以徳也。○不事二王侯。志可則也。

山下に風あるは蠱あり。君子以て民を振ひ徳を育ふ」父の蠱を幹すとは、意考に承くる也○母の蠱を幹すとは、中道を得る也○父の蠱を幹するは、終に咎無き也○父の蠱を裕にすとは往いて未だ得ざる也○父に幹して用つて譽ありとは承くるに徳を以てすれば也○王侯に事へずとは、志則る可き也。

● 人民を振起して徳性を涵養すること、一説には人民を救ひ施し、己の徳を明にして民を新にすと稱けり ● 其心に死したる父の事をうけついで成功せんと願ふをいふ ● 賢和輔佐の功に由るをいふ ● 苟も世に合ふんことを求めざる其志の高尙なるはたしかに操縦とするに足るをいふ

澤上に地あるは臨なり。君子は以て教思窮まり無く、民を容保すること疆り無し」咸臨す、貞にして吉なりとは、志、正を行ふ也○咸臨す、吉にして利しからざることも無しとは、未だ命に順はざる也○甘臨すとは、位當らざる也。既に之を憂ふ、咎長からざる也○至臨す、咎無しとは、位當る也○大君の宜とは中を行ふの謂也○敦臨の吉は、志内に在る也。

● 道を心に實得し身に實行して備ひ所なく賦ふところなきをいふ ● 民を仁愛し包摂し保養して至らざる所なきをいふ

大君之宜。行中謂也。○敦臨之吉。志在内也。

風行地上觀。先王以省方觀民設教。○初六童觀。小人道也。○闚觀女貞。亦可醜也。○觀我

風、地上に行くは觀なり。先王以て方を省み民を觀、教を設く」初六の童觀は、小人の道也○闚觀す、女の貞なりとは、亦醜づ可き也○我が生を觀て進退すとは、未だ道を失はざる也○國の光を觀るとは、賓たるを尙ぶ也○我が生を觀るとは、民を觀る也○其生を觀るとは、志未だ平ならざる也。

生進退。未失道也。○觀二國之光。尙實也。○觀我生。觀民也。○觀其生。志未平也。

① 四方即ち天下を名乗ること、巡視するをいふ ② 民風土俗を詳にしらべ見ること ③ 天子より實に優待せらるるをいふ ④ 民を觀て以て自ら省みる也 ⑤ 未だ志を得ざるを同し

雷電噬嗑。先王以明罰勅法。○履校滅趾。不行也。○噬膚滅鼻。乘剛也。○遇毒。剛不當也。○利艱貞吉。未光也。○貞厲无咎。得當也。○何校滅耳。聰不明也。

雷電は噬嗑なり、先王以て罰を明にし法を勅しくす。校を履いて趾を滅るとは、行かしめざる也。膚を噬んで鼻を滅るとは、剛に乗ずればなり。毒に遇ふとは、位當らざる也。艱貞に利し、吉なりとは、未だ光ならざる也。貞厲にして咎無しとは、當を得る也。校を何うて耳を滅るとは、聰不明ならざる也。

① 此卦内を震とし外を離とす、雷電の象あり、明にして且つ威あるの意 ② 實罰を明にし、法度を正しくする ③ 遇るれども聞くことを得ざる也

山下有火賁。君子以明庶

山下に火あるは賁なり。君子以て庶政を明にし、敢へて賦を折むること無し。

政。无敢折獄。○舍車而徒。義弗乘也。○賁其須。與上興也。○永貞之吉。終莫之陵也。○六四當位。疑也。匪寇婚媾。終无尤也。○六五之吉。有喜也。○白賁无咎。上得志也。

車を捨てて徒すとは、義乗らざる也。其須を賁るとは、上と興る也。永貞の吉は、終に之を陵ぐこと莫き也。六四は位に當りて疑はるる也。寇するに匪ず婚媾すとは、終に尤无き也。六五の吉は、喜ある也。白賁、咎無しとは、上志を得る也。

① 山下の火は明能く物を照せども又之ををさめて疑にせざるの意を含む ② 賁はにわたる政務を明確にして以て人民をして其方針に迷はざらしむること ③ 其意を折むるにも再三覆尋して敢へて遂に決断せず以て僥倖の事なからしむるをいふ ④ 六二が九三と一所に進行をいふ ⑤ 身を飾すること盛衰なるものは他の恆舊を受くるをいふ

山附於地剝。上以厚失安。宅○剝牀以足。以滅下也。○剝牀以辨。未有利也。○剝之无咎。失

山、地に附くは剝なり。上以て下を厚くし、宅を安んず。牀を剝するに足を以てすとは、以て下を滅す也。牀を剝するに辨を以てすとは、未だ與あらざる也。剝之を剝す、咎無しとは、上下を失へば也。牀を剝するに膚を以てすとは、災に切近する也。○官人を以て寵せらるとは、終に尤无き也。○君子は輿を得とは

上下也。○剝
牀以膚。切近
災也。○以宮
人寵終无尤
也。○君子得
輿。民所載也。小人剝膚。終不可用也。

民の載する所也。小人は膚を剝すとは、終に用ふべからざる也。

● 人の上たるものは務めて恩澤を厚くし、以て人民をして其處に安んぜしむべきをいふ ● 輿即ちみかたをいふ ● 天下の人、之を仰ぎ之を載くをいふ ● 輿即ちみかたを

雷在地中復。
先王以至日
閉關商旅不
行。后不省方。
○不遠之復。
以修身也。○
休復之吉。以
下仁也。○頻
復之厲。義无
咎也。○中行
獨復。以從道也。○敦復无悔。中以自考也。○迷復之凶。反君道一也。

雷地中に在るは、復なり。先王以て至日に關を閉ぢ、商旅行かず、后方を省みず、遠からざるの復は以て、身を修むる也。○休復の吉は、以て仁に下れば也。○頻復の厲は、義咎无き也。○中行獨り復るとは、以て道に従ふ也。○復るに敦し、悔無しとは、中以て自ら考す也。○迷復の也は、君道に反れば也。

● 日南至の時、即ち冬至を指す ● 國の四門を閉づるをいふ、警備警戒して陽氣發生の時を持つをいふ ● 中道を以て自ら考すをいふ ● 國の四門を閉づるをいふ、警備警戒して陽氣發生の時を持つをいふ ●

天下雷行。物
與无妄。先王
以茂對時育
萬物。○无妄
之往。得志也。
○不耕獲。未
富也。○行人
得牛。邑人災
也。○可貞无
咎。固有之也。
○无妄之藥。
不可試也。○
无妄之行。窮
之災也。

天の下に雷行き、物ごとく无妄を與ふ。先王以て茂んに時に對して萬物を育ふ。○无妄の往くは、志を得れば也。○耕獲せずとは、未だ富まざる也。○行人の牛を得るは、邑人の災也。○貞にすべし、咎無しとは、固く之を有する也。○无妄の藥は、試むべからざる也。○无妄の行は、窮の災也。

● 原文物與の二字を行とす説あり、もし之に従はば當に「天下に雷行く无妄なり」とよむべし ● 天時に對應すること ● 萬物をして各々其生を遂げしむるをいふ ● 強ひて治むべからざるをいふ ● 无妄を以て行くとも時勢の行きづまれる場合には却つて災を受くるをいふ ●

天、山中に在るは大畜なり。君子以て多く前言往行を識して以て其徳を畜ふ。厲きことあり。已むに利しとは、災を犯さざる也。○輿、輶を説くとは、中にして尤无き也。○往く攸あるに利しとは、上志を合する也。○六四の元吉は、喜ある也。○六五の吉は、慶ある也。○何ぞ天の衢なりとは、道大に行るゝ也。

● 古人の遺せる格言訓辭又其功績事業を指す

往。上合志也。○六四元吉。有喜也。○六五之吉。有慶也。○何天之衢。道大行也。

山下有雷頤。君子以慎言。語節飲食。○觀我朵頤。亦不足貴也。○六二往內。行失類也。○十年勿用。道大悖也。○頤頤之吉。上施光也。○居貞之吉。順以從上也。○由頤厲吉。大有慶也。

山下に雷あるは頤なり。君子以て言語を慎み飲食を節にす。我を觀て頤を朵るとは、亦貴ぶに足らずとなり。○六二の往けば凶なりとは、行けば類を失へる也。○十年まで用ふること勿れとは、道大に悖れば也。○頤頤の吉は、上の施なり光なる也。○貞に居るの吉は、順にして以て上に從ふ也。○由頤は厲吉なりとは、大に慶ある也。

● 其行き求むる所が其同類に非ざるをいふ ● 徳政の成功の光大なること

澤減木大過。君子以獨立不懼。遯世无悶。○藉用白茅。柔在下也。

澤、木を減するは大過なり。君子以て獨立して懼れず、世を遯れて悶ゆること無し。藉くに白茅を用ふとは、柔、下に在る也。○老夫の女妻には、過ぎて以て相與する也。○棟橈の凶は、以て輔ある可からざる也。○棟隆の吉は、下に橈まざる也。

○老夫女妻。過以相與也。○棟橈之凶。不可以有輔也。○棟隆之吉。不橈乎下也。○枯楊生華。何可久也。○老婦士夫。亦可醜也。○過涉之凶。不可咎也。

○枯楊華を生ずとは、何ぞ久しかる可けんやと也。老婦の士夫も、亦醜づべき也。○過涉の凶は、咎む可からざる也。

● 大水、樹木を流没すること、以て流俗道を失ふ譬とす ● 強ひて衆に隨ふを欲せず、故に咎れず ● 敢へて世に希ふ所なし、故に咎れず

水洊至習坎。君子以常德行。習教事。○習坎入坎。失道凶也。○求小得。未出中也。○來之坎。坎終无功也。○樽酒簋二。剛柔際也。○坎不盈。中未大也。○上六失道。凶三歲也。

水洊に至るは習坎なり。君子以て徳行を常にし、教事を習はす。習坎、坎に入るとは、道を失ひて凶なる也。○求めて小しく得とは、未だ中を出でざる也。○來るも之くも坎坎たりとは、終に功无き也。○樽酒簋に貳すとは、剛柔際する也。○坎盈たすとは、中未だ大ならざる也。○上六道を失ふ、凶なること三歲也。

● 重習の義、かさねること、水の上に水あり流れて已まざる象なり ● 之を己に修むること ● 之を人に施すこと ● 剛柔相濟ふをいふ ● 中道未だ大ならざるをいふ

明兩作離。大人以繼明照于四方。○履錯之敬。以辟咎也。○黃離元吉。得中道也。○日昃之離。何可久也。○突如其來如。无所容也。○六五之吉。離王公也。○王用出征。以正邦也。

明、兩作するは離なり。大人以て明を繼ぎ、四方を照す。履錯の敬は、以て咎を辟くる也。○黄離にして元吉なりとは、中道を得る也。○日昃の離とは、何ぞ久しかるべけんや。○突如其として其れ來たりとは、容るゝ所なき也。○六五の吉は、王公に離けば也。○王用つて出で征すとは、以て邦を正しくする也。

● 離卦の相重なるは明の二つ起る象なり ● 天下に君たる人をいふ ● 繼續して絶えず明を照すこと

下象傳

山上に澤あるは威なり。君子以て虚にして人を受く。其拇に咸するとは、志外に在る也。○凶なりと雖も居れば吉なりとは、順へば害あらざる也。○其股に咸するとは、亦處らざる也。志人に隨ふに在り、執る所下なれば也。○貞吉なれば悔亡ぶとは、未だ感の害あらざる也。憧憧として往來すとは、未だ光大ならざる也。○其胸に咸するは、志末也。○其輔頰舌に咸するは、口説を際ぐる也。

● 心に扶む所なきは、又私慾なきをいふ ● 受け入る、こと即ち包むの意 ● 動を謂ふ、靜を守らざるをいふ ● 愚下也、愚陋なり ● 字の如く説明して志の歸むべしといふものあり、又、無と説明して心の動かざるをいふものあり、震中州は末と爲し此の下に大の字を脱せるものと爲す亦一見論也 ● 口を滾りて假辭をよるふこと

雷風は慎なり。君子以て立ち、方を易へず。浚恒の凶は、始めに求むること深

山上に澤あり。君子以て虚受。○其拇に咸するとは、志外に在る也。○其股に咸するとは、亦處らざる也。○其胸に咸するは、志末也。○其輔頰舌に咸するは、口説也。雷風恒。君子

以立不易方。○凌恆之凶。始求深也。○九二悔亡。能久中也。○不恆其德。无所容也。○久非其位。安得禽也。○婦人貞吉。從一而終也。夫子制義。從婦凶也。○振恆。在上大无功也。

ければ也○九二の悔亡ぶとは、能く中に久しき也○其徳を恆にせずとは、容るゝ所无き也○久しく其位に非ず、安んぞ禽を得ん○婦人の貞吉とは、一に従つて終る也。夫子は義を制す、婦に従へば凶也○恆を振うて上に在りとは、大に功无き也。

● 止りて遷らざることを、我操るべき道を守りて動かざるをいふ ● 方は即ち道をいふ ● 禽獸なき地に獸したりとて、物物のとれざるに譬へいふ也 ● 順の道也 ● 義を以て決断すること ● 禽獸なき地に獸し

天下有山遯。君子以遠小人。不惡而嚴。○遯尾之厲。不往何災也。○執用黄牛。固志也。○係遯之厲。不疾

天下に山あるは遯なり。君子以て小人を遠け、惡くせずして嚴にす」遯尾の厲は、往かさんば、何の災あらんや○執るに黄牛を用ふとは、志を固くする也○係遯の厲は、疾ありて憚む也。臣妾を畜ふは吉なりとは、大事に可ならざるなり○君子は好みて遯る、小人は否ざる也○嘉遯は貞にして吉なりとは、志を正しうするを以てなり○肥遯す、利しからざることを無しとは、疑ふ所无き也。

● 所謂多らずしては鉄鏡をもち、が如き状態をいふ

憊也。畜臣妾。吉。不可大事也。○君子好遯。小人否也。○嘉遯貞吉。以正志也。○肥遯遯不利。无所疑也。

● 所謂多らずしては鉄鏡をもち、が如き状態をいふ

雷在天。上。大壯。君子以非禮弗履。○壯于趾。其孚窮也。○九二貞吉。以中也。○小人用壯。君子罔也。○藩決不羸。尚往也。○羊子易。位不當也。○不能退。不能遂。不詳也。艱則吉。咎不长也。

雷、天上に在るは大壯なり。君子以て禮に非ざれば履まず」趾に壯なりとは、其孚窮する也○九二の貞吉は、中を以て也○小人は壯を用ひ、君子は罔する也○藩決れて羸ますとは、往を尙ぶ也○羊を易に喪ふとは、位當らざる也○退くこと能はず、遂ぐるること能はずとは、詳にせざる也。艱すれば則ち吉なりとは、咎、長からずと也。

● 審かに時勢を度り之が處を爲すを謂ふ

明出地上。晉。君子以自昭明德。○晉如

明、地上に出づるは晉なり。君子以て自ら明德を明にす」晉如たり摧如たりとは、獨り正を行ふ也。裕なれば咎無しとは、未だ命を受けざる也○茲の介福を

也。无初有終。遇剛也。○交孚无咎。志行也。○厥宗噬膚。往有慶也。○遇雨之吉。羣疑亡也。

羣疑亡ふる也。

● 坦然たる平易の中に介然として犯し難き者あり、靡然たる大公の中に謙乎としに居ざるものあるをいふ

山上有水蹇。君子以反身修德。○往蹇來譽。宜待也。○王臣蹇蹇。終无尤也。○往蹇來反。內喜之也。○往蹇來連。當位實也。○大蹇朋來。以中節也。○往蹇來碩。志在內也。○利見大人。以從貴也。

山上に水あるは蹇なり。君子以て身に反り徳を修む。往けば蹇み來れば譽ありとは、待つに宜しき也。○王臣蹇蹇たりとは、終に尤なき也。○往きて蹇み、來りて反るとは、内之を喜ぶ也。○往きて蹇み來りて連るとは、位に當りて實なる也。○大に蹇みて朋來るとは、中節を以て也。○往きて蹇み來りて碩なりとは、志、内に在る也。大人を見るに利しとは、以て貴に從ふ也。

● 正を得ること ● 中正にして節あること

雷雨作。解。君子以赦過宥罪。

雷雨作るは解なり。君子以て過を赦し罪を宥む。剛柔の際には、義咎无き也。○

罪。○剛柔之際。義无咎也。○九二貞吉。得中道也。○負且乘。亦可醜也。○自我致戎。又誰咎也。○解而拇。未當位也。○君子有解。小人退也。○公用射隼。以解悖也。

九二の貞吉は、中道を得る也。○負うて且つ乗るとは、亦醜つ可しと也。我より戎を致す、又誰をか咎めん。○而の拇を解くとは、未だ位に當らざる也。○君子解くことありとは、小人退く也。○公用つて隼を射るは、以て悖を解く也。

● 此の卦内坎にして外震なり、故に雷雨作るの象と爲す ● 過あるものは赦して問はず非あるものは寛にして之を宥め、其威怒を收めて大に恩澤を施すをいふ ● 悖逆の小人を解散するをいふ

山下有澤損。君子以懲忿窒欲。○已事遄往。尙合志也。○九二利貞。中以為志也。○一人行。三則疑也。○損其疾。亦可喜也。○六五

山下に澤あるは損なり。君子以て忿を懲し欲を窒ぐ。事を已めて遄に往くとは、尙、志を合する也。○九二は貞に利しとは、中以て志を爲す也。○一人行くとは、三なれば則ち疑ふと也。○其疾を損すとは、亦喜ぶべしと也。○六五の元吉は、上より裕くる也。○損せずして之を益すとは、大に志を得る也。

● 忿(いかり)と欲とは身の損也、之を懲し之を窒ぐは損を損する也、損卦の象によりて此意を領すべし、馬の解には此例甚だ多し注意するを要す ● 尙(上)也、かみと訓じ、のぼると訓じ、たふとぶと訓ず、如何によみても此處にては樂支なし

元吉、自_レ上_レ祐也。○弗_レ損益之。大得_レ志也。

風雷益。君子以見_レ善則遷。有_レ過則改。○元吉无_レ咎。下不_レ厚事也。○或益_レ之。自_レ外來也。○益用_レ凶事。固有_レ之也。○告_レ公從。以益_レ志也。○有_レ孚惠心。勿_レ問之矣。惠_レ我德。大得_レ志也。○莫_レ益_レ之。偏辭也。或擊_レ之。自_レ外來也。

風雷は益なり。君子以て善を見れば則ち遷り、過あれば則ち改む。元吉にして咎無しとは、下厚事せざる也。○或は之を益すとは、外より來る也。○益するに凶事を以てすとは、固く之を有する也。○公に告げて從はるとは、以て志を益する也。○孚ありて惠心なれば、之を問ふこと勿れ。我が徳を惠にすとは、大に志を得る也。○之を益すること莫しとは、偏辭也。或は之を撃つとは外より來る也。

澤上_レ於_レ天。夫君子以施_レ祿及_レ下。居_レ德則忌。○不勝而往。咎也。○有_レ戒勿_レ恤。得_レ中

澤、天に上るに夫なり。君子以て祿を施して下に及ぼし、徳に居れば則ち忌まる。勝たずして往くとは、咎ある也。○或あるも恤ふること勿れとは、中道を得る也。○君子夫夫なりとは、終に咎无き也。○其行くこと次且たりとは、位當らざれば也、言を聞きて信ぜずとは、聰、明ならざれば也。○中行咎无しとは、中未だ光

ならざる也。○號ぶこと无きの凶は、終に長かるべからざる也。

● 自己を以て有徳者として誇れば却て衆人に厭はるゝをいふ、本義には此語を未評といへり

道也。○君子夫夫。終无_レ咎也。○其行次且。位不當也。聞_レ言不信。聰不明也。○中行无_レ咎。中未_レ光也。○无_レ號之凶。終不可_レ長也。

天下に風あるは姤なり。后以て命を施して四方に誥ぐ。金梩に繋ぐとは、柔道牽るゝ也。○包に魚ありとは、義賓に及ばざる也。○其行くこと次且たりとは、行いて未だ牽れざる也。○魚无きの凶は、民に遠かる也。○九五の章を含むは、中正なる也。天より隕つることありとは、志、命を捨てざる也。○其角に姤ふとは、上窮まりて吝なる也。

● 君后、命令を施してまねく四方に布告すること、之を風天下に行るの象に取る也 ● 陰柔の道徳に例せられ、自由ならざること ● 人情に近からざるをいふ

天下有_レ風。姤。后以_レ施_レ命。誥_レ四方。○繫_レ于金梩。柔道牽也。○包有_レ魚。義不及_レ賓也。○其行次且。行未_レ牽也。○魚无_レ凶。遠民也。○九五。含_レ章。中_レ正也。有_レ隕_レ自_レ天。志不_レ舍_レ命也。○姤_レ其角。上窮吝也。

澤上於地萃。君子以除戎器。戒不虞。乃亂乃萃。其志亂也。○引吉无咎。中未變也。○往无咎。上巽也。○大吉无咎。位不當也。○萃有位。志未光也。○齋香滌滌。未安上也。

澤、地上に上るは萃なり。君子以て戎器を除め不虞を戒む。乃ち亂れ乃ち萃るとは、其志亂るゝ也。○引けば吉、咎無しとは、中未だ變ぜざる也。○往けば咎無しとは、上巽ふ也。○大吉にして无咎しとは、位當らざれば也。○萃るに位ありとは、志未だ光ならざる也。○齋香滌滌すとは、未だ上に安んぜざる也。

● 兵器を整理すること ● 不虞の患に備ふる事 ● 中徳のかけらざるをいふ

地中生木升。君子以順德。積小以高大。○允升大吉。上合志也。○九二之孚。有喜也。○升虛邑。无所疑也。○王用亨于岐山。順事也。

地中に木を生ずるは升なり。君子以て徳に順ひ、小を積んで以て高大なり。允に升る、大吉なりとは、上、志を合する也。○九二の孚とは、喜ある也。○虚邑は升るとは、疑ふ所无き也。○王用つて岐山に亨するは、順にして事ふる也。○貞なれば吉、階に升るとは、大に志を得る也。○冥升上に在りとは、消して富まざる也。

● 漸を以て徳に漸むをいふ ● 幽徳を以て之に導ふるをいふ ● 消はやむこと、やみて升らざるをいふ

○貞吉升階。大得志也。○冥升在上。消不富也。

澤无水困。君子以致命遂志。○入于幽谷。幽不明也。○困于酒食。中有慶也。○據于蒺藜。乘剛也。入于其宮。不見其妻。不祥也。○來徐徐。志在下也。雖不當位。有與也。○劓刖。志未得也。乃徐有說。以中直也。利用祭祀。受福也。○困于葛藟。未當也。動悔。有悔吉行也。

澤に水无きは困なり。君子以て命を致し、志を遂ぐ。幽谷に入るとは、幽にして明ならざる也。○酒食に困むとは、中にして慶ある也。○蒺藜に據るとは、剛に乗する也。其の宮に入りて其妻を見ずとは、不詳なる也。○來ること徐徐たりとは、志、下に在る也。位に當らずと雖も、與ある也。○劓、刖、用つて祭祀するに利しとは、福を受くる也。○葛藟に困むとは、未だ當らざる也。動けば悔ゆ、悔いありとは、吉の行なり。

● 我が生命を授くること ● 忠君の目的を達すること ● 剛中の徳を指す ● 凶徳と同じ ● 吉を得るの道をいふ

木上有水井。木上に水あるは井なり。君子以て民を勞し勸め相く。井泥にして食はれずとは、

木上に水あるは井なり。君子以て民を勞し勸め相く。井泥にして食はれずとは、

君子以勞民勸相。○井泥不食。下也。舊井无禽。時舍也。○井谷射鮒。无與也。○井渫不食。行恻也。求王明也。○求王明。受福也。○井甃无咎。修井也。○富泉之食。中正也。○元吉在上。大成也。

下なれば也。舊井に禽無しとは、時に舍てらるゝ也。○井谷に鮒を射るとは、與するもの无き也。○井渫うして食はれずとは、行くもの惻める也。王明を求めて、福を受くる也。○井甃にす。咎無しとは、井を修むる也。○寒泉の食はるゝは、中正なれば也。○元吉上に在り、大に成る也。

● 民をして勤勞力作して互に相ひ勤めて勉めしむるをいふ ● 最下に位置して水澄まざるをいふ ● 井に於て用を爲さざるをいふ ● 井甃を通行するもの之をいたむと説く者あり、或は行くを行ひとみて行の中に於て痛ましき事なりと説く者あり、通解には之を未詳と爲す

澤中有火革。君子以治曆明時。○鞶用黄牛。不可二以有爲也。○巳日革之。行有

澤中に火あるは革なり。君子以て曆を治め時を明にす。鞶むるに黄牛を用つてすとは、以て爲ること有るべからざる也。○巳る日に之を革むとは、行いて嘉ある也。○革言三就すとは、又何くに之かんと。○命を改むるの吉は、志を信する也。○大人虎變するは、其文炳たる也。○君子豹變するは、其文蔚たる也。○小人革面するは、其文炳たる也。○大人虎變するは、其文炳たる也。○君子豹變するは、其文蔚たる也。○小人革面するは、其文炳たる也。

を革むとは、順にして以て君に従ふ也。

● 曆法を修治して四時の序を明にすること ● 著明なるをいふ ● 文蔚の深密なるをいふ

嘉也。○革言三就。又何之矣。○改命之吉。信志也。○大人虎變。其文炳也。○君子豹變。其文蔚也。○小人革面。順以從君也。

木上、火あるは鼎なり。君子以て位を正し命を凝す。鼎、趾を顛にすとは、未だ悖らざる也。否を出すに利しとは、以て貴に従ふ也。○鼎に實ありとは、之を所を慎む也。我が仇疾ありとは、終に尤无き也。○鼎耳革まるとは、其義を失ふ也。○公の餼を覆すとは、信如何ぞや。○鼎、黄耳あるは、中以て實となす也。○玉鉉、上に在り、剛柔節する也。

● 其の居る所の位を正しく妄に進みて功利を求めず、以て天命を一身に凝らすべきをいふ ● 其の隨ふ所を實むこと ● 君臣の義を辨ざるをいふ ● 信じて其の依る所を固るをいふ

木上有火鼎。君子以正位凝命。○鼎顛趾。未悖也。利出否。以從貴也。○鼎有實。慎所之也。我仇有疾。終无尤也。○鼎耳革。失其義也。○覆公餼。信如何也。○鼎黄耳。中以爲實也。○玉鉉在上。剛柔節也。

澤上有雷歸妹。君子以永終知敝。○歸妹以娣。以恆也。跛能履吉。相承也。○利幽人之貞。未變常也。○歸妹以須。未當也。○愆期之志。有待而行也。○帝乙歸妹。不如其娣之袂良也。其位在中。以貴行也。○上六元實。承虛筐也。

澤上に雷あるは歸妹なり。君子以て終を永くし敝るゝを知る。妹を歸がすに娣を以てすとは、恆を以て也。跛能く履む、吉なりとは、相承くる也。○幽人の貞に利しとは、未だ常を變せざる也。○妹を歸がすに須を以てすとは、未だ當らざる也。○期を愆つゝの志は、待つこと有つて行く也。○帝乙妹を歸がすは、其娣の袂の良きに如かずとは、其位中に在り、貴を以て行ふ也。○上六の實无きは、虚筐を承ぐる也。

● 其終を永くせんと欲せば、豫め其の敝を知りて、之を始に正しうすべし、則ち終に敝るゝことなきをいふ ● 其の袂を永くせざるをいふ

雷電皆至豐。君子以折獄致刑。○雖旬无咎。過旬災也。○有孚發

雷電皆至るは豐なり。君子以て獄を折め刑を致す。旬しと雖も咎無しとは、旬しきを過ぐれば災ある也。○孚ありて發若たりとは、信以て志を發する也。○其沛を豐にするは、大事に可ならざる也。其右肱を折るとは、終に用ふべからざる也。○

若。信以發志也。○豐其沛。不可大事也。折其右肱。終不可用也。○豐其蔀。位不當也。日中見斗。幽不明也。遇其夷主。吉。行也。○六五之吉。有慶也。○豐其屋。天際翔也。闔其戶。自藏也。

其蔀を豐にすとは、位當らざる也。日中に斗を見るときは、幽にして、明ならざる也。其夷主に遇へば吉なりとは、行るゝ也。○六五の吉は、慶ある也。○其尾を豐にするは、天際に翔る也。其戸を闔ふに、闔として其れ人無しとは、自ら藏るゝ也。

● 雷電に明厥の象あり ● 明以て能く曲直を斷ずるをいふ ● 威以て能く奸邪を懲ずるをいふ ● 不正にして陰柔の主に事ふ故に幽暗なり ● 郭本には行の上の志の字あり ● 要に自ら尊大にすること天に違ふが如く然り ● 自ら人を絶つこと

山上有火旅。君子以明慎用刑。而不留。獄。○旅瑣瑣。志窮災也。○得童僕貞終

山上に火あるは旅なり。君子以て明に慎みて刑を用ひて、獄を留めず。旅瑣瑣たりとは、志窮まりて災ある也。○童僕の貞を得たりとは、終に尤无き也。○旅に其次を焚くとは、亦以て傷しとなり。旅を以て下に與すとは、其義喪ふ也。○旅、處に于いてすとは、未だ位を得ざる也。其資斧を得とは、心未だ快からざ

无尤也。○旅焚其次。亦以傷矣。以旅與下。其義喪也。○旅于處。未得位也。得其資斧。心未快也。○終以譽命。上達也。○以旅在上。其義焚也。喪于易。終莫之聞也。

るなり○終に以て譽命ありとは、上に達ぶ也○旅を以て上に在り、其義焚く也。牛を易に喪ふとは、終に之を聞くにと莫き也。

●明以て好を照し、實以て詳を致し、之を斷ずるに、果はなれば宛前あることなきをいふ ●名譽の上達するをいふ ●人言を用ひざることをいふ

隨風巽。君子以申命行。○進退志疑也。○利武人之貞。○志治也。○紛若之吉。得中也。○頻巽之吝。○志窮也。○田獲三品。有功也。○九五之吉。位正中也。○巽在牀下。上窮也。喪其資斧。正乎凶也。

隨風は巽なり。君子以て命を申ね事を行ふ。進退すとは、志疑ふ也。武人の貞に利しきは、志治まる也。○紛若の吉は、中を得る也。○頻巽の吝は、志窮まる也。○田して三品を獲るとは、功ある也。○九五の吉は、位正中なる也。○巽して牀下に在りとは、上窮する也。其資斧を喪ふとは、正しきも凶なる也。

●風の相繼いで至るをいふ ●君子の衆に命するや三令五申し、豫め人をして其趨く所と其の避くる所とを知らしめて以て其事を行ふをいふ

麗澤兌。君子以朋友講習。○和兌之吉。行未疑也。○孚兌之吉。信志也。○來兌之凶。位不當也。○九四之喜。有慶也。○孚于剝。位正當也。○上六引兌。未光也。

麗澤は兌なり。君子以て朋友講習す。和兌の吉は、行ひて未だ疑はざる也。○孚兌の吉は、志を信にする也。○來兌の凶は、位當らざれば也。○九四の喜は、慶ある也。○剝に孚ありとは、位正に當る也。○上六の引いて兌ふとは、未だ光ならざる也。

●麗澤相附くをいふ ●朋友相會し、義理を講明し、德行を修習するをいふ

風行水上。渙。先王以享于帝。立廟。○初六之吉。順也。○渙奔其机。得願也。○渙其躬。志在外也。○渙其羣。元吉。光大也。○王居无咎。正位也。○渙其血。遠害也。

風、水上に行くは渙なり。先王以て帝を享し廟を立つ。初六の吉は、順ふ也。○渙するとき其机に奔るとは、願を得る也。○其躬を渙すとは、志、外に在る也。○其羣を渙すとは、害に遠かる也。

●上帝を郊に享し、廟を宮に立て以て祭祀の禮と爲し至誠の心をして感應せしむるをいふ

澤上有水節。君子以制數度。議德行。不出庭。知通塞也。不出門庭。失時極也。不節之嗟。又誰咎也。○安節之亨。承上道也。○甘節之吉。居位中也。○苦節貞凶。其道窮也。

澤上に水あるは節なり。君子以て數度を制し、德行を議す。戸庭を出でざるは通塞を知らばなり。○門庭を出でざれば凶なりとは、時を失ひて極まみ也。○不節の嗟は、又誰をか咎めん。○安節の亨は、上の道を承くる也。○甘節の吉は、位に居りて中なる也。○苦節、貞なれば凶なりとは、其道窮まる也。

● 數度(かず)に差別あり、之を節して論せしめざるをいふ。● 德行は宜に過ふをよしとす、之をしつ過不及なからしむるをいふ。

澤上有風中孚。君子以議獄緩死。○初九虞吉。志未變也。○其子和之。中心願也。○或鼓或罷。位不當也。

澤上に風あるは中孚なり。君子以て獄を議し死を緩うす。初九、虞れば吉なりとは、志未だ變ぜざる也。○其子之に和すとは、中心願ふ也。○或は鼓うち或は罷むとは、位當らざれば也。○馬匹亡ぶとは、類を絶ちて上る也。○孚あつて變如たりとは、位正に當る也。○翰首天に登るとは、何ぞ長かる可けんやと也。

● 獄の疑ふべきものは之を議し、死の宥すべきものは之を緩うすること。● 其明類を絶つて上りて五に従ふをいふ。

○馬匹亡。絶類上也。○有孚。學如位正當也。○翰音登于天。何可長也。

山上に雷あるは小過なり。君子以て行は恭に過ぎ、喪は哀に過ぎ、用は儉に過ぐ。飛鳥以て凶なりとは、如何ともすべからざる也。○其君に及ばずとは、臣は過ぐべからざる也。○從へば或は之を賤ふとは、凶如何ぞと也。○過ぎずして之に過ふとは、位當らざる也。往けば厲し必ず戒むとは、終に長うすべからずと也。○密雲雨ふらずとは、已だ上れる也。○遇はずして之に過ぐとは、已だ充れる也。

○弗過遇之。位不當也。往必戒。終不可長也。○密雲不雨。已上也。○弗遇過之。已充也。

水在火上既濟。君子以思患而豫防之。○曳其輪。戰无咎也。○七

水、火上に在るは既濟なり。君子以て患を思ひて豫め之を防ぐ。其輪を曳くとは、義咎无き也。○七日にして得とは、中道を以て也。○三年にして之に克つとは、懲れたる也。○終日戒むとは、疑ふ所ある也。○東鄰の牛を殺すは、西鄰の時ある

日得。以中道也。○三年克之。○也。○東鄰殺牛。不如西鄰之時也。實受其福。吉大來也。○濡其首厲。何可久也。

に如かざる也。實に其福を受くとは、吉大に來る也。○其首を濡す、厲しとは、何ぞ久しかる可きと也。

● 兵を用ふるこゝ連年以勞苦を致すをいふ

火在水上未濟。君子以慎辨物居方。○濡其尾亦不知極也。○九二貞吉。中行正也。○未濟征凶。位不當也。○貞吉悔亡。志行也。○君子之光。其暉吉也。○飲酒濡首。亦不知節也。

火、水上に在るは未濟なり。君子以て慎んで物を辨じ方に居る。其尾を濡すとは、極を知らざる也。○九二の貞吉は、中以て正を行ふ也。○未濟、往けば凶なりとは、位當らざる也。○貞なれば吉にして、悔亡ぶとは、志行はるゝ也。○君子の光は、其れ暉きて吉なる也。○酒を飲んで首を濡すとは、亦節を知らざる也。

● 物性の異を辨別しそれをして各其處に居らしむること ● 朱子は極を致し作るべしといへり、震動中州は不知の極なりとよみて之を説けり

繫辭上傳

天尊地卑。乾坤定矣。卑高以陳。貴賤位矣。動靜有常。剛柔斷矣。方以類聚。物以羣分。吉凶生矣。在天成象。在地成形。變化見矣。是故剛柔相摩。八卦相盪。鼓之以雷霆。潤之以風雨。日月運行。一寒一暑。乾道成男。坤道成女。乾

天は尊く地は卑くして、乾坤定まる。卑高以て陳して、貴賤位す。動靜常ありて、剛柔斷まる。方は類を以て聚まり、物は羣を以て分れて、吉凶生ず。天に在りては象を成し、地に在りては形を成して、變化見はる。是故に剛柔相摩して、八卦相盪す。之を鼓するに雷霆を以てし、之を潤すに風雨を以てし。日月運行して、一寒一暑あり。乾道は男を成し、坤道は女を成す。乾は大始を知り、坤は物を作成す。乾は易を以て知り、坤は簡を以て能くす。易なれば則ち知り易く、簡なれば則ち從ひ易し。知り易ければ則ち親あり、從ひ易ければ則ち功あり。親あれば則ち久しかるべく、功あれば則ち大なるべし。久しかる可きは則ち賢人の徳にして、大なる可きは則ち賢人の業なり。易簡にして天下の理得。天下の理得て、位を其中に成す。右第一章

知大始。坤作二成物。乾以易知。坤以簡能。易則易知。簡則易從。易知則親。易從則有功。有親則可久。有功則可大。可久則賢人之德。可大則賢人之業。易簡而天下之理得。而成位乎其中矣。

① なるぶこと ② 一定の法をいふ ③ 判然と定まるをいふ ④ 善惡邪正、或は榮り、或は分れ、各々其類を以て互に其羣々分ち其の同じき所に順へば吉となり其逆く所にそむけば凶となるをいふ ⑤ 日月星辰を指す ⑥ 山川草木を指す ⑦ 摩撻の義、こゝにては交感と見る可とす ⑧ うごくこと調ず速化の推移をいふ ⑨ 乾は命令し坤は發行すること ⑩ 離からざるを易といひ、類しからざるを簡といふ。離からずして知り、類しからずして能くす、是れ天地の化は自然の道なるをいふ也 ⑪ 天地の中に立ちて之と參なるをいふ

聖人設卦觀象。繫辭焉。而明吉凶。剛柔相推而生變化。是故吉凶者。失得之象也。悔吝者。憂虞之象也。變化者。進退之象也。剛柔者。象也。剛柔者。象也。剛柔者。象也。

聖人卦を設け象を觀、辭を繫けて吉凶を明にす。剛柔相推して變化を生ず。是故に吉凶とは失得の象也。悔吝とは憂虞の象也。變化とは進退の象也。剛柔は晝夜の象也。六爻の動は、三極の道也。是故に君子居つて安んずる所の者は、易の序也。樂んで玩ぶ所の者は、爻の辭也。是故に君子居れば則ち其象を觀て其辭を玩び、動けば則ち其變を觀て其占を玩ぶ、是を以て天より之を祐け、吉にして利しからざることなし。右第二章

晝夜之象也。六爻之動。三極之道也。是故君子居而安者。易之序也。所樂而玩者。爻之辭也。是故君子居則觀其象。而玩其辭。動則觀其變。而玩其占。是以自天祐之。吉无不利。

① 卦面に現れたる形象によりて之に象と名し其辭を付けて以て過ふ者の吉凶を明にするをいふ ② 卦の六爻は下より之を計へて上に至る、第一は初爻、第二は次爻也第三は三爻也第四は四爻也第五は五爻也第六は上爻也 ③ 天地人の三才を以て三極と爲す萬物の標準なるを以て也之を卦に當つれば、初と二とは地也、三、四とは人也、五と上とは天也 ④ 平居無事の時を指す ⑤ 動いて變ある時を指す ⑥ うちなひ吉凶悔吝の微をいふ ⑦ 行ふ所道に合ふ故に天祐を得る也

象者言乎象者也。爻者言乎變者也。吉凶者言乎其失得也。悔吝者言乎其小疵也。无咎者。善補過也。是故列貴賤者存乎位。齊小大者存乎卦。辯吉凶者存乎辭。

象とは象を言ふ者也。爻とは變を言ふ者也。吉凶は其失得を言ふ也。悔吝とは其小疵を言ふ也。咎无しとは善く過を補ふ也。是故に貴賤を列ぬる者は位に存し、小大を齊する者は卦に存し、吉凶を辯するものは辭に存し、悔吝を憂ふる者は介に存し、震いて咎无き者は悔に存す。是故に卦に小大有り、辭に險易あり。辭とは各々其の之く所を指すなり。右第三章

乎辭憂悔吝者存乎介。震无咎者存乎悔。是故卦有大小。辭有險易。辭也者。各指其所之。易與天地準。故能彌綸天地之道。仰以觀於天文。俯以察於地理。是以知幽明之故。原始反終。故知死生之說。精氣為物。游魂為變。是故知鬼神之情狀。與天地相似。故不違。知周乎萬物。而道濟天下。故不過。旁行而不流。樂天知命。故不

易は天地と準ず、故に能く天地の道を彌綸す。仰いで以て天文を觀、俯して以て地理を察す。是故に幽明の故を知る。始を原ね終に反る、故に死生の説を知る。精氣物と爲り、游魂變を爲す。是故に鬼神の情狀を知る。天地と相似たり。故に違はず。知、萬物に周くして、道、天下を濟ふ、故に過たず。旁行して流れず、天を樂み命を知る、故に憂へず。土に安んじ仁に敦し、故に能く愛す。天地の化を範圍して過ぎず、萬物を曲成して遺さず、晝夜の道に通じて知る、故に神は方無くして易は體なし。右第四章

- ① ナゾらふること、之に似類するをいふ
- ② 彌はわたると訓じ、綸はをさむと訓ず候理の分明とすること
- ③ 天地の象を指す
- ④ 精氣の氣が聚まれば有形の物となるをいふ
- ⑤ 其理が消散するときは有終の體を失すをいふ
- ⑥ 情意(心)體狀(形)をいふ
- ⑦ 萬物の理に於て遺る所なきをいふ
- ⑧ 天下の人を盡くなくすをいふ
- ⑨ 旁く行きたりて放散せざること
- ⑩ 自、其分に安んずること
- ⑪ 其行を篤くすること
- ⑫ 偏重(い)がた)の中に入る、をいふ
- ⑬ 其度を過さざること
- ⑭ 委曲(こまやか)に之を作りあげること
- ⑮ 陰陽消長の理をいふ
- ⑯ 方處の定めべきなきをいふ
- ⑰ 形體の見るべきなきをいふ
- ⑱ 陰陽

憂安土敦乎仁。故能愛。範圍天地之化。而不過。曲成萬物。而不遺。通乎晝夜之道。而知。故神无方。而易无體。

一陰一陽之謂道。繼之者善也。成之者性也。仁者見之謂之仁。知者見之謂之知。百姓日用而不知。故君子之道鮮矣。顯諸仁。藏諸用。鼓萬物。而天下與之。聖人同憂。盛德大業至矣哉。富有之謂大業。日新之謂盛德。生生之謂易。

一陰一陽之謂道と謂ふ。之を繼ぐ者は善也。之を成すは性也。仁者之を見て之を仁と謂ひ、知者之を見て之を知と謂ひ、百姓は日に用ひて知らず。故に君子の道は鮮し。諸を仁に顯し、諸を用に藏し、萬物を鼓して聖人と憂を同じうせず、盛徳大業至れるかな。富有、之を大業と謂ひ、日新之を盛徳と謂ひ、生生之を易と謂ひ、象を成す之を乾と謂ひ、法を效す之を坤と謂ひ、數を極め來を知る之を占と謂ひ、變に通ずる之を事を謂ひ、陰陽不測之を神と謂ふ。右第五章

- ① 人道の善を以て天道の善をつぐこと
- ② 之を成就したるものは即ち人性也
- ③ 日々此道を用ひながら自分に氣がつかぬこと
- ④ 君子の道を完全に行ふものは少しと也
- ⑤ 萬物を發育すること
- ⑥ 日々變化して事物の中に寓すること
- ⑦ 鼓動也はたらかすこと
- ⑧ 物として有らざることなきをいふ
- ⑨ 日々變化すること
- ⑩ 變化につぐに變化を以てすること
- ⑪ 天は高く形象をあらはすをいふ
- ⑫ 天に法りて言効を發するをいふ
- ⑬ 易數を推し極むること
- ⑭ 未來の吉凶を知ることを
- ⑮ 變に應じて之を顯進すること
- ⑯ 變化の神は人智を以て測定すべからざること

成象之謂乾。效法之謂坤。極數知來之謂占。進變之謂事。陰陽不測之謂神。

夫易廣矣大矣。以言乎遠則不禦。以言乎迺。則則靜而正。以言乎天地之間。則備矣。夫乾其靜也專。其動也直。是以大生焉。夫坤其靜也翕。其動也闢。是以廣生焉。廣大配天地。變通配四時。陰陽之義配日月。易簡之善配至德。

夫れ易は廣なり大なり。以て遠きを言へば則ち禦がず、以て邇きを言へば則ち靜にして正し。以て天地の間を言へば則ち備る。夫れ乾は其靜なるや專に、其動くや直し、是を以て大に生ず。夫れ坤は其靜なるや翕ひ、其動くや闢く、是を以て廣く生ず。廣大は天地に配し、變通は四時に配し、陰陽の義は日月に配し、易簡の善は至德に配す。右第六章

- ① 無限にして禦ぎ止むる所なきをいふ
- ② 安靜にして正しく存すること
- ③ 事物ごとく存するをいふ
- ④ 其純なるをいふ
- ⑤ 其剛なるをいふ
- ⑥ 合して中に在るをいふ
- ⑦ 開いて外に應ずるをいふ

子曰。易其至矣乎。夫易聖人所以崇德而廣業也。知崇禮卑。崇效

子曰く、易は其れ至れる乎。夫れ易は聖人の徳を崇くして業を廣むる所以也。知は崇く禮は卑し。崇きは天に效ひ卑きは地に法る。天地位を設けて、易、其中に行はる。成性存存は、道義の門なり。右第七章

- ① 身を修むる上より言ふ
- ② 事を立つる上より言ふ
- ③ 易道を行はるゝをいふ、是れ智と謙と並行して人道の立つ所以を示せる也
- ④ 固有の善性を完成すること、是れ道に屬す
- ⑤ 存すべき善心を保全すること、是れ時に屬す
- ⑥ 道義の堂奥に出入すべき門戸なるをいふ

天卑法地。天地設位。而易行乎其中矣。成性存存。道義之門。聖人有以見天下之賾。而擬諸其形容。象其物宜。是故謂之象。聖人有以見天下之賾。而觀其會通。以行其典禮。繫辭焉。以斷其吉凶。是故謂之爻。至顯而不可惡也。言天下之至動而不可

聖人以て天下の賾を見ることありて、諸を其形容に擬し、其物宜に象る、是故に之を象と謂ふ。聖人以て天下の動を見ることありて、其會通を觀て以て其の典禮を行ひ、辭を繫けて、以て其吉凶を斷す。是故に之を爻と謂ふ。天下の至賾を言つて、惡む可からざる也。天下の至動を言つて、亂す可からざる也。之を擬して後言ひ、之を議して後動き、擬議して以て其變化を成す。鳴鶴陰に在り、其子之に和す。我に好爵あり、吾爾と之に靡がる。子曰く、君子其室に居り、其言を出す、善なれば則ち千里の外之に應ず、況んや其邇き者をや。其室に居り、其言を出す、不善なれば則ち千里の外之に違ふ、況んや其邇き者をや。言身に出でて民に加はり、行、邇きに發して遠きに見はる。言行は君子の樞機にして、樞

可亂也。擬之而後言。議之而後動。擬議以成其變化。鳴鶴在陰。其子和之。我有好爵。吾與爾靡之。子曰。君子居其室。出其言善。則千里之外應之。況其邇者乎。居其室。出其言不善。則千里之外違之。況其邇者乎。言出乎身。加乎民。行發乎邇。見乎遠。言行。君子之樞

機の發は榮辱の主也。言行は君子の天地を動かす所以也。慎まざる可けんや。同人先に號咷して而して後に笑ふ。子曰く、君子の道は或は出で或は處り、或は黙し或は語る。二人心を同じうすれば、其利金を斷つ。同心の言は、其臭蘭の如し。初六藉くに白茅を用ふ、咎無し。子曰く、苟に諸を地に錯いて可なり。之を藉くに茅を用ふ、何の咎か之れ有らん、慎の至也。夫れ茅の物たる、薄くして用、重んず可き也。斯術を慎むや、以て往けば其れ失する所無し。勞謙す、君子は終あり、吉なり。子曰く、勞して伐らず、功ありて徳とせず、厚の至也。其功を以て人に下る者を語る也。徳に盛を言ひ、禮に恭を言ふ、謙とは恭を致して以て其位を存する者也。亢龍悔あり。子曰く、貴くして位なく、高くして民なく、賢人下位に在りて輔なし、是を以て動いて悔ある也。戸庭を出でず、咎無し。子曰く、亂の生ずる所や、則ち言語以て階と爲す。君密ならざれば則ち臣を失ひ、臣密ならざれば則ち身を失ひ、幾事密ならざれば則ち害成る。是を以て君子

機。樞機之發。榮辱之主也。言行。君子之所三以動天地也。可不慎乎。同人先號咷而後笑。子曰。君子之道。或出或處。或默或語。二人同心。其利斷金。臭如蘭。初六藉用白茅。无咎。子曰。苟錯諸地而可矣。藉之用茅。何咎之有。慎之至也。夫茅之爲物。薄而用

は慎密にして出でざる也。子曰く、易を作る者は、其れ盜を知る乎。易に曰く、負うて且つ乗り、寇の至るを致す。負ふとは小人の事也、乗るとは君子の器也。小人にして君子の器に乗る、盜之を奪はんことを思ふ。上慢にして下暴なれば、盜之を伐たんことを思ふ。慢藏は盜を誨へ、冶容は淫を誨ふ。易に曰く、負うて且つ乗り、寇の至るを致すとは、盜を之れ招く也。右第八章

● 奥深き道理をいふ ● 物體の現象に擬すること ● 事物の宜しき所にかたごること ● 或は集り或は通ること ● 人事の常をいふ ● 支錯の義を取らぬ ● 樂んで聽くべきをいふ ● 打ち崩すこと能はざるをいふ ● 比較して議定すること ● 背きて従はざる ● 樞は戸のくるるにして門を開閉するに緊要の處なり、誤は石弓のはぢきがねにして矢を發するに緊要の處也、故に物の緊要なるを指して樞機といふ ● 外に發動するをいふ ● 名譽と恥辱との二柄をつかさどる意 ● 地面に置いても差支なきをいふ ● 輕微の物に過ぎざるをいふ ● 實際の用途を指す ● 練の厚きをいふ ● 階梯なり手初めをいふ ● 慎密なるをいふ ● 無微の事 ● 他の妨害の出で來るをいふ ● 容易に口より出さざる ● 機密を招き致すの道々をいふ ● 物を負うて販賣するは商人なり、故に小人の事となす、小人とは無位の稱也 ● 馬車に乗るは貴人也故に君子の事となす、君子とは有位の稱也 ● 機密の態度を指す ● 憂慮の態度を指す ● 古語なるべし、物を貯ふるに油斷なるをいふ ● 古語なるべし、はてマかに化粧を作るを冶容といふ

可重也。慎斯術也。以往其无所失矣。勞謙君子有終吉。子曰。勞而不伐。有功而不德。厚之至也。語下以二其功。下入者也。德言盛。禮言恭。謙也者。致恭以存其位者也。亢龍有悔。子曰。貴而无位。高而无民。賢人在下位。而无輔。是以動而有悔也。不出戶庭。无咎。子曰。亂之所生也。則言詘。以爲階。君不密。則失臣。臣不密。則失身。幾事不密。則害成。是以君子慎密而不出也。子曰。作易者。其知盜乎。易曰。負且乘。致寇至。負也者。小人之事也。乘也者。君子之器也。小人而乘君子之器。盜思奪之矣。上慢下暴。盜思伐之矣。慢藏誨盜。冶容誨淫。易曰。負且乘。致寇至。盜之招也。

天一。地二。天三。地四。天五。地六。天七。地八。天九。地十。天數五位相得。而各有合。天地數二十有五。凡地數三十。凡天地之數五十。有成變化。而天一。地二。天三。地四。天五。地六。天七。地八。天九。地十。天數五位相得。而各有合。天地數二十有五。凡地數三十。凡天地之數五十。有成變化。而

天一。地二。天三。地四。天五。地六。天七。地八。天九。地十。天數五位相得。而各有合。天地數二十有五。凡地數三十。凡天地之數五十。有成變化。而

天一。地二。天三。地四。天五。地六。天七。地八。天九。地十。天數五位相得。而各有合。天地數二十有五。凡地數三十。凡天地之數五十。有成變化。而

行中鬼神也。大衍之數五十。其用四十有五。九分而爲二。以象兩。掛一以象三。揲之以象四。以象四時。歸奇於扚。以象閏。五歲再閏。故再扚而後掛。乾之策二百一十。有六。坤之策百四十。有四。凡三百有六十。當三期之日。二篇之策萬有一千五百。二十。當萬物之數也。是故

行中鬼神也。大衍之數五十。其用四十有五。九分而爲二。以象兩。掛一以象三。揲之以象四。以象四時。歸奇於扚。以象閏。五歲再閏。故再扚而後掛。乾之策二百一十。有六。坤之策百四十。有四。凡三百有六十。當三期之日。二篇之策萬有一千五百。二十。當萬物之數也。是故

行中鬼神也。大衍之數五十。其用四十有五。九分而爲二。以象兩。掛一以象三。揲之以象四。以象四時。歸奇於扚。以象閏。五歲再閏。故再扚而後掛。乾之策二百一十。有六。坤之策百四十。有四。凡三百有六十。當三期之日。二篇之策萬有一千五百。二十。當萬物之數也。是故

して萬物の數に當る也。是故に四營して易を成し、十有八變して卦を成し、八卦にて小成し、引いて之を伸べ、類に觸れて之を長ずれば、天下の能事畢る。道を顯にして德行を神にす。是故に與に酬酢すべく、與に神を祐く可し。子曰く、變化の道を知るものは、其れ神の爲す所を知る乎。右第九章

● 天一以下の數字は陽の奇數にして陰の偶數なることを河圖の上によりて示されたもの也。一より十までの中に一と三と、五と七と、九とは陽の奇數にして二と四と六と八と十は陰の偶數なり。● 即ち一、三、五、七、九の五つをいふ。● 即ち二、四、六、八、十の五つをいふ。● 天數と地數と相得るをいふ。● 一と六、二と七、三と八、四と九、五と十、各相合ふをいふ。● 五奇の和數也。● 五偶の和數也。● 天數の二十五と地數の三十と相加へたるもの也。● 一が變じて木を生じ、而して八が變じて之を成し、二が變じて火を生じて七が變じて之を成し、三が變じて土を生じ、而して四が變じて之を成し、四が變じて金を生じ、而して九が變じて之を成し、五が變じて水を生じ、而して十が變じて之を成す、其一、二、三、四、五は生數也、六、七、八、九、十は成數也、此の如く悉く生成の屈伸往來をなすが故に變化を成して鬼神を行ふといふ也。● 此の鬼神は天地造化の妙用を指す。● 陽數三と陰數二と合せて五となす小さく之を行して五を兩つにすれば十となる大きく之を行して五を十にすれば五十となる、之を大衍の數五十といふ也、是れ筮に用ふる所の筮(めど)の數也。● 五十のうち一を虚にして用ひず、之を大衍に象る故に其用ふる所は四十九となるなり。● 四十九筮の筮をとりて之を兩手に分つ之を天地の兩儀に象る也。● 右手の一筮をとりて左手の小指の間に掛り以て天地人の三才に象る也。● 之を揲ちて數ふるに二至

四營而成易。十有八卦而成。引而伸之。觸類而長之。天下之能事畢矣。顯道神德行。是故可與酬酢。可與祐神矣。子曰。知變化之道者。其知神之所為乎。

易有聖人之道四焉。以言者尚其辭。以動者尚其象。以制器者尚其象。以卜筮

グ、四回つゞけ、以て開斷なく計へあぐる也、是れ其の四時に象る所以也。其餘る所の著は指問の初に歸す是れ開月に象る也、委しく知らんには筮の書に依くを要す。統は六の爻にして毎爻三十六重なり、故に積數二百六十となる。坤は六陰爻にして毎爻二十四重なり、故に積數は百四十四となる。滿一年を期といふ即ち一年の日數を指す。上経下經の二篇を指す。六十四卦の中爻百九十二あり、其策の積數六千九百十二策にして陰爻亦同じく百九十二あり其策の積數四千六百。策也之を總計すれば一萬一千五百二十と爲る也。四九たび無窮して一變の易を成すをいふ。一爻を成すに四倍して一變の易を成すこと三次に及べり、故に六爻を得て卦を成すに三六十八變せざるを得ざる也。内卦の三爻先づ成る是れ八卦にして小成する也。之に外卦三爻を加へて遂に六十四卦を得る也、之を引いて伸ぶるとはいふ也。是より爻の辭又卦の辭を以て其事の類にふれて其の見る所を増進せしむるをいふ。天下に於いて能くする事盡く此中に在るをいふ也。至妙の道理を明にすること。天下の事に應答すること、筮會の時主杯のヤリとり即ち剛一靜するが如きをいふ。天地造化の妙用を補助するをいふ。

易に聖人の道四あり。以て言ふ者は其辭を尚び、以て動く者は其變を尚び、以て器を制するものは其象を尚び、以て卜筮する者は其占を尚ぶ。是を以て君子將に爲すこと有らんとするや、將に行ふこと有らんとするや、問うて以て言ふ、其命を受くるや響の如し。遠近幽深あることなく、遂に來物を知る。天下の至精

者尚其占。是以君子將有爲也。將有行也。問焉而以言。其受命也。如響。无有遠近幽深。遂知來物。非天下之至精。其孰能與於此。參伍以變。錯綜其數。通其變。遂成天地之文。極其數。遂定天下之象。非天下之至變。其孰能與於此。易无思也。无爲也。寂然不動。感而

に非ずんば、其れ孰か能く此に與からん。參伍以て變し、其數を錯綜し、其變に通じ、遂に天地の文を成し、其數を極め、遂に天下の象を定む。天下の至變に非ずんば、其れ孰か能く此に與らん。易は思ふこと无き也、爲すこと无き也。寂然とし、動かさず、感じて遂に天下の故に通ず。天下の至精に非ずんば、其れ孰か能く此に與らん。夫れ易は聖人の深を極めて幾を研く所以也。唯深なり、故に能く天下の志を通じ、唯幾なり、故に能く天下の務を成す。唯神なり、故に疾くせずして速に、行かすして至る。子曰く、易に聖人の道四ありとは、此の謂也。右第十章

下に示す所の辭と變と象と占と也。器物を製作すること。易占に用ふことをいふ。其感應あるをいふ。響の聲に應ずるが如きをいふ。方に來る事を知ることを得ると也。之を三に之を五にし多寡一ならずして之を求むるをいふ。彼此を互に之をしめく、ることなり。參伍の變に通ずれば卦爻見るべし、卦は文の大なるもの也、故に之を天地の文といふ。儀禮の數を極むれば爻を積みて卦を成し卦には各象あり、象は萬物を象ぬるもの也、故に天下の象といふ。其精心なるをいふ。其速なきをいふ。靜なるをいふ。事の未だ發せざる先をいふ。妙用の不測をいふ。

逢通天下之故。非天下之至神。其孰能與於此。夫易。聖人之所以極深而研幾也。唯深也。故能通天下之志。唯幾也。故能成天下之務。唯神也。故不疾而速。不行而至。子曰。易有三聖人之道。四焉者。此之謂也。

子曰。夫易。何爲者也。夫易。開物成務。冒天下之道。如斯而已者也。是故聖人以通天下之志。以定天下之業。以斷天下之疑。是以故著之德。圓而神。卦之德。方以知。六爻之義。易以賁。聖人以此洗心。退藏於密。吉凶與民同患。神

子曰く、夫れ易は何爲る者ぞや。夫れ易は物を開き務を成し、天下の道を冒ふ、斯の如きのみなる者也。是故に聖人、以て天下の志を通じ、以て天下の業を定め、以て天下の疑を断す。是故に善の徳は、圓にして神なり、卦の徳は、方にして以て知なり。六爻の義、易へて以て賁く。聖人此を以て心を洗ひ、密に退藏す。吉凶民と患を同じうす。神は以て來を知れり、知以て往を藏む、其れ孰か能く此に與からん哉。古の聰明、叡知、神武にして殺さざる者か。是を以て天の道を明にして、民の故を察し、是に神物を興して以て民用に前だつ。聖人此を以て齋戒して、以て其徳を神明にするか。是故に戸を闔づる之を坤と謂ひ、戸を闕く之を乾と謂ひ、一闔一闕之を變と謂ひ、往來窮まらず之を通と謂ひ、見はれたる乃ち之を象と謂ひ、形ある乃ち之を器と謂ひ、制して之を用ふる之を法と謂

以知來。知以藏往。其孰能與於此哉。古之聰明。叡知神武。而不殺者夫。是以明於天之道。而察於民之故。是與神物以前。民用。聖人以此齋戒。以神。明其徳。夫。是故闔戸。謂之。坤。闔戸。謂之。乾。一闔一闕。謂之。變。往來。不窮。謂之。通。見乃謂之。象。形乃謂之。器。制而用之。

ひ、利用出入。民咸く之を用ふる、之を神と謂ふ。是故に易に大極あり、是れ兩儀を生じ、兩儀四象を生じ、四象八卦を生じ、八卦吉凶を定め、吉凶大業を生ず。是故に法象は天地より大なるは莫く、變通は四時より大なるは莫く、象象著明は日月より大なるは莫く、崇高は富貴より大なるは莫く、物を備へ用を致し、〔法を〕立て器を成し、以て天下の利を爲すは、聖人より大なるは莫く、願を探り隠を索め、深を鉤し遠を致し、以て天下の吉凶を定め、天下の響聲を成す者は、著龜より大なるは莫し。是故に天神物を生じて聖人々に則る。天地變化して、聖人々に效ふ。天象を垂れ、吉凶を見して、聖人々に象る、河圖を出し、洛書を出して、聖人々に則る。易に四象あるは示す所以也。辭を繋ぐるは告ぐる所以也。之を定むるに吉凶を以てするは断する所以也。右第十一章

● 萬物の理を明にするをいふ ● 天下の事を處するをいふ ● 天下の道理一として漏る、所なきをいふ ● めどき也、六筮を作す所以也 ● まんまろく物にさはらぬこと ● 測るべからざること ● 定まりて標準あ

謂之法。利用出入。民咸用之。謂之神。是故易有六極。一曰生。二曰兩儀。三曰四象。四曰八卦。五曰吉凶。六曰凶生。大業。是故法象莫大乎天地。變通莫大乎四時。縣象著明。莫大乎日月。崇高莫大乎富貴。備物致用。立成器以為天下利。莫大乎聖人。探賾索隱。鈎深致遠。以定天下之吉凶。成天下之亹亹。者。莫大乎蓍龜。是故天生神物。聖人則之。天地變化。聖人效之。天垂象。見吉凶。聖人象之。河出圖。洛出書。聖人則之。易有四象。所以示也。繫辭焉。所以告也。定之以吉凶。所以斷也。

るをいふ ① 先見の明あるをいふ ② 六十四卦陰陽たがひに變じて吉凶を人に告げ知らせること ③ 前三者指す ④ 徳を明にすること ⑤ 人の見ざる所開かざる處に引き込むをいふ即ち蔽めて待つことありの意 ⑥ 吉凶を知ることをいふ ⑦ 過云の事を記憶すること ⑧ 武勇にして暴に流れざるをいふ ⑨ 事故なり ⑩ 心身を清め戒むることをいふ ⑪ 節の機を示す ⑫ 助の機を示す ⑬ 裁斷述作の義 ⑭ 之を利し之を用ひ之を出し之を人るゝこと ⑮ 日に用ひて自ら知らず故に神といふ ⑯ 一元の氣の由りて生ずる所をいふ、眞源中州曰く、大は移轉也、極は至極究盡の義天にあるを天、地といひ地にあるを地、極といひ人にあるを人、極といひ其三種を合せ之を尊稱して大極といふと ⑰ 陰と陽となり ⑱ 春夏秋冬なり ⑲ 乾坤巽艮歴次兌ニリ ⑳ 法るべく象るべきものをいふ ㉑ 變動し且つ通じ行はるゝものをいふ ㉒ 象を上に認くること ㉓ 物として備はらざることをなく、用として致さざることをなきをいふ ㉔ 立の字の下に缺文あるべしと本義にいへり、今熊綱氏に従ひて法の字を補ふ。即ち依るべきの法を立て用ふべきの器を成すをいふ ㉕ 向(かぎ)にかけて引き出すこと ㉖ 龜強して倦まざる形容 ㉗ めどとかめとをいふ、卜筮の用をなすもの也 ㉘ 蓍と卦とをいふ ㉙ 上古伏羲の時河水の上より産せし龍馬の毛に濡の如く一より十に至る數あり、之を河圖の文と云ふ。龍馬の制は是より始まる ㉚ 四馬の時洛水の上より出てし神龜の背に一より九に至る數あり、之を洛書の文と云ふ、世類九類は是によりて制せらる

易曰。自天祐之。吉无不利。子曰。祐者助也。天之所助者順也。人之所助者信也。履信思順。又以尚賢也。是以自天祐之。吉无不利也。子曰。書不盡言。言不盡意。然則聖人之意。其不可見乎。子曰。聖人立象以盡意。設卦以盡情偽。繫辭焉。以盡其言。變而通之。以盡

易に曰く、天より之を祐く。吉にして利しからざること無しと。子曰く、祐は助也、天の助くる所の者は順也。人の助くる所の者は信也。信を履み順を思ひ、又以て賢を尙ぶ也。是を以て天より之を祐け、吉にして利しからざること無しと。子曰く、書は言を盡さず、言は意を盡さずと。然らば則ち聖人の意は其れ見る可からざる乎。子曰く、聖人象を立てて以て意を盡し、卦を設けて以て情偽を盡し、辭を繫けて以て其言を盡し、變じて之を通じ以て利を盡し、之を鼓し之を舞し以て神を盡す。乾坤は其れ易の純邪。乾坤列を成して、易其中に立つ。乾坤毀るれば、則ち以て易を見ること無し。易見る可からずんば、則ち乾坤或は息むに幾からん。是故に形よりして上なる者之を道と謂ひ、形よりして下なる者之を器と謂ひ、化して之を裁する者之を變と謂ひ、推して之を行ふ者之を通と謂ひ、舉げて之を天下の民に措く之を事業と謂ふ。是故に夫れ象は聖人以て天下の蹟を見ること有りて、諸を其形容に擬し、其物宜に象る、是故に之を象と謂ふ。

利。鼓之舞之。以盡神之。乾坤其易之繩邪。乾坤成列。而易立乎其中。一矣。乾坤變。則無以見易。易不可見。則乾坤或幾乎息矣。是故形而上者。謂之道。形而下者。謂之器。化而裁之。謂之變。推而行之。謂之通。舉而措之。天下之民。謂之事業。是故夫象。聖有以見天下之賾。而擬諸其形容。象其物宜。是故謂之象。聖人有以見天下之動。而觀其會通。以行其典禮。繫辭焉以斷其吉凶。是故謂之爻。極天下之賾者。存乎卦。鼓天下之動者。存乎辭。化而裁之。存乎變。推而行之。存乎通。神而明之。存乎其人。默而成之。不言而信。存乎德行。

聖人以て天下の動を見るに有りて、其會通を觀て以て其典禮を行ひ、辭を繫けて以て其吉凶を斷ず、是故に之を爻と謂ふ。天下の賾を極むる者は卦に存し、天下の動を鼓する者は辭に存し、化して之を裁するは變に存し、推して之を行ふは通に存し、神にして之を明にするは其人に存し、默して之を成し、言はずして信するは、德行に存す。右第十二章

● 言に載する所は十分に其言を盡さざるをいふ ● 言の述ぶる所も亦十分に其意を盡さざるをいふ ● まこといつはりといふ ● 擬じて能く之を述ばれば用ひて拘はる所なし故に十分利を得べきをいふ ● 器也。乾也。乾坤の二卦以て他の六十二卦を包括するをいふ ● 無形の者を指す ● 有形の者を指す ● 變化して種種の用に遇するやうにこしらふること ● 天下に推し通して行ふやうにすること ● 人民に施して之を活用せしむること

繫辭下傳

八卦成列。象在其中矣。因而重之。爻在其中矣。剛柔相推。變在其中矣。繫辭焉而命之。動在其中矣。吉凶悔吝者。生乎動者也。剛柔者。立本者也。變通者。趨時者也。吉凶者。貞勝者也。天地之道。貞觀者也。日月之道。貞明者也。

八卦列を成して、象其中に在り、因て之を重ねて、爻其中に在り。剛柔相推して、變其中に在り、辭を繫けて之を命ず、動其中に在り。吉凶悔吝は動より生ずる者也。剛柔は本を立つる者也。變通は時に趣く者也。吉凶は貞にして勝つ者也。天地の道は貞にして觀す者也。日月の道は貞にして明なる者也。天下の動は貞にして夫れ一なる者也。夫れ乾は確然として人に易を示し、夫れ坤は隤然として人に簡を示す。爻とは此に効ふ者也。象とは此に像る者也。爻象は内に動きて、吉凶は外に見はれ、功業は變に見はれ、聖人の情は辭に見はる。天地の大徳を生と曰ひ、聖人の大實を位と曰ふ。何を以て位を守る、曰く人なり。何を以て人を聚むる、曰く財なり。財を理め辭を正しくし、民の非を爲すを禁ずるを義と曰ふ。右第一章

天下之動。貞夫一者也。夫乾。確然示人易矣。夫坤。頤然示人簡矣。爻也者。效此者也。象也者。像此者也。交象動乎內。吉凶見乎外。功業見乎變。聖人之情見乎辭。天地之大德曰生。聖人之大寶曰位。何以守位。曰人。何以聚人。曰財。理財正辭。禁民爲非曰義。

● 天地山澤等の類を謂ふ ● 八卦は八卦を重ねて六十四卦となすこと ● 陰陽の交各百九十二あり ● 陽剛と陰柔と互に相ひ往來するをいふ ● 屯蒙泰否等の名をつくること ● 一定不易なれば也 ● 推して之を行へば也 ● 人にしめすこと ● 一貫する義 ● 剛健の状しつかりしたる様をいふ ● 平易の理を指す ● 柔順の状となしき様をいふ ● 簡要の理を指す ● 乾坤の徳を指す ● 卦に見はるゝを云ふ ● 事に見はるゝを云ふ ● 萬物を生長するを以て也 ● 仁を萬民に施すには位を得ざれば能はず故に大寶といふ也 ● 財貨を人に與ふるをいふ ● 能く經濟の道を立つること ● 能く教訓の義を立つること也

古者包犧氏之王天下也。仰則觀象於天。俯則觀法於地。觀鳥獸之文。與地之宜。近取諸身。遠取諸物。於

古者包犧氏の天下に王たるや、仰いでば則ち象を天に觀、俯しては則ち法を地に觀、鳥獸の文と地の宜とを觀、近く諸を身に取、遠く諸を物に取、是に於て始めて八卦を作り、以て神明の徳に通じ、以て萬物の情を類す。結繩を作りて網罟を爲し、以て佃し以て漁す。蓋し諸を離に取る。包犧氏没して、神農氏作る。木を斲つて耜と爲し、木を揉めて耒と爲し、耒もて耨ぎるの利、以て天下に

是始作八卦。以通神明之德。以類萬物之情。作結繩而爲網罟。以佃以漁。蓋取諸離。包犧氏没。神農氏作。斲木爲耜。揉木爲耒。耒耨之利。以教天下。蓋取諸益。日中爲市。致天下之民。聚天下之貨。交易而退。各得其所。蓋取諸噬嗑。神農氏没。黃帝堯舜氏作。道其變。

教ふ。蓋し諸を益に取る。日中に市を爲し、天下の民を致し、天下の貨を聚め、交易して退き、各々其所を得。蓋し諸を噬嗑に取る。神農氏没して、黃帝堯舜氏作る。其變に通じ、民をして倦まざらしめ、神にして之を化し、民をして之を宜しうせしむ。易窮まれば則ち變じ、變すれば則ち通じ、通すれば則ち久し。是を以て天より之を祐げ、吉にして利しからざること無し。黃帝堯舜、衣裳を垂れて天下治まる。蓋し諸を乾坤に取る。木を刻りて舟と爲し、木を刻りて楫と爲し、舟楫の利、以て通ぜざるを濟し、遠きを致して以て天下を利す。蓋し諸を渙に取る。牛を服し馬に乗り、重きを引き遠きを致し、以て天下を利す。蓋し諸を隨に取る。重門擊柝、以て暴客を待つ、蓋し諸を豫に取る。木を斲つて柝と爲し、地を掘つて臼と爲し、臼杵の利、萬民以て濟ふ。蓋し諸を小過に取る。木に弦して弧と爲し、木を刻りて矢と爲す、弧矢の利、以て天下を威す。蓋し諸を睽に取る。上古は穴居して野處せり。後世の聖人之に易ふるに宮室を以てし、棟

使民不_レ倦。神而化_レ之。使民宜_レ之。易窮則變。變則通。通則久。是以自天祐_レ之。吉无不利。黃帝堯舜垂_レ衣裳。而天下治。蓋取_レ諸乾坤。剝_レ木爲_レ舟。剝_レ木爲_レ楫。舟楫之利。以濟_レ不_レ通。致遠_レ以利_レ天下。蓋取_レ諸渙。服牛乘_レ馬。引_レ重致_レ遠。以利_レ天下。蓋取_レ諸隨。重門擊_レ柝。以待_レ暴客。蓋取_レ二

を上にし_レ字を下にして以て風雨を待つ。蓋し諸を大壯に取る。古の葬る者は厚く之に衣するに薪を以てし之を中野に葬る。封せず樹せず。喪期數無し。後世の聖人、之に易ふるに棺槨を以てす。蓋し諸を大過に取る。上古は繩を結んで治まる。後世の聖人之に易ふるに書契を以てし、百官以て治まり、萬民以て察なり。蓋し諸を夬に取る。右第二章

- 三皇の一なる伏羲の事也
- 衣裳を天の日月風雷等に觀るをいふ
- 法則を地の山澤等に觀るをいふ
- 一身に屬するものをいふ
- 萬物すべてをいふ
- 合體一致すること
- 比較別すること
- 繩を結び合することをいふ
- 獸を捕るを網といふ
- 魚を捕るを罟といふ
- 共にあかす也
- 田獵の事
- 離の卦の兩目附いて一物につくの義に取る
- 三皇の一也
- 鐘の事
- 鐵の事
- 益の卦の二體皆木にして且つ上を損し下を益するの義に取る
- 喉嚨の卦の物と物と合して通ずるの義に取る
- 物久しければ弊あり故に之を變通して之を利化して權まがして之を利せしむるをいふ
- 上古人は唯皮をさるのみ黃帝堯舜にいたりて衣裳始めて備る故にいふ
- 天地位して萬物安し、上衣下裳は其義に取る也
- 渙の卦の木、水上にあるの義に取る
- 牛は大車を製すること
- 隨の卦の下動いて上悅ぶの義に取る
- 鼎鑪して門を嚴重に設くること
- 柝子木を打ちて夜を警むること
- 豫の卦の豫阿の意あるに取る
- 小過の卦の上動き下止まるの象に取る
- 弓の事
- 夬の卦の弓を以て物を射破るの義にとる
- 家屋をいふ

諸豫。斷_レ木爲_レ杵。掘_レ地爲_レ臼。臼杵之利。萬民以_レ濟。蓋取_レ諸小過。弦_レ木爲_レ弧。剝_レ木爲_レ矢。弧矢之利。以威_レ天下。蓋取_レ諸睽。睽_レ上古穴居而野處。後世聖人易_レ之以_レ宮室。上棟下宇。以待_レ風雨。蓋取_レ諸大壯。古之葬者。厚衣_レ之以_レ薪。葬_レ之中野。不_レ封_レ不_レ樹。喪期_レ无_レ數。後世聖人易_レ之以_レ棺槨。蓋取_レ諸大過。上古結_レ繩而治。後世聖人易_レ之以_レ書契。百官以_レ治。萬民以_レ察。蓋取_レ諸夬。

はなごの事 ① のさの事 ② 大壯の卦の棟下人ありの義に取る ③ 土を積んで墳となすをいふ ④ 櫛をうえて其處を示すをいふ ⑤ 喪期に一定の年數なきこと ⑥ 人の死體を藏するもの即ちひつぎ也、内を棺といひ外を槨といふ ⑦ 大過の卦の地を掘り木を入る、義に取る ⑧ 上古文字なし繩を結びて事を論ずをいふ ⑨ 文字と制符とをいふ ⑩ 夬の卦の竹木の版片に製畫するの義に取る

是故に易は象也。象とは像也。象は材也。爻とは天下の動に效ふ者也。是故に吉凶生じて悔吝著るゝ也。右第三章

是故易者、象也。象也者、材也。也。象者、材也。爻也者、效_レ天下之動_レ者也。是故吉凶生_レ而悔吝著_レ也。

陽卦は陰多く、陰の卦は陽多し、其故何ぞや。陽卦は奇にして、陰卦は耦なり、其德行は何ぞや。陽は一君にして二民なり、君子の道也。陰は二君にして一民なり。

陽卦多_レ陰。陰卦多_レ陽。其故何也。陽卦奇。

陰卦耦其德
行何也。陽一
君而二民。君
子之道也。陰
二君而一民。
小人之道也。

易曰。憧憧往
來。朋從爾思。
子曰。天下何
思何慮。天下
同歸而殊塗。
一致而百慮。
天下何思何
慮。日往則月
來。月往則日
來。日月相推
而明生焉。寒
往則暑來。暑
往則寒來。寒
往則寒來。寒

り、小人の道也。右第四章

● 二陽一陰を陽の卦といふ。剛坎艮の如し。 ● 二陰一陽を陰の卦といふ。巽離兌の如し。 ● 陽は君の象なり、陽
卦一陽を以て二陰を従ふ故に君子の道と爲す。 ● 陰は臣の卦なり。陰卦は一陰を以て二陽に事ふ故に小人の道と
爲す。

易に曰く、憧憧として往來すれば、朋、爾の思に従ふ。子曰く、天下何を思ひ
何を慮らん。天下歸を同じうして塗を殊にす。一致にして百慮なり、天下何を
思ひ何を慮らん。日往けば則ち月來り、月往けば則ち日來り、日月相推して明
生ず。寒往けば則ち暑來り、暑往けば則ち寒來り、寒暑相推して歳成る。往くと
は屈する也、來るとは信ぶる也、屈信相感じて利生ず。尺蠖の屈するは、以
て信ぶるを求むる也。龍、蛇の蟄するは、以て身を存する也、精義神に入るは、
以て用を致す也。用を利し身を安んずるは、以て徳を崇うする也。此を過ぐる以
往、未だ之を知ることをあらざる也。神を窮め化を知るは、徳の盛なる也。易に曰

暑相推。而歳
成焉。往者風
也。來者信也。
屈信相感。而
利生焉。尺蠖
之屈。以求信
也。龍蛇之蟄。
以存身也。精
義入神。以致
用也。利用安
身。以崇徳也。
過此以往。未
之或知也。窮
神知化。徳之
盛也。易曰。困
于石。據于蒺
藜。入于其宮。
不見其妻。凶。
子曰。非所困
而困焉。名必

く、石に困み、蒺藜に據る。其宮に入りて、其妻を見ず。凶なりと。子曰く、
困む所に非ずして困めば、名必ず辱かしめられ、據る所に非ずして據れば身必
ず危し。既に辱められ且つ危ければ、死期將に至らんとす、妻其れ見るを得
べけん邪。易に曰く、公用つて隼を高墉の上に射る、之を獲し利しからざるこ
と無し。子曰く、隼は禽也。弓矢は器也、之を射る者は人也。君子は器を身に
藏め、時を待つて動く、何の不利か之れ有らん。動いて括れず。是を以て出でて
獲ることあり、器を成して動く者を語る也。子曰く、小人は不仁を恥ぢず、不義
を畏れず、利を見ざれば勸まず、威ならざれば懲りず。小しく懲りて大に誠む、
此れ小人の福也。易に曰く、校を履いて趾を滅る、咎無しとは、此の謂也。善積
まざれば、以て名を成すに足らず、惡積まざれば、以て身を滅すに足らず。小
人は小善を以て益無しと爲して爲さざる也。小惡を以て傷無しと爲して去てざる
也。故に惡積んで掩ふ可からず、罪大にして解く可からず。易に曰く、校を何う

辱。非所據而據焉。身必危。既辱且危。死期將至。妻其可得見邪。易曰。公用射隼于高墉之上。獲之无不利。子曰。隼者禽也。弓矢者器也。射之者人也。君子藏器於身。待時而動。何不利之有。動而不括。是以出而有獲。語成器而動者也。子曰。小人不知不仁。不畏不義。

て耳を滅る、凶なりと。子曰く、危は其位に安んずる者也、亡は其存を保つ者也、亂は其治を有つ者也。是故に君子は安うして危きを忘れず、存して亡ぶるを忘れず、治にして亂を忘れず。是を以て身安くして國家保つ可き也と。易に曰く、其れ亡せん其れ亡せん、包桑に繫ると。子曰く、徳薄うして位尊く、知小にして謀大に、力小にして任重く、及ばざること鮮しと。易に曰く、鼎、足を折り、公の餼を覆す。其形渥たり。凶なりと。其任に勝へざるを言ふ也。子曰く、幾を知るは其れ神乎。君子は上交して諂はず、下交して瀆れず、其れ幾を知る乎。幾は動の微にして、吉の先づ見はるゝ者也。君子は幾を見て作つ、日を終ふるを俟たずと。易に曰く、石より介し。日を終へず。貞にして吉なりと。介、石の如し。寧んぞ日を終ふるを用ひん。斷じて識るべし。君子は微を知りて彰を知り、柔を知りて剛を知る。萬夫の望なり。子曰く、顔氏の子、其れ殆んど庶幾い乎。不善あれば、未だ嘗て知らずんばあらず、之を知れば未だ嘗て復た

不見利不勸。不威不懲。小懲而大誡。此小人之福也。易曰。履校滅趾。无咎。此之謂也。善不積。不足以成名。惡不積。不足以滅身。小人以二小善爲无益。而弗爲也。以二小惡爲无傷。而弗去也。故惡積而不可掩。罪大而不可解。易曰。何校滅耳。凶。子曰。危者安其位者也。亡

行はざる也と。易に曰く、遠からずして復る。悔に祇ること無し。元吉なりと。天地綱維として、萬物化醇し、男女精を構せて、萬物化生す。易に曰く、三人行けば則ち一人を損し、一人行けば則ち其友を得と。致一なるを言ふ也。子曰く、君子は其身を安うして而して後に動き、其心を易うして而して後に語り、其交を定めて而して後に求む。君子は此の三者を修む、故に至き也。危くして以て動けば則ち民與せざる也。懼れて以て語れば則ち民應せざる也。交无うして求むれば則ち民與せざる也。之と與にすること莫ければ則ち之を傷る者至ると。易に曰く、之を益すこと莫し、或は之を撃つ。心を立つこと慎勿し。凶なりと。

右第五章

- 天下の事其赴く路は殊なれども歸着する所は皆同じきをいふ
- 人々の善も千差万別なれども其至極の處は皆同一なりといふ意
- 尺とり量也
- 龜甲にひそみ居ること
- 深く道理を窮めて其奥に入るをいふ
- 是より以上といふ程の意
- 死亡の時をいふ
- 拘束せられざるをいふ
- 災禍の及ばざるもの至つて少きをいふ
- 萬夫の望を負ふ人たるに比しの意
- 潤滑の事也
- 交り感ずる義
- 醇化と同じ語は教化といふが如し、十分に善く化するをいふ
- 相逆すること
- 其至極する所は同じといふ意

者保其存者也。亂者有其治者也。是故君子安而不忘危。存而不忘亡。治而不忘亂。是以身安而國家可保也。易曰。其亡其亡。繫于苞桑。子曰。德薄而位尊。知小而謀大。力小而任重。鮮不及矣。易曰。鼎折足。覆公餗。其形渥。凶。言不勝其任也。子曰。知幾其神乎。君子上交不諂。下交不瀆。其知幾乎。幾者動之微。吉之先見者也。君子見幾而作。不俟移日。易曰。介石不終日。貞吉。介如石焉。寧用終日。斷可識矣。君子知微知彰。知柔知剛。萬夫之望。子曰。顏氏之子。其殆庶幾乎。有不善。未嘗不知。知之。未嘗復行也。易曰。不遠復。无祗悔。元吉。天地絪縕。萬物化醇。男女媾精。萬物化生。易曰。三人行。則損一人。一人行。則得其友。言致一也。子曰。君子安其身而後動。易其心而後語。定其交而後求。君子修此三者。故全也。危以動。則民不與也。懼以語。則民不應也。无交而求。則民不與也。莫之與。則傷之者至矣。易曰。莫益之。或擊之。立心勿恆。凶。

子曰。乾坤其易之門邪。乾陽物也。坤陰物也。陰陽合德。而剛柔有體。以體天地之撰。以通神明之德。其稱

子曰。乾坤是其れ易の門なる邪。乾は陽物也。坤は陰物也。陰陽德を合せて、剛柔體あり、以て天地の撰を體し、以て神明の徳に通ず。其の名を稱するや、雜にして越えず、於に其類を稽ふるに、其れ衰世の意なる邪。夫れ易は往を彰にして來を察す。而して顯を微にし、幽を開き、開きて名に當て、物を辨じて言を正しくし、辭を斷すること、則ち備る。其の名を稱するや小は、其の類を取るや

名也。雜而不越。於稽其類。其衰世之意邪。夫易彰往而察來。而微顯闡幽。開而當名。辨物正言。斷辭則備矣。其稱名也小。其取類也大。其旨遠。其辭文。其言曲而中。其事肆而隱。因貳以濟。民行。以明得失之報。

大に、其旨は遠く、其辭は文に、其言は曲にして中り、其事は肆にして隱る。貳に因つて以て民行を濟ひ、以て得失の報を明にす。右第六章

① 六十二卦皆乾坤の二卦の變よりして生ず、故に易の門といふ ② 天地間に具はり盡まる所のものを身に體するをいふ、體とはひとしと身につくる也 ③ 之を鬼神に質(たゞ)して疑はざるをいふ ④ 象を取るをいふ ⑤ 亂雜の如くして義例をこえざる也 ⑥ 品類なり ⑦ 有道の世の言を危うし行を危うするの事にあらざるをいふ ⑧ 顯は人の知る所也、之をかくしていはざるをいふ ⑨ 幽は人の見ざる所也、之を開きて明にするをいふ ⑩ 言を開き示して各其名に當らしむること ⑪ 物をわきまへ別ちて各其言を正しくすること ⑫ 象象の辭、吉凶以て斷すべきをいふ ⑬ 卦爻の象を取るときは唯だ是れ一事のみ故に小といふ ⑭ 類を推して之を通ずるときは、事皆網羅す故に大と謂ふ ⑮ 幽玄深遠なるをいふ ⑯ 條理の顯るべきものあるをいふ ⑰ 委曲にして理に中るをいふ ⑱ 廣大にして而もはてやかならざるをいふ ⑲ 人民の疑ふ所によりて説き示すこと ⑳ 吉凶の應報の事を明に教ふること

易の興るや、其れ中古に於てする乎。易を作る者は、其れ憂患ある乎。是故に、履は徳の基也、謙は徳の柄也、復は徳の本也、恆は徳の固也、損は徳の修也、益

患乎。是故履。德之基也。謙。德之柄也。復。德之本也。恆。德之固也。損。德之修也。益。德之裕也。困。德之辨也。井。德之地也。巽。德之制也。履。和而至。謙。尊而光。復。小而辨於物。恆。雜而不厭。損。先難而後易。益。長裕而不設。困。窮而通。井。居其所而遷。巽。稱而隱。履。以和行。謙。以

は徳の裕也。困は徳の辨也、井は徳の地也、巽は徳の制也。履は和して至り、謙は尊くして光り、復は小にして物を辨じ、恆は雜にして厭はず、損は先に難くして而して後に易く、益は長裕にして設けず、困は窮して通じ、井は其所に居て遷り、巽は稱つて隠る。履は以て行を和し、謙は以て禮を制し、復は以て自ら知り、恆は以て徳を一にし、損は以て害に遠かり、益は以て利を興し、困は以て怨寡く、井は以て義を辨じ、巽は以て權を行ふ。右第七章

● 禮儀は徳行の土壌たるをいふ ● 謙遜は善行の柄たるをいふ ● 過を改むるは善行の本なるをいふ ● 操を守るは善行の堅固たる所以なるをいふ ● 惡を過むるは善行を修むる所以なるをいふ ● 進んで善を爲すは徳行に餘裕ありしむる所以なるをいふ ● 困難は善徳の行ふべきをわきまふる所以なるをいふ ● 身の處る所を安んずるは善行のかはらざる所以なるをいふ ● 道に順ふは善を行ふの法則たるをいふ ● 煩雜なれども少しも厭氣をさへざることをいふ ● いつまでもゆつたりとして區ざりつけざることをいふ ● 其所に居て移らざれども其利溥は他に及ぶものあるをいふ ● 時の不可をかりて不可なれば隠るゝをいふ ● はかりの分別也、之を助かして物の輕重をはかる也故に物事を見はからふことを權といふ

制禮。復以自知。恆以一徳。損以遠害。益以興利。困以寡怨。井以辨義。巽以行權。

易之爲書也。不可遠。爲道也。屢遷。變動不居。周流六虛。上下无常。剛柔相易。不可爲典要。唯變所適。其出入以度。外內使知懼。又明於憂患與故。无有師保。如臨父母。初率其辭。而揆其方。既有典常。苟非其人。道不虛行。易之爲書也。

易の書たるや遠く可からず。道たるや屢々遷る。變動して居らず、六虚を周流す。上下常无く、剛柔相易はる。典要と爲すべからず、唯變の適く所のみ。其出入度を以てして、外内懼を知らしむ。又憂患と故とを明にし、師保あること无けれども、父母に臨まるゝが如し。初めは其辭に率つて其方を揆る。既に典常あり、苟も其人に非ざれば、道虚しく行はれず。右第八章

● 平時之を心にとめて片時も之を離れて忘るべからざるをいふ ● 變化してやまざるをいふ ● 其所に止まらざることをいふ ● 六爻の位をめぐるをいふ ● 上より下り、下より上り一定せざることをいふ ● 陽剛と陰柔と交互に變易すること ● 常法又は定準といふが如し ● 變化次第なるをいふ ● 内卦より外卦に往くを出といひ外卦より内卦に來るを入といふ ● 内外の別あれども要するに共に人をして戒懼す所を知らしむるをいふ ● 戒故なり ● 道を以て人に教ふる者の稱也、内にあるを保といひ外にあるを師といふ ● 綱めども敢へてほしむま、にせざるをいふ ● 易の本文通りにすること ● 實行すべき方法を考ふることをいふ ● 既に一定の法則を心得たるをいふ ● 易道に違せざる人を指す ● 虚文を以ては行はれざるをいふ ● 既に一

易の書爲るや、始めを原ね終りを要め、以て質と爲す也。六爻相雜るは、唯其

原始要終。以爲質也。六爻相雜。唯其時物也。其初難知。其上易知。本末也。初辭本末也。初辭之卒成。物之終。若夫雜物撰德。辯是非。則非其中。交不備。噫亦要存亡吉凶。則居可知矣。知者觀其象辭。則思過半矣。二與四同功而異位。其善不同。二多譽。四多懼。近也。柔之爲道。

時物なり。其初は知り難く、其上は知り易し。本末なれば也。初は辭之に擬し、卒は之を成して終る。若し夫れ物を雜へ徳を撰び、是と非とを辯ずるは、則ち其中交に非ざれば備はらず。噫亦存亡吉凶を要すれば、則ち居りて知る可し。知者は其象辭を觀ば、則ち思半に過ぎん。二と四と、功を同じうして位を異にす。其善同じからず。二は譽多く、四は懼多し。近ければ也。柔の道たる、遠ざかるに利しからざる者も、其要咎無し。其の柔中を用ふればなり、二と五と功を同じうして位を異にす。三は凶多く、五は功多し。貴賤の等也。其柔危く、其剛勝ふる邪。右第九章

- 初爻を推し究むること
- 上爻を探り求むること
- 體なり本なり即ち易の大體大本たるをいふ
- 剛柔吉凶の相錯雜するをいふ
- 遇ふ所の時と物と同じからざるが爲めなるをいふ
- 初爻は始なれば擬にして知り難しと也
- 上爻は終なれば顯にして知り易しと也
- 始終といふが如し
- それとこれとあて比べて未だ決定せざるをいふ
- 上爻をいふ、事既に成就し了りたる後なれば之を知り易しと也
- 種々の物をごつちまにして其中より善きものをえらび出すこと
- かくして是と非とを差別すること
- 六爻の中より初と上とをとりたるものと四爻をいふ
- 探り求むること
- 坐りてあながら分明に知り得べきをいふ

不利遠者。其要无咎。其用二柔中也。三與五同功而異位。三多凶。五多功。貴賤之等也。其柔危。其剛勝邪。易之爲書也。廣大悉備。有天道焉。有地道焉。兼三才而兩之。故六。六者非他也。三才之道也。道有變動。故曰爻。爻有等。故曰物。物相雜。故曰文。文不當。故吉凶生焉。

易の書たるや、廣大悉く備はる。天道あり、人道あり、地道あり。三才を兼ねて之を兩にす、故に六なり。六とは他に非ざる也。三才の道也。道に變動あり、故に爻と曰ふ。爻に等あり、故に物と曰ふ。物相雜はる、故に文と曰ふ。文當らず、故に吉凶生ず。右第十章

- 天の作用をいふ
- 三つの作用あるもの即ち天と人と地と是也
- 上卦と下卦と合するをいふ
- 爻の字の本義は物の交文するをいふ
- 等級のこと
- 文章なり物物の交錯するは色采の分明なるが如きを以てしかいふ
- 陰陽位を得ること

者其辭枝。吉人之辭寡，躁人之辭多。誣善之人，其辭游。失其守者，其辭屈。

文言傳

元者善之長也。亨者嘉之會也。利者義之和也。貞者事之幹也。君子體仁足以長人。嘉會足以合禮。利物足以和義。貞固足以幹事。君子行此四德者。故曰乾元亨利貞。初九曰潛龍勿用。何謂也。子曰龍德而隱者也。不易乎

元は善の長也、亨は嘉の會也、利は義の和也、貞は事の幹也。君子は仁を體して、以て人に長たるに足り、會を嘉して、以て禮に合ふに足り、物を利して、以て義を和するに足り、貞固にして、以て事を幹するに足る、君子は此の四徳を行ふ者なり、故に曰く、乾は元亨利貞と。初九に曰く、潛龍用ふること勿れとは、何の謂ぞや。子曰く、龍徳ありて隠るゝ者也。世に易へず、名を成さず、世を避れて悶ゆること無く、是とせられずして悶ゆることなく、樂めば則ち之を行ひ、憂ふれば則ち之を違る、確乎として其れ抜く可からざるは潛龍也。九二に曰く、見龍田に在り、大人を見るに利しとは、何の謂ぞや。子曰く、龍徳ありて正中なる者也。庸言を之れ信にし、庸行を之れ謹み、邪を閑きて其誠を存し、世に善くして伐らず、徳博くして化す。易に曰く、見龍田に在り、大人を見るに利し

世不成乎名一
 遜世而无悶不
 見是而无悶不
 樂則行之憂
 則違之確乎
 其不可拔潛
 龍也九二曰
 見龍在田利
 見大人何謂
 也子曰龍德
 而正中者也
 庸言之信庸
 行之謹閑邪
 存其誠善世
 而不伐德博
 而化易曰見
 龍在田利見
 大人君德也
 九三曰君子
 終日乾乾夕

と、君德也。九三に曰く、君子終日乾乾たり。夕まで惕若たれば厲けれども
 咎なしとは、何の謂ぞや。子曰く、君子は徳に進み業を修む。忠信は徳に進む所
 以也、辭を修めて其誠を立つるは、業に居る所以也。至るを知つて之に至る、
 與に幾す可き也。終るを知つて之を終る、與に義を存す可き也。是故に上位に居
 りて驕らず、下位に在りて憂へず、故に乾乾たり。其時に因つて惕る、危しと雖
 も咎なき也。九四に曰く、或は躍つて淵に在り、咎なしとは、何の謂ぞや。子
 曰く、上下常なきは邪を爲すに非ざる也。進退愼なきは羣を離るゝに非ざる也。
 君子徳に進み業を修む、時に及ばんことを欲して也。故に咎なしと。九五に曰
 く、飛龍天に在り、大人を見るに利しとは、何の謂ぞや。子曰く、同聲は相應
 じ、同氣は相求む。水は濕に流れ、火は燥に就く。雲は龍に従ひ、風は虎に従
 ふ。聖人作つて萬物觀る。天に本づく者は上を親み、地に本づく者は下を親む。
 則ち各々其類に従ふ也。上九に曰く、亢龍悔ありとは、何の謂ぞや。子曰く、

惕若厲无咎
 何謂也子曰
 君子進徳修
 業忠信所以
 進徳也修辭
 立其誠所以
 居業也知至
 至之可與幾
 也知終終之
 可與存義也
 是故居上位
 而不驕在下
 位而不憂故
 乾乾因其時
 而惕雖危无
 咎矣九四曰
 或躍在淵无
 咎何謂也子
 曰上下无常
 非爲邪也進

貴うして位なく、高うして民なく、賢人下位に在りて輔なし、是を以て動いて
 悔ある也。潛龍用ふること勿れとは、下なれば也。見龍田に在りとは、時舍つ
 る也。終日乾乾たりとは、事を行ふ也。或は躍りて淵に在りとは、自ら試むる
 也。飛龍天に在りとは、上治むる也。亢龍悔ありとは、窮の災也。乾元の
 用九とは、天下治まる也。潛龍用ふると勿れとは、陽氣潛藏すればなり。見龍
 田に在りとは、天下文明なるなり。終日乾乾たりとは、時と偕に行ふなり。或
 は躍つて淵に在りとは、乾道乃ち革まるなり。飛龍天に在りとは、乃ち天徳に
 位するなり。亢龍悔ありとは、時と偕に極まる也。乾元の用九は、乃ち天則を見
 るなり。乾元とは、始めて而して亨る者也。利貞とは性情也。乾始能く美利を以
 て天下を利す。利する所を言はず。大なる哉、大なる哉、乾乎。剛健中正にして、
 純粹精也。六爻發揮して、旁く情を通ずる也。時に六龍に乗りて以て天を御
 する也。雲行き雨施して天下平なる也。君子成徳を以て行を爲す、日に之を行

退无恆。非離羣也。君子進德修業。欲及於時也。故无咎。九五曰。飛龍在天。利見大人。何謂也。子曰。同聲相應。同氣相求。水流濕。火就燥。雲從龍。風從虎。聖人作而萬物覩之。本乎天者親上。本乎地者親下。則各從其類也。上九曰。亢龍有悔。何謂也。子曰。貴而无位。高而无

に見る可き也。潛の言たるや、隠れて未だ見はれず、行うて未だ成らざるなり。是を以て君子は用ひざる也。君子は學以て之を聚め、問以て之を辯じ、寬以て之に居り、仁以て之を行ふ。易に曰く、見龍田に在り、大人を見るに利しと、君徳也。九三は重剛にして中ならず。上天に在らず、下田に在らず、故に乾乾たり。其時に因つて傷る、危しと雖も咎なきなり。九四は重剛にして中ならず。上天に在らず、下田に在らず、中、人に在らず、故に之に或す。之に或する者は之を疑ふ也。故に咎なし。夫れ大人は天地と其徳を合せ、日月と其明を合せ、四時と其序を合せ、鬼神と其吉凶を合せ、天に先だちて天違はず、天に後れて天時を奉ず。天且つ違はず、而るを況んや人に於てをや。況んや鬼神に於てをや。亢の言たるや、進むことを知つて退くことを知らず、存することを知つて亡ぶることを知らず、得ることを知つて喪ふことを知らず。其れ唯だ聖人乎、進退存亡を知りて、而も其正を失はざる者は、其れ唯だ聖人乎。以上乾卦

民賢人在下位而无輔。是以動而有悔也。潛龍勿用。下也。見龍在田。時舍也。終日乾乾。行事也。或躍在淵。自試也。飛龍在天。上治也。亢龍有悔。窮之災也。乾元用九。天下治也。治龍勿用。陽氣潛藏。見龍在田。天下文明。終日乾乾。與時偕行。或躍在淵。乾道乃革。飛龍在天。乃位乎天徳。亢龍有悔。與時偕極。乾元用九。乃見天則。乾元者始而亨

- 美善を統ぶる義
- 善美嘉樂、萬物會通する義
- 剛に失せず柔に流れず、靈明其宜を得る義
- 正常貞固能く萬事の負擔に勝ふる義
- 俗に變化を受けざるをいふ
- 世に名譽を求めざるをいふ
- 操守堅固にして移し奪ふこと能はざるをいふ
- 常言なり
- 常行なり
- 外より來る邪惡の誘惑を防ぎ止めて中に藏する誠心を保つこと
- 世に對し人に對して善美善徳を爲すこと
- 言に其實あるをいふ
- 腰をすま業を爲すこと
- 其到達すべき所を知りて之に到達すること
- 機微を悟ることを得べしと也
- 其結者すべき所を知りて之を結者すること
- 義を守りて失はざるをいふ
- 時を失はざるをいふ
- 其と氣とは形なきもの也されど其の類を同じうすれば必ず相感するをいふ以下説く所乃ち然り
- 萬民ことごとく其徳を瞻仰すること、或は觀をあらはると訓じ、人物の出現の義と爲す亦通ず
- 人及其他の動物を意味す
- 植物を意味す
- 時機未だ之を用ひざるをいふ
- 行きつまりて災禍を受くるをいふ
- ひそみかくれて未だ顯はれざることを
- 終日勤めざる時なきをいふ
- 陽剛の徳なり、聖人に於て九五の尊に居る故に天徳に位すといふ
- 剛にして能く柔なるは天の道なり天道は即ち天則也
- 乾の本心なるをいふ、性は心の體にして情は心の用なり
- 體よりいへば剛なり性よりいへば健なり徳よりいへば中なり正なり
- 陰柔に雖はらざるを純といひ、邪惡に雖はらざるを粹といひ、純粹の顯處を精といふ
- 布列なり、しきならざるをいふ
- 潛見飛龍各々時に因るをいふ
- 天下を治むるをいふ
- 徳徳の普及すること
- 徳器を成就すること
- 之を己に積むこと
- 之を人に資すること
- 天の未だ爲さざるに先だちて之を爲し其の爲す所が天意に背かざるをいふ

者也。利貞者。性情也。乾始能以美利天下。不言所利。大矣哉。大哉乾乎。剛健中正。純粹精也。六爻發揮。旁通情也。時乘六龍。以御天也。雲行雨施。天下平也。君子以成德爲行。日可見之。行也。潛之爲言也。隱而未見。行而未成。是以君子弗用也。君子學以聚之。問以辯之。寬以居之。仁以行之。易曰。見龍在田。利見大人。君德也。九三。重剛而不中。上不在天。下不在田。故乾乾。因其時而惕。雖危无咎矣。九四。重剛而不中。上不在天。下不在田。中不在人。故或之。或之者。疑之也。故无咎。夫大人者。與天地合其德。與日月合其明。與四時合其序。與鬼神合其吉凶。先天而天咎。後天而奉天時。天且弗違。而況於人乎。況於鬼神乎。亢之爲言也。知進而不知退。知存而不知亡。知得而不知喪。其唯聖人乎。知進退存亡。而不失其正者。其唯聖人乎。

坤。至柔而動也剛。至靜而德方。後得主而有常。含萬物而化光。坤道其順乎。承天而時行。積善之家。必有余慶。積不善之家。必有余殃。

坤は至柔にして動くや剛にして徳方なり。後るれば主を得て常なり。萬物を含んで化光あり。坤道は其れ順なる乎。天に承けて而して時に行ふ。善を積むの家は、必ず餘慶あり、不善を積むの家は、必ず餘殃あり。臣、其君を弑し、子、其父を弑するは、一朝一夕の故に非ず、其の由つて來る所の者は漸なり。之を辯じて早く辯せざるに由る也。易に曰く、霜を履んで堅氷至るとは、蓋し順を言ふ也。直は其れ正也、方は其れ義也。君子は敬以て内を直にし、義以て

殃。臣弑其君。子弑其父。非一朝一夕之故。其所由来者漸矣。由三辯之不早辯也。易曰。履霜。堅冰至。蓋言順也。直其正也。方其義也。君子敬以方外。敬義以方内。敬義立而徳不孤。直方大。不習无不利。則不疑其所行也。陰雖有美。含之。以從王事。弗敢成也。地道也。妻道也。

外を方にす。敬義立ちて徳孤ならず、直方大習はずして利しからざることを無し。則ち其の行ふ所を疑はざる也。陰、美ありと雖も、之を含んで以て王事に従ひ、敢へて成さざる也。地道也、妻道也、臣道也。地道は成すこと無くして、代りて終ふること有る也。天地變化して草木蕃し、天地閉ちて賢人隠る。易に曰く、囊を括る。咎も無く譽もなしとは、蓋し謹を言ふ也。君子は黄中通理、位を正しうして體に居る。美、其中に在りて、四支に暢び、事業に發す、美の至り也。陰は陽に疑はしければ必ず戦ふ。其の陽なきを嫌ふが爲也。故に龍と稱す。猶ほ未だ其類を離れざる也、故に血と稱す。夫れ玄黄とは天地の雜也、天は玄にして地は黄なり。以上坤卦

也。臣道也。地道无成而代有終也。天地變化。草木蕃。天地閉。賢人隱。易曰。括囊无咎。无譽。蓋言謹也。君子黃中通理。正位居體。美在其中。而暢於四支。發於事業。美之至也。陰疑於陽。必戰。爲其嫌於无陽也。故稱龍焉。猶未離其類也。故稱血焉。夫支黃者。天地之雜也。天支而地黃。

中正の徳を稱す 條理貫通すること或は疏通して文理ありと爲す 正しき位に當りながら下體に居るをいふ 無徳の中に蓄ふること 二手二足也、徳徳の自然に身體に顯はるゝをいふ 陰類を失はざるをいふ 天地陰陽の相峙りて相傷へばなりの意 是れ天地の正色を示す也

說卦傳

昔者聖人の易を作るや、神明に幽贊して著を生ず。天を參にし地を兩にして數を倚す。變を陰陽に觀て卦を立て、剛柔を發揮して爻を生じ、道徳を和順にして義を理む、理を窮め性を盡して以て命に至る。右第一章

① 神明は見るべからず聞くべからず其冥々の中に贊助を得たる故に幽の字を添ふる也 ② 草の名、もとごと訓ず以て筮すべし ③ 天は圓形、圓は三點を通過する故に三の數を持つわけ也、地は方形、方形は四邊なるが故に四の數を持つわけ也、三各々一奇なり、故に天を參にして三と爲る、四は二偶を合す、故に地を兩にして二と爲る、三と二との合したるものは五也之を衍して五十と爲す筮の數は之に倚りて起れる也 ④ 身、道と一なるをいふ ⑤ 行、義に合ふをいふ ⑥ 其條理を明にすること ⑦ 其徳性を尊ぶこと ⑧ 天の使命を全うすること

昔者聖人の易を作るや、將に以て性命の理に順はんとす。是を以て天の道を立てて、陰と陽と曰ひ、地の道を立てて、柔と剛と曰ひ、人の道を立てて、仁と義と曰ひ、三才を兼ねて之を兩にす。故に易は六畫にして卦を成す。陰を分ち陽

昔者聖人の易を作る也。幽贊於神明而生著。參天兩地而倚數。觀變於陰陽而立卦。發揮於剛柔而生爻。和順於道德而理於義。窮理盡性以至於命。

昔者聖人之作易也。將以順性命之理。是以立天之道曰陰與陽。

立地之道曰柔與剛。立人之道曰仁與義。兼三才而兩之。故易六畫而成卦。分陰分陽。迭用柔剛。故易六位而成章。

を分ちて、迭たがひひに柔剛じゆうかうを用ふ。故に六位にして章を成す。右第二章

● 一卦六爻より成るをいふ ● 六爻相かさまなりて貴賤の位を成す、其序亂れず故に章といふ章は文章也

天地定位。山澤通氣。雷風相薄。水火不相射。八卦相錯。數往者順。知來者逆。是故易逆數也。

天地位を定め、山澤氣を通じ、雷風相薄り、水火相射はずして、八卦相錯はる。往を數ふるは順にして、來を知るは逆なり。是故に易は逆數也。右第三章

● 並び作るをいふ ● 互にすくうて相害はざるをいふ

雷以動之。風以散之。雨以潤之。日以暄之。艮以止之。兌以說之。乾以君之。坤以藏之。

雷以て之を動かし、風以て之を散じ、雨以て之を潤し、日以て之を暄かし、艮以て之を止め、兌以て之を説よこばし、乾以て之に君とし。坤以て之を藏む。右第五章

● 萬物を指す ● 萬物を覆ふが故に君といふ ● 萬物を藏するが故に藏むといふ

帝出乎震。齊乎巽。離致役乎坤。說言乎兌。戰乎乾。勞乎坎。成言乎艮。萬物出乎震。東出也。震。東方也。齊乎巽。巽。東南也。齊也者。言萬物之潔齊也。離也者。明也。萬物皆相見。南方之卦也。聖人南面而聽天下。嚮明而治。蓋取諸此也。坤也者。地也。萬物皆致養焉。故曰

帝は震に出でて、巽に齊ひ、離に相見て、坤に致役し、兌に説信し、乾に戦ひ、坎に勞し、艮に成言す。萬物は震に出づ、震は東方也。巽に齊ふ、巽は東南也、齊ふとは萬物の潔齊なるを言ふ也。離とは明也、萬物皆相見る、南方の卦也。聖人南面して天下に嚮き、明に嚮ひて治む、蓋し諸を此に取る也。坤とは地也、萬物皆養を致す、故に坤に致役すと曰ふ。兌は正秋也、萬物の説ふ所也、故に兌に説言すと曰ふ。乾に戦ふ、乾は西北の卦也、陰陽相薄るを言ふ也。坎とは水也、正北方の卦也、勞卦也。萬物の歸する所也。故に坎に勞すと曰ふ。艮は、東北の卦也、萬物の終を成す所にして、始を成す所也、故に艮に成言すと曰ふ。右第五章

● 天帝又上帝と稱す即ち造物者也 ● 供役といふが如し、つかはるゝこと ● 言の字は意なきに唯上るること ● 何勞休息する意 ● 言の字意味なし單に成風するをいふ

致役乎坤。兌。正秋也。萬物之所說也。故曰說言乎兌。戰乎乾。乾。西北之卦也。言陰陽相薄也。坎者。水也。正北方之卦也。勞卦也。萬物之所歸也。故曰勞言乎坎。艮。東北之卦也。萬物之所成終。而所成始也。故曰成言乎艮。

神也者。妙萬物而為言者也。動萬物者。莫疾乎雷。撓萬物者。莫疾乎風。燥萬物者。莫熯乎火。說萬物者。莫說乎澤。潤萬物者。莫潤乎水。終萬物始萬物者。莫盛乎艮。故水火相逮。雷風不相悖。山澤通氣。然後能變化。既成萬物也。

神とは萬物に妙にして言を爲す者也。萬物を動かす者は雷より疾きは莫く、萬物を撓ます者は風より疾きは莫く、萬物を燥かす者は火より熯かすは莫く、萬物を説ばす者は澤より説ばすは莫く、萬物を潤す者は水より潤すは莫く、萬物を終へ萬物を始むる者は艮より盛なるは莫し。故に水火相逮び、雷風相悖らず、山澤氣を通じ、然る後に能く變化して、既に萬物を成す也。右第六章

● 神といふ名は萬物に妙なりといふ處よりつけたり也。或は言を之とむものあり ● 互に相待ち力を出すこと

乾は健也、坤は順也、震は動也、巽は入也、坎は陷也、離は麗也、艮は止也、兌

は說也。右第七章

● 單に德を以て言ふ ● 亦同じ ● 一陽、二陰の下に動く ● 一陰、二陽の下に入る ● 一陽、二陰の中に陷る ● 一陰、二陽の中に麗く ● 一陽、二陰の上に止る ● 一陰、二陽の中に説ぶ各々以て德と爲す也

乾を馬と爲し、坤を牛と爲し、震を龍と爲し、巽を雞と爲し、坎を豕と爲し、離を雉と爲し、艮を狗と爲し、兌を羊と爲す。右第八章

乾を首と爲し、坤を腹と爲し、震を足と爲し、巽を股と爲し、坎を耳と爲し、離を目と爲し、艮を手と爲し、兌を口と爲す。右第九章

乾は天也、故に父と稱す。坤は地也、故に母と稱す。震は一索して男を得。故に之を長男と謂ふ。巽は一索して女を得。故に之を長女と謂ふ。坎に再索して男

也。震。動也。巽。入也。坎。陷也。離。麗也。艮。止也。兌。說也。

乾爲馬。坤爲牛。震爲龍。巽爲雞。坎爲豕。離爲雉。艮爲狗。兌爲羊。

乾爲首。坤爲腹。震爲足。巽爲股。坎爲耳。離爲目。艮爲手。兌爲口。

乾。天也。故稱乎父。坤。地也。故稱乎母。震。

長。爲高。爲進。退。爲不果。爲臭。其於人也。爲寡髮。爲多白眼。爲近利市三倍。其究爲躁。卦。吹爲水。爲洗。瀆。爲隱伏。爲蟻。其於人也。爲加憂。爲心病。爲耳痛。爲血。卦。爲赤。其於馬也。爲美脊。爲亟心。爲下首。爲薄蹄。爲曳。其於輿也。爲多眚。爲通。爲月。爲盜。

と爲し、蚌と爲し、龜と爲す。其の木に於けるや、科上槁と爲す。良を山と爲し、徑路と爲し、小石と爲し、門闕と爲し、果樹と爲し、閭寺と爲し、指と爲し、狗と爲し、鼠と爲し、黔喙の屬と爲す。其の木に於けるや、堅うして節多しと爲す。兌を澤と爲し、少女と爲し、巫と爲し、口舌と爲し、毀折と爲し、附決と爲す。其の地に於けるや、剛鹵と爲し、妾と爲し、羊と爲す。

○ 虞翻氏は駁馬にあらざる之を疑は入るべしといへり ○ 謂にして物を養する意より取る、けしんばうの事也 ○ 平均の義 ○ 子も牛也 ○ くる色とき色とのが(あはひ)をいふ ○ 華なり ○ 大路なり ○ 藤鼻と同じ ○ 若竹也 ○ をぎとあし也 ○ 不詳 ○ かけ馬の事 ○ ひたひに白毛ある馬なり ○ 甲を脱きたがら曲りて地を出づるもの、ひつぎと訓ず ○ 其附風の處 ○ 深山なる生鮮の物 ○ 蠶の直なるもの ○ 車を成し送りずること ○ 小艇なり ○ 廣びたひのこと ○ しるまごこ ○ みぞの事 ○ 曲れるをためたはすこと ○ 湖の増潤すること ○ われの病 ○ 骨の立派なもの ○ さわぎ立つ心 ○ 首を下にさぐる事 ○ 馬の蹄の穢きもの ○ 物を曳くこと ○ 物のかわく意 ○ ナツぼんの事 ○ 蟻と同じ、にしの事 ○ はまぐりの事 ○ 中うつぼにして上の枯れたる木をいふ ○ 小路なり ○ 木の實草の背をいふ ○ 宦官の事 ○ くちばしの利くもの、或は齒牙の細の如きもの虎豹の尾をいふ ○ 子(かこ)の事 ○ 物のこはる、こと ○ ついたり、分れたよりること ○ かたくし

てしは、合サツ、也

其於木也爲堅多心。離爲火。爲日。爲電。爲中女。爲甲冑。爲戈兵。其於人也爲大腹。爲乾卦。爲蠶。爲蟹。爲蚌。爲龜。其於木也。爲科上槁。良爲山。爲徑路。爲小石。爲門闕。爲果樹。爲閭寺。爲指。爲狗。爲鼠。爲黔喙之屬。其於木也爲堅多節。兌爲澤。爲少女。爲巫。爲口舌。爲毀折。爲附決。其於地也爲剛鹵。爲妾。爲羊。

序卦傳

有天地然後萬物生焉。盈天地之間者唯萬物。故受之以屯。屯者盈也。屯者物之始生也。物生必蒙。故受之以蒙。蒙者蒙也。物之穉也。物穉不可不養也。故受之以需。需者飲食之道也。飲食必有訟。故受之以訟。訟必有衆起。

天地有りて然る後に萬物生ず。天地の間に盈つるものは唯萬物のみ。故に之を受くるに屯を以てす。屯は盈也。屯は物の始めて生ずる也。物生ずるとき必ず蒙なり。故に之を受くるに蒙を以てす。蒙は蒙也。物の穉なる也。物の穉なる、養はざるべからざる也。故に之を受くるに需を以てす。需は飲食の道也。飲食必ず訟あり。故に之を受くるに訟を以てす。訟必ず衆の起るあり。故に之を受くるに師を以てす。師は衆也。衆なれば必ず比する所あり。故に之を受くるに比を以てす。比は比也。比すれば必ず畜むる所あり。故に之を受くるに小畜を以てす。物畜へて然る後に禮あり。故に之を受くるに履を以てす。履んで泰にして然る後に安し。故に之を受くるに泰を以てす。泰は通也。物以て通に終るべからず。故に之を受くるに否を以てす。物以て否に終る可からず。故に之を受くるに

故受之以師。師者衆也。衆必有所以比。故受之以比。比者比也。比必有所以畜。故受之以小畜。物畜然後有禮。故受之以履。履而泰。然後安。故受之以泰。泰者通也。物不可以終通。故受之以否。物不可以終否。故受之以同人。與人同者物必歸焉。故受之以大有。有大有者

同人を以てす。人と同じうする者は物必ず歸す。故に之を受くるに大有を以てす。有すること大なる者は以て盈つ可からず。故に之を受くるに謙を以てす。有すること大にして能く謙すれば必ず豫ぶ。故に之を受くるに豫を以てす。豫べば必ず隨ふことあり。故に之を受くるに隨を以てす。喜を以て人に隨ふ者は必ず事あり。故に之を受くるに蠱を以てす。蠱は事也。事有りて而して後に大なる可し。故に之を受くるに臨を以てす。臨とは大也。物大にして然る後に觀るべし。故に之を受くるに觀を以てす。觀る可くして而して後に合ふ所あり。故に之を受くるに噬嗑を以てす。噬は合也。物以て苟も合ふべからざるのみ。故に之を受くるに賁を以てす。賁とは飾る也。飾を致して然る後に亨るときは則ち盡く。故に之を受くるに剝を以てす。剝は剝也。物は以て盡くるに終はる可からず。剝は上に窮まれば下に反る。故に之を受くるに復を以てす。復れば則ち妄ならず。故に之を受くるに无妄を以てす。无妄ありて然る後に畜む可し。故に之を受く

不可以盈。故受之以謙。有大而能謙必豫。故受之以豫。豫必有所隨。故受之以隨。以喜隨人者。必有其事。故受之以蠱。蠱者。事也。有事而後可大。故受之以臨。臨者。大也。物大然後可觀。故受之以觀。可觀而後有所合。故受之以噬嗑。噬者。合也。物不可以苟合而已。故受之以賁。賁者。飾也。致飾然後亨則盡矣。故受之以剝。剝者。剝也。物不可以終盡。剝窮上反下。故受之以復。復則不妄矣。故受之以无妄。有無妄然後可畜。故受之以大畜。畜然後可養。故受之以頤。頤者。養也。不養則不可動。故受之以大過。物不可以終過。故受之以坎。坎者。陷也。陷必有其所麗。故受之以離。離者。麗也。

るに大畜を以てす。物畜めて然る後に養ふ可し。故に之を受くるに頤を以てす。頤は養也。養はされば則ち動く可からず。故に之を受くるに大過を以てす。物はは以て終に過ぐべからず。故に之を受くるに坎を以てす。坎とは陷る也。陷れば必ず麗く所あり。故に之を受くるに離を以てす。離とは麗く也。右ノ篇

● 幼稚とてわかしくしきことをいふ ● 飲食は争の本なり ● 賤は誠の最も大なるもの也 ● 親比の意、し
たしみるふこと ● 物あつまりて少しづゝたまるなり ● 禮を行へば天下太平なり ● ふさがらむ、天下擾亂
の事をいふ ● 志を同じうすること ● 飽くまで飾りて通さんとすれば必ず誠を免れずと也

有天地然後有萬物。有男女然後有夫婦。有父子然後有君臣。有上下然後有禮義。有所謂夫婦之道。不可不終久也。故受之以恆。恆者。久也。物不可不終久。故受之以久居其所。故受之以遯。遯者。退也。物不可不終壯。故受之以終壯。

天地有りて然る後に萬物あり。萬物有りて然る後に男女あり。男女有りて然る後に夫婦あり。夫婦有りて然る後に父子あり。父子有りて然る後に君臣あり。君臣

女有男女。然後有夫婦。有父子。然後有君臣。有上下。然後有禮義。有所謂夫婦之道。不可不終久也。故受之以恆。恆者。久也。物不可不終久。故受之以久居其所。故受之以遯。遯者。退也。物不可不終壯。故受之以終壯。

ありて然る後に上下あり。上下有りて然る後に禮義錯く所あり。夫婦の道は、以て久しからざる可からざる也。故に之を受くるに恆を以てす。恆とは久しき也。物は以て久しく其所に居る可からず。故に之を受くるに遯を以てす。遯とは退く也。物は以て遯に終る可からず。故に之を受くるに大壯を以てす。物は以て壯に終る可からず。故に之を受くるに晉を以てす。晉とは進む也。進めば必ず傷るゝ所あり。故に之を受くるに明夷を以てす。夷とは傷る也。外に傷るゝ者は必ず其家に反る。故に之を受くるに家人を以てす。家道窮まれば必ず乖く。故に之を受くるに睽を以てす。睽とは乖く也。乖けば必ず難有り。故に之を受くるに蹇を以てす。蹇とは難む也。物は以て難に終る可からず。故に之を受くるに解を以てす。解とは緩む也。緩むれば必ず失ふ所あり。故に之を受くるに損を以てす。損して已まざれば、必ず益す。故に之を受くるに益を以てす。益して已まざれば必ず決す。故に之を受くるに夬を以てす。夬とは決る也。決れば必ず遇

以晉晉者進也。進必有所傷。故受之以明夷。夷者傷也。傷於外者必反其家。故受之以家人。家道窮必乖。故受之以睽。睽者乖也。乖必有難。故受之以蹇。蹇者難也。物不可終難。故受之以解。解者緩也。緩必有失。故受之以損。損而不已必益。故受之以益。益而

ふ所あり。故に之を受くるに姤を以てす。姤とは遇ふ也。物は相遇うて而る後に聚まる。故に之を受くるに萃を以てす。萃とは聚る也。聚りて上る者、之を升と謂ふ。故に之を受くるに升を以てす。升りて而して已まざれば必ず困む。故に之を受くるに困を以てす。上に困む者は必ず下に反る。故に之を受くるに井を以てす。井道は革めざる可からず。故に之を受くるに革を以てす。物を革むる者は鼎に若くは莫し。故に之を受くるに鼎を以てす。器を主る者は長子に若くは莫し。故に之を受くるに震を以てす。震とは動く也。物は以て動に終はる可からず。之を止む。故に之を受くるに艮を以てす。艮とは止る也。物は以て止に終る可からず。故に之を受くるに漸を以てす。漸とは進む也。進めば必ず歸する所あり。故に之を受くるに歸妹を以てす。其の歸する所を得る者は必ず大なり。故に之を受くるに豊を以てす。豊とは大なる也。大を窮むる者は必ず其居を失す。故に之を受くるに旅を以てす。旅して容るゝ所無し。故に之を受くるに巽を以て

不已必決。故受之以夬。夬者決也。決必有遇。故受之以姤。姤者遇也。物相遇而後聚。故受之以萃。萃者聚也。聚而上者謂之升。故受之以升。升而不已必困。故受之以困。困乎上者必反下。故受之以井。井道不可不革。故受之以革。革物者莫若鼎。故受之以鼎。主器者莫若長子。故受之以震。震者動也。物不可終動。止之。故受之以艮。艮者止也。物不可終止。故受之以漸。漸者進也。進必有歸。故受之以歸妹。得其所歸者必大。故受之以豐。豐者大也。窮大者必失其居。故受之以旅。旅

す。巽とは入る也。入りて而して後に之を説ぶ。故に之を受くるに兌を以てす。兌とは説ぶ也。説びて而して後に之を散す。故に之をくるに渙を以てす。渙とは離る也。物は以て離に終はる可からず。故に之を受くるに節を以てす。節して之を信にす。故に之を受くるに中孚を以てす。其信ある者は必ず之を行ふ。故に之を受くるに小過を以てす。物を過ぐることに有る者は必ず濟す。故に之を受くるに既濟を以てす。物は窮む可からざる也。故に之を受くるに未濟を以て終る。右下篇

- 體儀がそれによて定まる所あるをいふ
- 進みすぎればきずづくことあり
- 一家親み過ぐれば却つて中たがひするをいふ
- 物を取り失ふこと
- 破裂すること
- 井水は久しければ濁る、之をさらふれば又澄むことを得べし
- 一家の繼續者なれば器を主るといふ
- 其居る所を失ふこと
- まことを以て始終するをいふ

面无所容。故受之以巽。巽者入也。入而後說之。故受之以兌。兌者說也。說而後散之。故受之以渙。渙者離也。物不可以終離。故受之以節。節而信之。故受之以中孚。有其信者必行之。故受之以小過。有過物者必濟。故受之以既濟。物不可窮也。故受之以未濟。終焉。

雜卦傳

乾剛坤柔。比樂師憂。臨觀之義。或與或求。屯見而不失其居。蒙雜而著。震起也。艮止也。損益盛衰之始也。大畜時也。无妄災也。萃聚而升不來也。謙輕而豫怠也。噬嗑食也。賁无色也。兌見而巽伏也。隨无故也。蠱則飾也。剝闕

乾は剛に、坤は柔なり。比は樂み、師は憂ふ。臨觀の義は、或は與へ或は求む。屯は見はれて其居を失はず。蒙は雜りて著はる。震は起也。艮は止也。損益は盛衰の始也。大畜は時也。无妄は災也。萃は聚りて升は來らざる也。謙は輕くして豫は怠る也。噬嗑は食也。賁は色无き也。兌は見れて巽は伏する也。隨は故无き也。蠱は則ち飾也。剝は爛也。復は反也。晉は晝也。明夷は誅也。井は通じて困は相遇ふ也。咸は速也。恆は久也。渙は離也。節は止也。解は緩也。蹇は難也。睽は外也。家人は内也。否泰は其類に反する也。大壯は則ち止まり、遯は則ち退く也。大有は衆也。同人は親也。革は故を去つる也。鼎は新を取る也。小過は過也。中孚は信也。豊は故多く、親の寡きは旅也。離は上りて坎は下る也。小畜は寡也。履は處らざる也。需は進まざる也。訟は親まざる也。

也。復。反也。晉也。明夷。誅也。井。通而困也。相。遇也。咸。速也。恆。久也。渙。離也。節。止也。解。緩也。蹇。難也。睽。外也。家人。內也。否。泰反。其類一也。大壯。則止。遯。則退也。大有。衆也。同人。親也。革。去故也。鼎。取新也。小過。過也。中孚。信也。豐。多故。親寡。旅也。離。上而坎。下也。小畜。寡也。履。不處也。需。不進也。訟。不親也。大過。顯也。垢。遇也。柔遇剛也。漸。女歸待男行也。頤。養正也。既濟。定也。歸妹。女之終也。未濟。男之窮也。夬。池也。剛決柔也。君子道長。小人道憂也。

大過は顯也。垢は遇也。柔の剛に遇ふ也。漸は女の歸きて男を待つて行く也。頤は正を養ふ也。既濟は定也。歸妹は女の終也。未濟は男の窮也。夬は決也。剛の柔を決する也。君子の道長じ、小人の道憂ふる也。

● 顯は上より下に與へ、臨し下より上に求むるをいふ ● 時を得て大に奮むるをいふ ● 不威の災あるをいふ ● 女采の極無色に至るをいふ ● もとのまゝに事故生ぜざる也 ● 果物規矩すれば必ず地に落ちる也 ● 震さるゝ意 ● 相感すれば速かに應ずる也 ● 疎して之を外にすること ● 親んで之を内にすること ● 陰陽正に相反するの象あり ● 旅中に相知少きをいふ ● 炎上の事 ● 瀝下の事 ● くつがへる也 ● 六位皆位に當る故に定まる也 ● 離して婦となるは女の終也 ● 陽爻位に當らず故に男の窮といへるなり

易經終

昭和二年五月十八日印刷
昭和二年五月二十一日發行

漢文叢書 (非賣品)
詩經書經易經

不許複製

編輯者 塚本哲三
東京府下大久保町西大久保二百三十六番地
印刷者 三浦理
東京市神田區錦町一丁目十九番地
印刷所 有朋堂印刷所
東京市神田區錦町三丁目九番地
發行所 有朋堂書店
東京市神田區錦町一丁目十九番地

(本製山岡)

終

